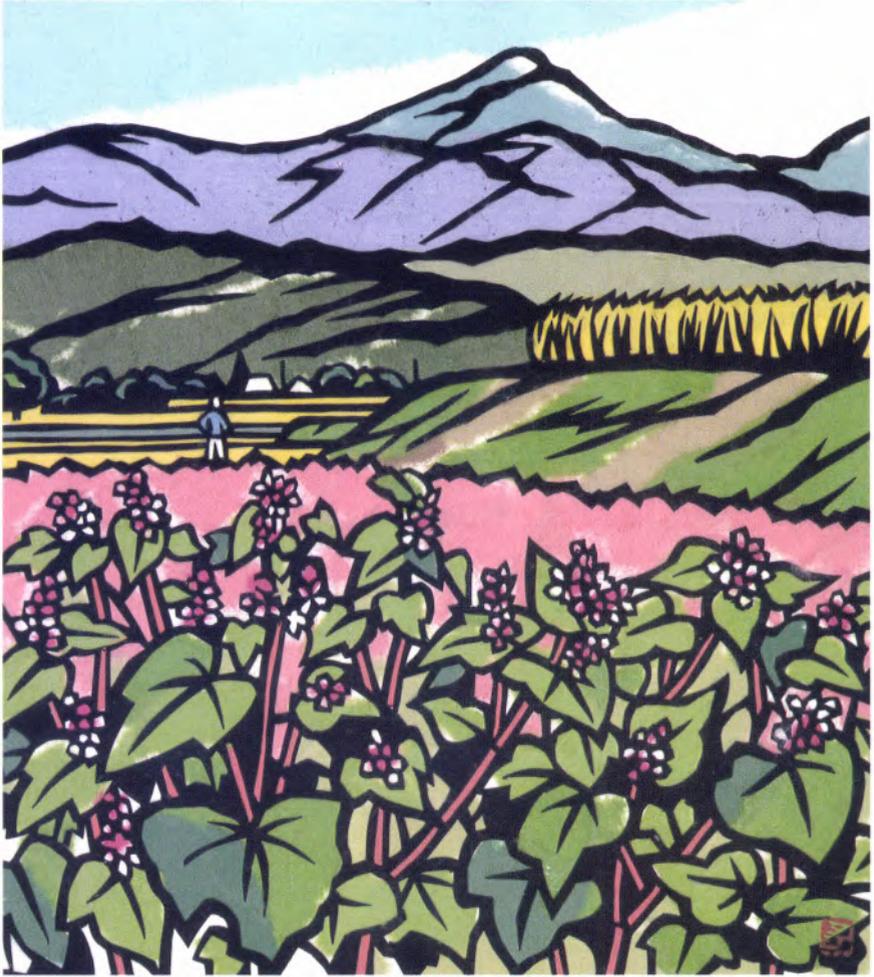


# 川柳塔

創刊大正十三年 通卷一 一二二二号



日川協加盟

令和二年度 六賞発表

No.1122

十一月号

# 年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。

同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円  
1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または

記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 十二月二十日

川柳塔社

## ★同人参加★

# 「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切 11月20日（本社事務所宛）

## 同人の皆様へお知らせ

本年十月に予定しておりました「同人総会」は、新型コロナウイルス感染症拡大のため開催できませんでした。

報告案件につきましては書面にて十二月号に同封いたします。

各位ご確認くださいますようお願い申し上げます。

川柳塔社

# 窓の月

小島 蘭幸

杉忌に思う衛成の窓の月

澤井 敏治

令和2年9月24日、私はNHKひるまえ直送便ひるまえ川柳の生放送に出演しました。

お題は「月」で応募総数は過去最多の一、一八八句でした。冒頭の作品は、私が選んだ特選句です。放送前日、台本が届いて驚きました。特選句のところに「鶴彬プロフィール」とあったのです。初めてのことでした。作品の解説もいつもより長くとつてありました。

それではここで特選句を放送した時の模様を再現してみましよう。MCは杉浦アナウンサーです。（ひるまえ直送便ひるまえ川柳は中国地方五県のみ放送されます）

杉浦：大阪府堺市、澤井敏治さん、おめでとうございます。大阪の方ですが今回特選に選ばれました。この句、初心者の中には難しく感じたのですが、解

説をお願いします。

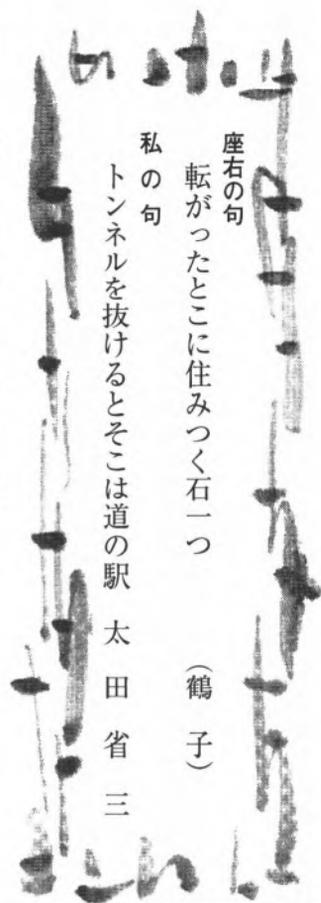
蘭幸：プロレタリア作家、鶴彬を詠んだ作品です。

鶴彬は戦時中、反戦の句を詠んだため、投獄され、29歳の若さで獄死しています。

杉浦：鶴彬は石川県出身の川柳作家、太平洋戦争中、多くの反戦の句を詠み、投獄、一九三九年の9月に「大阪衛成監獄」の中で亡くなりました。鶴彬の明日が9月ということでの句を詠まれたのでしょうか。

蘭幸：そうだと思います。彬が亡くなった「大阪衛成監獄」の跡地、現在の大阪城公園内には、「暁をいだいて闇にいる蕾」の句碑が建立されています。いつか戦争がなくなり、みんなが自由になることを願った句ですが、作者の澤井さんは、そういう想いも込めてこの句を詠まれたと思います。監獄の窓から月を見ていた彬の心情を思うと涙があふれてきます。

あとから聞いた話ですが、NHKは、鶴彬の出生地、石川県から鶴彬の写真、資料を取り寄せたそうです。写真、プロフィール、代表句は杉浦アナが鶴彬を紹介する間、テレビ画面に大きく映し出されました。多くの皆さまに鶴彬をテレビで紹介出来たことを喜びました。



座右の句

転がったとこに住みつく石一つ

(鶴子)

私の句

トンネルを抜けるとそこは道の駅 太田省三

## 川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「赤ソバ・信州芦ヶ沢」

### ■巻頭言 窓の月

小島 蘭 幸 ……(1)

### 類想のこと

橘 高 薫 風 ……(2)

### 川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 ……(4)

### 川柳塔の川柳讃歌 ㊦

木津 川 計 ……(39)

### 自選集

大矢 十 郎 ……(40)

### 句集の森

大矢 十 郎 ……(43)

### 温故知新

西出 楓 楽 選 ……(44)

### 水煙抄

西出 楓 楽 選 ……(44)

### 英語 de Senryu ㊦

吉村 侑 久 代 ……(63)

### 俳風柳多留 一三篇研究 3

吉村 侑 久 代 ……(64)

### 令和二年度

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞  
檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

(66)

## 「類想のい」と

橘 高 薫 風

日本川柳秀句集の校正をしていて、これはいけないと思った。

縄電車明日は親を積み残すの作品が目に見え込んで来たからである。投句者の住所は岡山県。それで決定的になった。それというのは、私は山陽柳壇の選をしているのであるが、昨年(の)二月に

縄電車いつかは親を積み残す 三宅武夫  
を入選第一席としたのである。それ故、事務局に諮り、発表後に問題となるであろうその一句を削除することにした。

私にも初心時代にこれに似た経験があった。句集「旅人」を心魂込めて読んでいた頃、川柳塔欄への投句二十句(その頃は二十句だった)に、

寄り添えと云はぬばかりに風が吹く

を出したところ、路郎先生に「これ僕の句やで」と言われたことがある。頭の中にあつた佳句が無意識のうちに出てしまい、まるで自分が作句したように錯覚して、自信めいた気持ちまで抱いて提出したのであった。私はその体験から、こういう類の思い違いには理解をもって臨んでいるのだけれど、やはり先輩の句は「神聖にして侵すべからず」である

せんりゆう飛行船<sup>⑩</sup> .....

新家完司 .....

愛染帖 .....

新家完司選 .....

檸檬抄「したたか」 .....

石橋芳山・古今堂蕉子共選 .....

一路集

「追う」 .....

成田雨奇選 .....

初歩教室「拾う」 .....

黒田茂代選 .....

インスピレーション・ナビ 印象吟 .....

高瀬霜石 .....

川柳塔鑑賞 .....

大西泰世 .....

水煙抄鑑賞 .....

安土理恵 .....

柳界展望 .....

山口高明 .....

九月本社誌上句会 .....

須崎 豆秋 .....

各地柳壇（佳句地十選／木田比呂朗・倉益一瑤） .....

相原 一善 .....

十一月各地句会案内 .....

（103） .....

■編集後記（ひとこと／原田すみ子） .....

朱夏・憲彦 .....

座右の句

綴じ代のようなところで生きている（芳光）

私の句

接続詞ドアの取っ手に触れたまま 岡崎 美知江

のだ。

路郎先生は、類想句の処し方にも厳しい人だった。先生のお供をして林宏子さんと四条の仲源寺での川雑京都支部の月例会に初めて行った時のこと、披講の途中で先生はいきなり、「その句は、誰その句と同じだから取り消した方がよい」と大声でたしなめられた。名のある選者に対して失礼ではないのか、小句会だから大目に見てもよいのでは、という斟酌はいさかもされなかった。先生は、いのちを削るようになって作句をされたので、個性的で抜きんでた句を大切に扱われたものと思う。最近のことだが、イヤリングいやいやよと揺れている

須崎 豆秋

一年の計呑みながら呑みながら

相原 一善

と同一の句を目にしたが、過去に記憶したものをつらかり投句されたのだろうと受け取りながらも、そういう過ちが重なることと、それとなく注意をすることになっている。ペテランといえども句会で句の出来ぬときは、自分が遠い過去に発表した句に少し手を入れて出句したくなることもある。そして、入選をしてもさびしさがつきまとい、没になってほっとしたりもするものである。

私は、路郎先生に初歩の時代から、作句者も選者も、常に修羅場を潜っていることを教えられた。

（平成元年4月号目次下）



小島蘭幸選

越谷市 久保田 千代

振り向けば共に歩んできた靴  
女いつも許してばかり米洗う  
棘のない大阪弁に助けられ  
やる気ある人はしっかり列に居る  
いくつ覚えいくつ忘れて季の移る  
もういいと言うまでマスク外さない

島根県 伊藤 寿美

これだけは言う孫三人を有り難う  
藤椅子に座る五歳のルノアール  
巣籠りで覚えた鬱と蟄居の字  
触診をする医者居なくしたコロナ  
シールド越しの面会にある残尿感  
感染者ゼロの古里帰れない

大阪市 栃尾 奏子

焼き芋がひとつ恋心がふたつ  
ワタシにもあったキラキラ十五歳  
荷造りの中に後悔夢その他

選んでえらんであなたと生きているんだね  
還暦の横顔にまた恋をする  
見送って巣立って二人分になる

大阪市 高杉 力

無口だが鉛筆はいつも2B  
片方だけの靴下が三つある  
大丈夫まだ呑んでいる吠えている  
またあいこまたまたあいこまたまたあいこ  
お皿からはみ出している新秋刀魚  
名声は要らぬ自由な雑魚がいい

倉吉市 牧野 芳光

終章を測って柚子の木を植える  
幼なじみ幼い頃のままの顔  
もう少し頑張ればなる熱中症  
灰皿を囲んで話弾みだす  
昨日より今日心張り棒が抜けていく  
髭を剃るたび老臭が湧いて出る

羽曳野市 吉村久仁雄

キッチンには妻が鼻唄うたう場所  
飯二杯ペロリと食べる旅の朝

ロバのパン屋来てから里を町と呼ぶ  
変な世だ正しい故に無視される

恐いから体重計は月一度  
古すぎるしきたりだから新鮮だ

今治市 永井松柏

路地裏に酸漿熟れていた昭和  
固すぎる結び目人が寄りつかぬ

潔く最前線に立つ男  
逃げ足の速い男が勝ち残る

物申したいこともある輩である  
十年は無理かも五年日記書く

桜井市 安土理恵

できすぎた言い訳背中で聞いている  
はっきりしない男だけれど夫やし

洗濯はボクがしたいと言うてきた  
歯車が少し変わってきたみたい

きりきり舞いさせたあげくの大きいき  
十九の決断怒った父に会いたいな

鳥取県 斉尾くにこ

星印つけてもらってから光る  
ミルフィーユ重なり合って老病死

逃げないで蜻蛉散歩をしてるだけ

散歩道イタチに会釈されました  
声かけて寄って金魚も朝ごはん  
新しいルールに則し咳をする

松江市 石橋芳山

夕立のあとからペーミンント味  
ほら貝の中へと恥を詰めている  
肝臓にドメステイックに昼の酒

自己嫌悪ブカブカ浮いている  
素直にはなれずに曲がりくねる水

アケビ割れ柘榴も割れてからニヒル

尼崎市 山田耕治

おいしいと言ってくださいリン鳴らす  
誰か来たらしいぞ蝉が鳴き止んだ

本日もよろしく机兼お膳  
またくるね南京炊いて娘が帰る

机這うハエトリグモよ行きなさい  
母はもう帰りのことを案じてる

松山市 宮尾みのり

縫上げというつましさもあつた過去  
何もかも捨てよかやじろべえのウツ

真相の程は誰にも言わず逝き  
思い出にパステルカラー足して若い

ファミレスも老舗も出前する自粛  
冷凍に慣れてサンマの値も知らず

松山市 栗田忠士

緑陰に憩う魁夷の白い馬

想念の彼方孤独が降り積もる

着地した綿毛が迷う番外地

キャンセル通知敬老会もお祭りも

降りても一人乗っても一人一両車

三猿の教えに忍従の歴史

神戸市 敏森廣光

リハビリを超えて踏み出す明日の道

足の手術余生を強く生きるため

病室ではやさしく聞ける妻の声

退院したら寿司にステーキ赤ワイン

病室になぐさめくれるスマホです

安倍退陣マスク大事にとっておこ

和歌山市 福井菜摘

頑張れと今朝もエールをくれる影

感動も挫折も掬ってきた両手

働いた自負を背骨にして生きる

とりあえず笑顔を見せておく保身

終の章まだたつぷりとある八十路

うさぎ小屋今日もドラマが生まれるよ

土佐清水市 辻内次根

カナカナが鳴いたすっきり暮れていた

野菊描く早一年の白い雲

お盆の夢の妻は元氣そうだった

一つずつ手放す秋の日を受けて

幸いに里に昔の空がある

酔っている頭で測る死への距離

藤井寺市 鈴木いさお

少年のように夢中になれる趣味

独りになつたらすぐにも死んでしまえそう

貧しかったんだね啄木も一葉も

元氣そうな主治医の顔を見て安堵

あの頃に戻りたくない戻りたい

男の子生まれ聡太と名付けたり

犬山市 金子美千代

じっくりと楽しんだアルバム整理

フルーツパフェとお喋り夢に出る自粛

鍾馗様もアマビエさんもどうか来て

経済を回す冷蔵庫を買って

アンチエイジングせめて背筋をピンとする

外出着出番なくして季は巡る

堺市 奥時雄

安倍さんもボヤきたいことあるだろう

悪気などさらになさそう安倍夫人

災害は首相の休み狙い撃ち

身長で選んで欲しい次期首相

コロナ禍は災厄ばかりとは言えず

横綱は有給休暇よく使い

大阪市 江島谷 勝 弘

あぶないぞ思いながらも赤のれん  
大ジョッキ握れば心弾み出す

タイガース悪口言うてすまなんだ

テレビ消せば時間たっぷりありました

準備完了財布スマホに鍵マスク

コロナ禍も晩酌できるありがたさ

米子市 吉 田 陽 子

ジャンケンポンあいこで辿り着いた今

挫折などしない気儘にスクワット

ご世にマスクしたまま髪カット

分厚い手紙読んだのはもう遠い日々

曼珠沙華死者は神なり仏なり

傷跡がいつばいあつてまだ元氣

高槻市 片 山 かずお

占いの悪いところは聞き流す

なぜだろう悪い予感がするカラス

コロナやし暑いし休めと妻が言う

ステイホーム夫婦に少し隙間風

外出自粛少うしボケてきたようだ

今日も無事にと毎朝神の鈴を振る

堺市 矢 倉 五 月

エンドロールにひと際でかく夫の幻

勝負服着て行く心地さえ無くコロナ

リモートにドア開けられぬ孫の部屋

ホームウェアで一日過ぎた自肅の日  
よく産んで育てたと見る娘の笑顔  
急行は止まらないけど好きな街

鳥取市 倉 益 一 瑤

愛されてる錯覚もよしおほろ月

ひと色が足りぬ私の風景画

未完の窓いくつも描いて暮れてゆく

わたくしをひまわりにした孫の笑み

もう背伸びすることはない夕焼けよ

計画通りいかぬ良かったなと思う

上尾市 中 村 伸 子

入院の電話珈琲冷めている

充電完了今日は何だか冴えている

困ったら言つてねと言う空手形

散歩時の雨がたまにはうれしい日

岩合さんの猫は格別猫嫌い

銀行もマスク取れとは言いにくい

竹原市 石 原 淑 子

新米のてんこもりです御仏飯

月影に刈田の案山子満足氣

経済もコロナも拉致も新総理

コロナ禍を十分間の大火花

めいめいが自分ファースト茶の間の灯

背高のコスモス風に恋をする

東かがわ市 川崎 ひかり

かけ違うボタンそのまま秋に入る

決断の二者択一に夜が白む

欲出した時から迷い深くなる

どんな世になろうと明日へ夢を織る

猛暑日におせちの予約先ず済ます

松山市 古手川 光

真夏日を猛暑日にする蝉しぐれ

うるさいが終りゃ寂しい蝉しぐれ

わが人生リセットしたいあの頃に

あたふたの私を嘔う蝸牛

はつけよいコロナに軍配が上がる

松山市 柳田 かおる

青い空にんげんらしくなる葉

八合目あたりで息をととのえる

訳ありの過去とは知らぬシユレッダー

雑草に元気をもらおう土踏まず

点滅する残り時間をいとおしむ

西予市 黒田 茂代

病室の正面に城癒やされる

夜間照明終わってお城無に還る

目覚めるといつもの位置にいつも城

明け空に切り絵お城のシルエツト

城と森たのしい童話思いつく

西予市 西田 美恵子

足して引く引いては足して古希も過ぎ

洗って洗って一つ残ったのがこころ

美しく老いてゆきたい鬼灯よ

これも世の流れか国旗立ててない

哀しい人が抱けば哀しくなるお花

唐津市 坂本 蜂朗

五十年とづくに過ぎてまだ夫婦

治療中なのにときめくから困る

年寄りに手加減をせぬ向い風

痛風が肴にもなる酒の友

耳遠く尿はだんだん近くなる

唐津市 山口 高明

大司教だって怖いよコロナ熱

雄渾の筆が走った書道展

着るものは妻のセンスに任せてる

ラケットを振れば青春蘇る

コロナ禍影が薄れた北のドン

熊本県 岩切 康子

避難命令小心者と家籠る

戦後75年優しい先輩思ひ出す

杖の次手押し車で生きるとうす

医者曰く手術は出来ぬ八十四

ねばならぬ左脳動かず句が出来ぬ

熊本市 杉野羅天

古の葉書き舞い込むよき日なり

したたかに生きた男の早仕舞い

黙禱し露地の西瓜を食っている

コロナ来て歌を忘れたカナリヤに

阿蘇涅槃何を天下に物申す

北九州市 小松紀子

八十歳何と自由で面白い

手をつなぎ笑い亡夫と歩いた星ふる夜

残り時間自分らしく生きる終活

熱中症こわく節電やめました

だとしてもせみとる子供見あたらぬ

札幌市 小沢淳

コロナ禍に北海道が空いている

美か醜かあのジーパンに穴をあけ

汗かいて手にしたものは離れない

戦いだ私の値札つけ替える

後輩が淳ちゃんと呼ぶ人のよさ

塩竈市 木田比呂朗

旬の味サンマ冷凍だったとは

留守番へ投資電話が離さない

今日もまた牽制球で脅される

好機でもいつもバントの指示が出る

GOTOにまた揺れ出したフルムーン

男鹿市 伊藤のぶよし

ウイルスで一変景気寒する

花を嗅ぐ行きも帰りもいい匂い

長寿のおかげコッペパン美味すぎる

きつちりと教える母の座り肝脈

茜雲あいたい人の貌になる

弘前市 稲見則彦

家呑みに付き合う寅とさくらです

天気予報あてにならない事ばかり

この庭はわたしのものと猫じゃらし

そこまでと出掛ける癖がとれました

自問自答しても明日が見えぬまま

弘前市 今愁女

老いたとて早寝早起き自立心

備忘録兼ね全て書き込む日記帳

テレビも見ることが新聞読むは日課なり

土弄り疲れがきたら昼寝する

どうすりゃいいの失わぬ恋心

朝霞市 前田洋子

菓ごもりに困らぬ雨もカミナリも

無精者に輪をかけたのは新コロナ

また人が遠退く宅配BOX

大トロに負けじとサンマ値を上げる

サンマ寿司今年は拝むこともない

東京都 川 本 真理子

人類以外いつもの夏を満喫す  
潜んでるうちに蓄えられるもの  
道具箱に体温計がいられてある  
一人つきりを確かめては安心する  
落書きで余白を埋めるカレンダー

東京都 まえで とよこ

熱中症アラート 葉ばかりとなる日日草  
なでしこのつぼみふくらむ熱帯夜  
おなかペコペコ戦争映画みたあととは  
コンビニにおにぎりならぶ平和こそ  
尽きるまで時間うばった新コロナ

八王子市 川 名 洋 子

この猛暑エアコンつけて水飲んで  
リモートの帰省に無縁アナログ派  
カレンダー真つ白のまま夏終わる  
コロナ禍にホッと安らぐ花生ける  
小さい悩みは捨てよと山が言う

横浜市 川 島 良 子

クーラーは贅沢品から必需品  
アベノミクス80点という疑問  
マスクにも拘りがあり日本製  
テレワークのれんが売れているらしい  
仏壇にアマビエさまも鎮座させ

横浜市 菊 地 政 勝

背伸びして聞いてあげたい頼みごと  
テレワーク息子の仕事振りを見る  
ちゃぶ台が小さくなつたディスプレイ  
握手ハグ無い再会のエアタッチ  
気休めと思うマスクをはずせない

愛知県 早 川 遯 行

チャンネルを妻に譲って風呂へ行き  
嫌われぬように家族に気を遣い  
人間は苦しむように出来ている  
ゆっくりでいいと老後をいたわられ  
危機感のない若者で混む渋谷

犬山市 関 本 かつ子

日焼けした梨を選んで娘に送り  
社会との関わりを断つ家族葬  
幸せな庭にブランコ三輪車  
国民で選んでみたい次期総理  
冷麦を何度も追加した猛暑

鈴鹿市 小 河 柳 女

とんとんとノックもせずに病魔くる  
難病の顔もわからずつきあっている  
生きるとは歌って前に進むのです  
養女となって生きるつらさを知りました  
がまんがまんの大きな山になりました

富山市 島 ひかる

川柳塔読む最中に安倍辞任  
ウォーキングいつも賽錢握り締め  
火災保険長期に掛けてまだ生きる  
草むしり除雪まだまだ苦にしない  
ペットボトル一つで命救われる

可児市 板山 まみ子

楽しみを制限されてふとり気味  
起きてからコロナと言わぬ日が来るか  
行くなから行けと政府にせかされる  
料理法変えつつ今日も安い茄子  
暑くてもきちんと食べてウォーキング

京都市 清水 英 旺

ストレスを持ち越したまま夏がゆく  
政治家の灰汁には弱いコロナ菌  
平穏な刻カミさんの長電話  
きのうきょうあすも楽しいウォーキング  
新聞で知る後輩の死合掌

京都市 藤井文代

百歳時代この現状で自信なく  
おばさんの話題は過去の事ばかり  
コロナも株も読めない中で兢兢と  
熱帯夜生き返ります虫の声  
足りないまま精一杯で生きた今

長岡京市 山田葉子

鏡には今日も元気と自己暗示  
凶星だけどクールに言われすつきりと  
ほどほどに空気を読んで群れにいる  
踊り場で遊び心を巻き戻す  
八合目余白をうめる絵の具とく

八幡市 今井 万紗子

老いてきて少しの頑固許されよ  
墓終いこれでよかった汗拭う  
生かされる事神と仏に預けよう  
マスクの中みんな笑顔でいてほしい  
朝の散歩何時もの仲間笑み返す

大阪府 米澤 俣子

初水揚げのサンマの競り値高級魚  
大方は無ければ無いですんだのに  
宝生寺のお守り鈴のシヤラシヤラと  
病院の壁白く無口で疲れ  
懸命に生きてきて只のばあさん

大阪市 磯島 福貴子

フル稼働皆勤賞をエアコンに  
コロナ禍で我が家のモラル塗り変わる  
明日明日と先送り今そのつけが  
すだち大根高値の秋刀魚待ちあぐむ  
出来ぬ事段段増えてもどかしい

大阪市 岩崎公誠

八十のドヤ顔なんか値打ちない  
甘いはなし後でわかった落し穴  
人間の生きてるところ菌も棲む  
老いひとり着地点消え立ちつくす  
ハハハハハと五回笑うと出る元氣

大阪市 岩崎玲子

たつぷりの時間ありすぎ悩んでる  
電車バス乗り方忘れそうな日日  
ストレスも限界ですよコロナ菌  
老体に日日のマスクはしんどおす  
おもしろい事探さなこころ萎えるがな

大阪市 内田志津子

年金で何はともあれ平泳ぎ  
ぶれないで躲す男の太い骨  
父母同居ハードル上がるプロポーズ  
満足を知らぬ都会の寂しい目  
訥訥と語る喪の妻信をなす

大阪市 宇都満知子

子育ての記憶は私の種火  
三日月が雲のマスクをしてござる  
丹田も秋の呼吸で結跏趺坐  
秋のバトンを鯛雲羊雲  
秋麗の窓休日二人レストラン

大阪市 榎本日の出

オンライン相談されて気がしずみ  
結局は心動いたのはお金  
一人では出来ないことで悩まされ  
名も知らぬ花ひっそりと咲いて見せ  
人間にすぐ馴染みますウィルスだ

大阪市 榎本舞夢

コロナ自粛酷暑と共に疲れ果て  
夢描き楽しい老後吹っ飛んだ  
貰ったと手作りマスク主人から  
ファッションに合わせてマスク取り替える  
マスク一つ心が和む有難さ

大阪市 大川桃花

気難しい所が好きと言う猫派  
耳打ちとメモで大臣知った振り  
猛暑去り花屋にちよっと寄る余裕  
台風被害報じ北朝何思う  
囁み合わせ会話互いの思い込み

大阪市 大治重信

幸せは妻の作ったまぜ飯  
永き夜優しい人と銀の匙  
立葵妻を悪女と思う日に  
皆死んで卒寿の平和合掌す  
蝶妙齡風に乗って楚楚と消え

大阪市 奥村 五月

づばらやの看板降ろすコロナ菌  
握手さえできぬが心通じ合う  
扇子より手で持つ小形扇風機  
何時の日か再生すると繁華街  
家でなら妻も笑顔の三杯目

大阪市 小野 雅美

喜怒哀楽涙滲んでややこしい  
影ひとつ戯れ夜の散歩道  
不眠症スマホに罪はないけれど  
身の程は知っているから責めないで  
わたくしを証明するだけの免許

大阪市 笠嶋 恵美

名菓には心をほぐす何かある  
花一輪さびしげらずに凜と咲く  
体調の悪さ治ってからわかる  
エアコンの買い替えせまるこの暑さ  
六甲山眺めゆつくり気の保養

大阪市 金川 宣子

好物の酒やステーキ止められる  
景気よく高い野菜を刻み込む  
秋講座何を習うか思案中  
遠くから夫とわかる苗えらび  
携帯に鍵くつつつけて小言なし

大阪市 川端 一步

たたかいと折りのマスクして勝利  
喜びの握手できないのがつらい  
15年生きて白寿を祝いたい  
その歳でがんばらなくてよいと妻  
退院近く看護師さんはみな綺麗

大阪市 古今堂 蕉子

無観客塔のまつりの寂しけり  
ゆるやかな筋を通して生きてきた  
孫就活今考える輩となれ  
恋なんて言いつつ友は恋を詠む  
あなたの顔見飽きないわと月に言う

大阪市 近藤 正

自助共助公助逆立ちした政治  
七枚のマスク優勝したなおみ  
むらさきの百日紅咲く彬の碑  
リモートで仕事ができる過疎の村  
万博のマークいかにも不気味です

大阪市 坂 裕之

ほどほどに御近所さんとお付き合  
きつと来る嬉しい知らせ酒用意  
毎日を楽しく生きるごまかさず  
先輩のひと言あって前を見る  
コロナ禍に真夏日もあるこの九月

大阪市 高杉千歩

大阪市 津村志華子

スロースロークイック昔のダンス車椅子

やがてくる訣れ今度は主役です

永かった昭和よ全てが華だった

立って見せたいフレアスカートお洒落して

ミニカイロ腰足昼夜絶やせない

大阪市 田中廣子

アメリカの山火事凄い心痛む

なおみさんマスクで抗議素晴らしい

香港の平和なくらしいつになる

はじめての外歩きこわい膝痛む

我慢してリハビリはげむつらい日日

大阪市 田中ゆみ子

イヤホンを外し今宵は虫の声

ありがとう笑顔をくれる庭の四季

ご苦労さん漬物石の味加減

子や孫を見守る柿の木を植える

蕎麦枕ゆっくり母と夢の中

大阪市 谷口義

帽子被ると蓋をしたようになり

家出する必要のないひとり者

白髪までは隠してくれないマスク

七十代は記憶にないほど早かった

五十年亡父がだんだん近くなる

肉食菜食おいしおいしと長寿箸

ほうじ茶とポップコーンの午後三時

世の中はきびしいものよカスミ草

ペランダで月とおししゃべりしています

二世帯の二階と下にある掟

大阪市 寺井弘子

高値つく秋刀魚肴に酒交わす

シンブルに生きてやんわり衣食住

残り火がかすかな人と飲むワイン

温もりがとどく足湯の国訛

病み上がり一歩二歩へと試歩の杖

大阪市 寺本実

付度をしてはくれない大腸炎

逆境に強いとだけはほめられる

旅支度したがさっぱり宛がない

公園のドバト柔では生きられぬ

真夜中に疼く時効のない痛み

大阪市 中井萌

ウイルスにマスクの中でアカンベエ

白髪染め老いて麗しそれなりに

友人に一人暮らしが増えてきた

ざわめきが消えて初秋に人恋し

食事会黙々と食べ目で笑う

大阪市 原 田 すみ子

ステイホーム医者通いすらおしやれする

四ツ葉クローバー見付けてもおいとく

執着を急にスパッと切れる老い

老いた寝顔わたしもきつと同じ顔

ビニールブルーせめて一日夏休み

大阪市 平 井 美智子

客ひとり乗せ午後二時のバスが出る

あちこちの隙間に鉛ちゃんを詰める

今はただ無事ということだけでよい

雲間から聞こえる母の怒鳴り声

踏んばってみようか空はまだ高い

大阪市 平 賀 国 和

令和二年コロナに猛暑台風禍

世界中に冷や水かけた新コロナ

このままでは亜熱帯化の秋津島

コロナに慣れ自粛解除で運試し

新総理冷たい政治やめて欲し

大阪市 藤 田 武 人

目に見えぬ敵と戦う人の知恵

幻を追って素顔を置き忘れ

楽しさよ続け斜めの砂時計

分解を楽しみ母に叱られる

充実の人生きつとアブラゼミ

大阪市 宮 崎 シマ子

一人淋しくホームの窓の十三夜

台風の破片も見せず十三夜

姉妹か父母かと思う十三夜

かぐや姫になって行きたい十三夜

猫鳴いて正気にもどる十三夜

大阪市 山 本 加お里

ご先祖のダブル年忌で落ちついた

住職がマスクをつけてお経読む

バリバリと自分の歯です傘寿です

家がいい足腰きたえ白寿まで

人前で咳もできない鋭い目

大阪市 横 山 里 子

親子でも保つソーシャルディスタンス

ボケたのか自粛のせいかな言葉出ぬ

会えないだらうなワクチンできるまで

自家採りの茗荷に添える絵手紙を

またですか虎が負けたとパチンコ屋

大阪市 若 本 安 代

欠点の無い人なんて味気ない

残金をゼロに楽しい旅終わる

一字ずつ無に還ってゆく写経

成るように成るを信じて焦らない

きつと来るいい日の為にスクワット

堺市 柿花和夫

シンプルな名刺が語るお人柄  
勸善懲惡それが楽しい時代劇  
決定打無口な人のひと言が  
高笑いしない大穴当てた日は  
自肅中何もせぬのに三尺寝

堺市 源田八千代

存えば戦争もコロナ禍も知る  
盆参り僧の読経も独り聴く  
こんな年柿は不作で丁度好い  
何も彼も放り出して如何するねん  
不死鳥なり寂聴徹子中尾ミエ

堺市 齋藤 さくら

もつともな忠告くれる友が居る  
言い返す元氣無いから笑ってる  
泣き言を言わぬ子供に育ってる  
子には子のしあわせがある引き止めぬ  
コロナ禍で秋が来たのも忘れてた

堺市 坂上淳司

コロナ禍で誌上大会大はやり  
披講呼名あのやり取りが懐かしい  
句会後の飲み友達は元氣かな  
アウイーナへの道順忘れないかなあ  
コロナ禍の句会マスクの目が笑う

堺市 澤井敏彦

亡き母のころにも似た丸い月  
20年遅れノストラダムス降る  
八一五平和を告げる大落暉  
梢の先に居場所探している晩夏  
秋夜長すずむしを聴く月見酒

堺市 遠山唯教

ゆとりもち変化に気づく季節感  
貧しさがみな人間を軽くする  
受けとめてくれる強さがたのもし  
散髪に行くのは正月と盆  
鉦三つたたき念仏盆供養

堺市 内藤憲彦

送り火自肅ちよつと淋しい夏が行く  
お天道様へ家内安全だけ祈る  
百歳まで生きるつもりの般若経  
さあ僕の大きなハート召しあがれ  
秋冬に備えイソジン大人買い

池田市 太田省三

ネクタイを締めて出勤夏終る  
マドンナが豹柄で来たクラス会  
駅までの歩数が増えた定年後  
元妻が今はセレブの高級車  
妹は客のつもりの里帰り

貝塚市 石田 ひろ子

肩の力抜くと意外な風に会う

三世帯たまに一人もいいもんだ

時どきは自分を褒めて花を買う

炎天と勝負するよに行くポスト

ひらがなのように背中も丸くなる

河内長野市 大島 ともこ

手軽にはもう出来ぬハグハイタッチ

トリセツが分かりにくさを倍にする

心地良く臉が閉じるクラシック

お気楽に生きた人生穴だらけ

恋の予感胸のアラート鳴り止まず

河内長野市 梶原 弘光

身の丈に論され折れたボクの鼻

鈴虫にきゅうりシゴトがひとつ増え

冷たい目歩きスマホに突き刺さる

救急車のビポビポ夢とコラポする

10年は持ちそうボクの各パート

河内長野市 木見谷 孝代

GoToへ行こかやめよかあみだくじ

何もかも解禁なのが恐ろしい

何故なのか理由が知りたいメダカの死

折りに触れ私を浄化する涙

お彼岸会今年は夫へ経を読む

河内長野市 黒岩 靖博

三密で家族の和にも散る花火

炎天下鶏頭そらを睨みつけ

したたかな夏の草にも秋の風

票集め夢中になって検査され

噂だけあふれ真実かやの外

河内長野市 辻村 ヒロ

無言の目全部わかると言われてる

残り火を必死に守る火吹き竹

ときめきに勇気をくれる赤い服

思考力暑さのせいで退化する

親と子が老眼鏡でメニユー見る

河内長野市 中島 一彌

慣れちゃダメ疲れたら負け新コロナ

どん底から夢中で生きてきた戦後

飽食に溺れ飢餓を忘れていませんか

小遣いにコロナ自粛が生むゆとり

良くできた和製英語が跋扈する

河内長野市 藤塚 克三

何かある朝から妻の無言の矢

反省文正直書いて悔やみ酒

自粛中自信失せゆく侘しさよ

なるほどと相槌打てば場が和む

金婚式笑い飛び交う三世代

河内長野市 村上直樹

十万円防災グッズ買い替える

耐浴びてゆるんだ脳に活を入れ

いま一度カンナ燃え立つ老いの恋

テクシーと言う二輪車でさあ影よ

七十五年御霊に恥じず眠れるや

河内長野市 森田旅人

家族写真撮れて安堵の終末期

思い残すことがないとは豪勢な

いつまでも好きと言われて旅立ちぬ

穏やかな家族葬には茶の旨し

公にせぬ葬送に安堵の日

河内長野市 山岡富美子

気力までうっかり削いだダイエツト

秘め事はわたしにもある袋綴じ

大きめのサイズに紛れ込む本音

うっかりも想定内のスケジュール

想い出に水遣り枯らさないように

岸和田市 岩佐ダン吉

軽やかに言うてることが本音だな

一瞬の笑顔で全て溶けている

コロナ禍を人災さらに深くする

七合目逡巡ばかりくり返す

長広舌もう結論は見えている

四條畷市 吉岡修

読みさしにお札挟んだまま書棚

エンジンをご機嫌にする酒二合

祝福はなるべく金でたのみます

本人はごく真面目です厚化粧

わけあつて集めたあれもこれもゴミ

吹田市 太田昭

無免許の私が歩く車椅子

激流を渡った男しゃべらない

ヒロシマを語れるひとも居なくなり

武運長久も千人針ももう忘れ

急がなくてももう終点は見えている

高槻市 初代正彦

コロナ後もマスクの世話になるだろう

コロナ禍の酷暑を凌ぎ小さい自負

リモートの子らの笑顔に癒される

じゃじゃ馬に手こずるときもあつたよな

心地よい風にも押され子の門出

高槻市 杉本義昭

大坂なおみ差別を叱る黒マスク

二人暮し少し頑固な妻という

ステイホーム慣れてすっかりなまくらに

コロナ対策なくてただただ祈るのみ

お金さえあればあなたに用はない

三密禍市中感染底知らず

ワクチンの治験材かな高齢者

また逮捕されても給与お役人

夏痩せに背骨つっぱる胡座かな

スマホ禍で日々に欠けゆく独創力

高槻市 富田 美 義

遊ぶ日の家事ははかどり朝涼し

賞味期限なしの人生送りたい

目を閉じて幻想を追う夢を追う

気休めの健康食を今日もまた

派手を着る度胸が欲しい喜寿の坂

高槻市 富田 保子

肌荒れをするほどまめに手を洗い

猛暑日は家の中では原始人

感染を危惧するくせに午前さま

吉報に今日の食卓よく笑う

このオレを大きく変えた夏コロナ

高槻市 原 洋志

コロナなど知らぬ存ぜぬ積乱雲

怖怖と電車に乗って墓参り

秋口は日本列島水浸し

もういいかいまあだだよーとコロナ菌

こんなにも塩分出てる夏の汗

高槻市 松岡 篤

忘却癖今日も一日ただ過ぎる

信じないが今日の運勢気にかかり

大事件大事故起きて直ぐ過去に

アルバムのミニスカートに見るわたし

フラダンスやってわかったむずかしさ

高槻市 安田 忠子

慣れてきたステイホームに根が生える

ありがとう最短距離の感謝です

願い事ひとつ叶えばまたひとつ

いつ晴れるコロナの雲は限りなく

もうお昼おやつ食べたら夕ご飯

豊中市 池田 純子

GOTOもコロナ恐くて旅行パス

午後3時心まあるくカフェタイム

あなたしかまつり上げられ今悔やむ

広辞苑死語の言葉もちらほらと

密室でアッという間に次期首相

豊中市 上出 修

稽古ごと破門になったことがある

ドア開けていざ突撃の炎天下

日本中どこへ行っても日本語

すでに過去ホイホイくれたレジ袋

GOTOのどこかさばさばしない案

豊中市 きとう こみつ

豊中市 藤井則彦

思い切り涙流せば気も晴れる  
老いよ死よ待ちに待つて初体験  
瀬戸際こそ不撓不屈という試練  
人や物と別れることで明日を知る  
きな臭い隙間風吹く布マスク

豊中市 松尾美智代

何処に向かうか砂漠を歩く老の足  
あつと言う間の出来事でした五十年  
週日は夫はテニス私ジム  
恙無い日を感じしながら愚痴も出る  
昼は素麵決めてる夫の出汁作る

豊中市 水野黒兎

洗脳のごとく子に継ぐ母の味  
草笛に似て青春は透き通る  
普段着で巢籠りつづけ夏終る  
浴びるほど飲むのはいまや葉だけ  
十五夜の月が先客露天風呂

富田林市 片岡智恵子

頑張ろう優秀の無い土俵です  
世界中の騒々しさはコロナから  
卒寿ねと学友と笑いつ電話口  
まっぴいか積み重ねてる老いの日々  
先ず呼吸ととのえてから亡母を呼ぶ

富田林市 中村 恵

笑い合い凭れ合つて秋桜  
リーダーは空席会議揺れている  
陽が昇り淑女に戻る魔女悪女  
お宝が息を潜める古本屋  
気の早い落ち葉と遊ぶのはひとり

富田林市 山野寿之

置物になったピアノに居るシヨパン  
ダイエツト決断の今日だけは飲む  
お手製の愛のマスクが娘から  
コロナ禍の無口な山車になつて秋  
飽食と飢餓地球儀の裏表

寝屋川市 伊達郁夫

コロナには強いが出世には弱い  
知らんぷりマスクを脱げば義母の顔  
秋風の正体問うているススキ  
朝顔の夏の迷路が未だ続く  
一日が過ぎたと思う缶ビール

寝屋川市 富山 ルイ子

夏バテかふらふらとして歩かれぬ  
ゆつくりと何処かにもたれ歩かねば  
何処も悪くなく八〇の脳だとして  
元氣だつたら嬉しく思う生きていて  
猛暑がまだ続いている九月でも

寝屋川市 平松 かすみ

他人事と思つていたにマイマスク  
ラジオ体操密にならぬがみなマスク  
カップルの鳩がよろこぶ水たまり  
眼鏡さんと呼べばお返事してほしい  
隠れんぼ好きなメガネで困ります

寝屋川市 森 茜

言い訳をこくり飲みこむ朝の卓  
坪田譲治ひもとく梅酒は琥珀色  
裏町の辻占いは店じまい  
竹炭を箆笥に一張羅も自粛  
二十年前の健脚など想い

羽曳野市 磯本 洋一

内定ゲット母会長で父社長  
好き嫌い何故か女偏付き合つて  
オンライン恩師気遣い同窓会  
アジを焼く秋刀魚一匹並んでる  
国内出張体温結果日々妻に

羽曳野市 宇都宮 ちづる

日射しには秋の長さがある猛暑  
長月に未だ聴こえぬ虫の声  
寺参りメダカ遊ばす鉢の蓮  
地方名産ネットで買つて旅気分  
ソーシャルディスタンス守り夫婦の仲保つ

羽曳野市 徳山 みつこ

民に負い目を感じぬ貨車が走り出す  
責任のなすりつけ合いお上手ね  
好き嫌いどうも怪しい生返事  
いたずらな君をぎゃふんといわせたい  
核コロナばかり口開け地球飲む

羽曳野市 藤原 大子

無駄じゃない今日のほんやり明日の糧  
紆余曲折鈍さに助けられてきた  
ありのままを主張ばつくりざくる開く  
エコバッグあるだけ持つて店はしごと  
真つすぐと信じ歩けた曲り道

羽曳野市 三好 専平

美しい海のもこうに黒い雲  
リハビリをかさねて早も夏終わる  
貧乏人密を避けては生きられず  
胡瓜揉み食べて元気をとりもどし  
ミニトマト幼き恋のものがたり

東大阪市 北村 賢子

劣化せぬよう脳の運動句を詠もう  
顔色をうかがいながら家ごもり  
どこまでも希望は捨てぬ家ごもり  
閉ざされたところへ温うなる便り  
コロナ禍もいつもと同じ普通の日

東大阪市 佐々木 満 作

コロナ禍の空白埋める目途立たぬ  
先読めぬコロナにヒト科試される

俄雨傘をどうぞとご奇特な  
池浚え出てくる珍種外来種

アメリカの恥部人種差別と銃社会

東大阪市 西村 哲 夫

ぼーとする時間楽しやそれもよし  
席譲る勇氣と座らせる強氣

自販機に仕事させてるもんじゅの火  
昔々焚き火をしてた火を借りた

氣が向けば食器洗いも致しませう

枚方市 谷 英 也

加齢とは病氣でしようかお医者さん  
音楽で心の壁を溶かしたい

オブラート包んで欲しいコロナ菌  
巢ごもりで舞っているのはコロナだけ

コロナ禍と猛暑で唸るクーラーです

枚方市 丹後屋 肇

雨の日の神宮出陣の学徒  
若人を死ぬ氣にさせた「海ゆかば」

先行きが見えなくなつたスキ原  
マスク一列汗のしたたる通学路

根廻しで既に決まっている結果

枚方市 山口 弘委智

鉛筆の芯尖らせて力みすぎ  
終章を飾る生きざま一行詩

鏡から鏡の外へ勇み足  
はらわたを抉る猛暑が喉ささる

とある町とある街角秋が立つ

藤井寺市 太 田 扶美代

わたくしのラストにしよう遠花火  
責任の重さ感じて無学

水色が好きアサガオもブラウスも  
淋しくてワタシを探してるトンボ

コロナ蔓延どうなりますかもう九月

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

わたくしの胸に思わぬ花が咲く  
かすかな痛み誰かに影を踏まれてる

何度拭いても水切れの悪い手指  
妻の部屋覗けば川柳誌ばかり

美しき思いと午後を散歩する

藤井寺市 高 田 美代子

ガタンゴトンゆっくり秋が来る氣配  
生きかたが馬鹿正直で笑っちゃう

逆らつてみたい日の有りシャワーの湯  
残暑の残暑まだ夏服を着ています

安倍さんも人の子リタイアして終い

藤井寺市 吉 田 喜代子

何故なんでこんな段差に倒れている

靴新調履き馴れた靴やっつ捨て

お墓にもお生花入れて秋の風

コロナ禍メール上手になりました

あかんなあこの時期総理辞任とは

松原市 森 松 まつお

思いきり泣ける映画もいいもんだ

橋藏のサインは妻の宝もの

安楽死重い話の秋の夜

この夏はレタスにスイカあきらめる

この頃は脳を素通りすることば

箕面市 大 浦 初 音

土踏まずしっかりせよと叱咤する

夢ひとつ言葉にすれば叶うもの

軽いのりで誘われ深くなつた趣味

相手想うやさしい嘘は許される

ステイホームだんだん増える一人言

箕面市 酒 井 紀 華

わたくしによく似た匂い根なし草

わたくしを叱る人なし影法師

満月と話せば勇氣湧いてくる

あの世では添い遂げましょう添えぬ人

コロナには負けるものかと恋をする

箕面市 出 口 セツ子

膝手術予約もコロナでなる白紙

コロナ優先病氣入院断われ

忍び寄る不安美容院でもコロナ

食欲が湧かぬ猛暑とコロナです

黙々とお通夜の如くレストラン

箕面市 中 山 春 代

蕎麦・索麵 ソバ・ソーメンの昼ごはん

エアコンの下で丸寝の熱帯夜

夏草とイタチゴッコをする軍手

提灯へ明かり入らぬ地藏盆

故郷の感染者数今日もマル

箕面市 広 島 巴 子

久し振り歩きもやもや吹っ切れる

曼珠沙華残暑にカッと赤く燃え

スイッチョが鳴き出し嬉しティータイム

うそほんと高い秋刀魚に目が泳ぐ

味覚の秋あれこれ買って巣にこもる

八尾市 寺 川 はじむ

定年過ぎてやつとリズムに乗った顔

ゴールなど知らずに馬は走ってる

老骨に鞭打ち百へ欲走る

壊れそうな地球がもがく温暖化

じつくりと実りの秋を待つ案山子

八尾市 村上 ミツ子

近くの屋根がしゃまして見えぬ信貴生駒

信貴生駒みえる場所までぶらぶらと

川柳止めないでという師のハガキ

いつまでも暑い迷子になっている猛暑

タイガース勝つと元気が湧いてくる

神戸市 上田 和宏

嬉しきことすべて昨日のことのよう

一歩出ろ二歩出ろ星が見えるだろ

小さな虫に大騒ぎする妻と居る

ご先祖の夢のあとかな星の数

仏壇にお茶毎朝僕のルーティーン

神戸市 奥澤 洋次郎

どれ程の遠くで光る一つ星

囲めない鍋づぼらやは店仕舞い

朽ち果てし父母の卒塔婆手向け水

囚人のごとコロナ病棟専従医

ふりかえれば彼岸花咲くたんぼ道

神戸市 富永 恭子

加減乗除私の味はまだ出ない

穏やかな日日ワクワクが遠ざかる

すまんなあその一言で忙しい

ガス一面こんな時こそ立ち上がる

切れ切れの余韻を起こす同期会

神戸市 能勢 利子

バイキングとカラオケ駄目と言うマスク

オンとオフマスク上手に通学路

誌上よりライブが好きと言う句会

ステイホーム小包届く里の秋

コロナ禍とうまく付き合い恙無し

神戸市 松倉 正美

手火花を多量に買って孫を待つ

孫が来て夫婦喧嘩はノーサイド

お盆玉孫に配って知る至福

教えた囲碁孫に破れるふがいなさ

アメリカと戦争した事知らぬ孫

神戸市 山口 光久

通院を自粛できない八十路坂

筋を通すだけでこんなに草臥れる

莫迦みたい独りで思い悩んでる

錆ついて笑いの扉開かない

カラフルな器に盛っている自分

神戸市 山崎 武彦

延命を拒み旅立つ母いとし

この道で会いたい人に逢っている

民の声聴こえてますか新総理

人づてに友の計を聞く寒い秋

香典は弾むがお経ほどほどに

老いるシヨックギシギシとオノマトペ  
あいまいな返事に都合よいマスク  
もう一本ようやく舌が回り出す  
どうもどうも関西からは逃げられぬ  
真つ直ぐに生きる揺るぎはせぬ背骨

明石市 糀谷和郎  
芦屋市 竹山千賀子

つらい日は雨もアルトの音に変わる

揚羽蝶君の過去には触れるまい

ふる里に帰ってみたい罌雲

移り気な雲だどどん姿変えいく

萩の花去年は二人で来たお寺

尼崎市 近兼敦子

病床の母は今でもチャーミング

リモートの遠く感じる母の声

軽いウソどどん重くなってくる

よそ行きの仮面を脱いで家に入る

幸せと思える過去は手のひらに

尼崎市 永田紀恵

四捨五入なんと無慈悲な計算法

忘れてた自分に会える老いの恋

年金日まず飲み代をキープする

切り上げの合図になった大きくしやみ

タワービルポキリと折れる佇まい

暇です猫と一緒に欠伸する

帰省せぬ子らにホツとする財布

わたしには薬なんです酒二合

食間の薬呑むため食事する

波静か妻はただ今昼寝中

尼崎市 藤岡りこ

コロナ禍にマスクを少し派手にする

転た寝ができるのも今だけのもの

遺跡巡り古代の暮し知りたくて

自転車のベルこの頃鳴らす人いない

正直に言えば許すと言ったのに

尼崎市 藤田雪菜

糠床のパワーでなすは色粧す

真夏日は力及ばぬことが増え

あれこれと趣味多くしてほけ防止

今日もまたプールの中でストレッツチ

雷雨来て夏の終りをつげる宵

加西市 山端なつみ

赤道直下より暑い国日本です

立秋の炎天どこに秋がいる

自粛自粛気持も萎縮してしまふ

過疎の村老いが守って墓掃除

外出自粛先祖も寂し帰省なし

川西市 山口 不動

弔電で友に語らう家族葬  
けたたまし蟬見上ぐれば鳴き止めり  
我が家のゴキブリキラー妻である

秋めきて一番電車音高し  
神木や五百年もの木下闇

三田市 足立 つな子

ありがとう言える人いて果報者  
怪我のもと術後の足の下り坂  
堪え難い酷暑にマスク傘寿です  
生真面目な朝の散歩もマスクして  
姿見に亡母そっくりと笑われる

三田市 上田 ひとみ

止めるのは簡単でした意外にも  
自信などない貴方だけ居ればいい  
笑い顔作ってごらん淋しいよ  
小さな子守っていくのが大人だ  
一番のサブリアなたと句のもの

三田市 大西 重男

妻逝って話し相手のほしい夜  
呼ばないで故人の夢をよく見ます  
悪い夢朝の一服ほろ苦い  
台風が過ぎてビールが日本酒に  
老友と僧侶談義に花が咲き

三田市 尾崎 一子

マスクして行き交う人は無表情  
コロナ禍の疎遠繋いでいるスマホ  
暑いけど三食食べて医者通い  
黒を着る炎天コロナ禍の葬儀  
一番の幸を写した笑む遺影

三田市 九村 義徳

今日もまた妻のリズムで回り出す  
晩酌は週に一度と決められた  
厳しさも孫には緩い祖父の背な  
ドキドキを求めて今日も街に出た  
思いやり両手いっぱい被災地へ

三田市 多田 雅尚

台風かコロナで選ぶ避難場所  
生産地確かめて買う郷土愛  
エコバッグ持ってコンビニ行く同志  
対面じゃ言えぬ事まで書くブログ  
敬老の日今年もスルーされそうな

三田市 谷口 修平

髪切った別にどうでもよい他人  
もう小言言う人も無い独り酒  
あの人も風の便りで今独り  
秋刀魚焼く不漁のニュース聞きながら  
虎の尾を踏んでしまった無礼講

三田市 野口 真桜子

勝つと決まった選挙戦笑い出すダルマ

魔除け数珠二本つけての正念場

君を抱く切り取り線を意識して

波止めのあたりで騒ぎ出す鯛

夕焼けに続く坂行く車椅子

三田市 福田好文

敬うが疎う字になる長寿国

松茸の匂い忘れた換気扇

執刀医の素顔見ぬまま腹切られ

恐妻家同士で話良くはずむ

叱つてもにっこり笑う遠い耳

三田市 堀 正和

元氣よく零余子の蔓も伸びた夏

GOTOのチラシ連日やってくる

バス降りるマスク外して深呼吸

菓籠りへ秘蔵の酒の封を切る

日帰りの湯へストレスを捨ててくる

三田市 松本 ゆかり

増水の匂いしてくる川の岸

壮絶な話をまとう金メダル

リニアカー今の世情に要るのかな

秋風が吹くとがたがたいう裏戸

老人会世話好き消えてがたがたに

三田市 村田 博

台風の目の中束の間の平和

温暖化男日傘を買う猛暑

古傷を逆撫でされて疼く酒

簡単なクイズ答えて試供品

認知テストクリアしてもただ虚し

高砂市 松尾 柳右子

栗御飯供え対話が弾みだす

舞い遊ぶトンボ稲穂は黄金色

食欲が進みコオロギ鳴きだした

天高く少しマスクをはずす朝

墓掃除済みさわやかな手を合わす

宝塚市 丸山 孔一

全没は選者と趣味の差と思ひ

葬儀にも行けず旅立つ友想う

只空気吸うにも力要るマスク

赤道が徐徐に日本に近づいた

師の影を踏まずソーシャルダンス

丹波篠山市 北澤 稠民

爺なれど信頼おけるパートナー

線香花火だんだんやせていくわたし

同期会これが最後といつも行く

終点が見えぬ人生欲を出す

苦勞した昔が笑う敬老日

丹波篠山市 酒井 健 二

その昔貧しい時代勤が冴え  
ポランティア怒られてたら精がない  
生き様を映す両手が柔すぎる  
どの学者おっしゃる事が正解か  
賢治さまコロナに酷暑耐えています

丹波篠山市 長谷川 善 輔

玄関の三和土を占領猫二匹  
脳味噌枯渴アタマとんとん叩いてみよう  
猛虎の優勝そんなに待ったら命がもたん  
アベノミクスの終焉にやっと立ち会え  
することなし猫のひげでも数えよう

西宮市 緒 方 美津子

コロナウイルス終息祈る曼殊沙華  
腹時計狂わぬ夫困ります  
頼まれるより頼むこと多くなり  
秋茄子の糠漬けのあり新走り  
安い秋刀魚を大根が待っている

西宮市 亀 岡 哲 子

驟雨きて軒のない家続くなり  
秋明菊開いて秋はまだ酷暑  
あきまへんも深刻になる立ち話  
まだまだや主治医に貰うお墨つき  
コロナ菌持って行けぬと寄らぬ子等

西宮市 福 島 弘 子

労りの言葉一つで恙無い  
声に出し般若心経朝の風  
コロナ後のスタートライン決めている  
精一杯生きてコロナに出合うとは  
救済を阻むコロナ禍容赦なく

西宮市 福 田 正 彦

人間はどうしてこんなに唾み合う  
政界に打算の波が騒がしい  
リニアカー自然の壁で立ち止まる  
科学的知見が見えぬ昨日今日  
五線譜に声はりあげて目眩する

南あわじ市 萩 原 狸 月

子の眉に隔世遺伝見た帰省  
墓まいりマツチ擦れたと孫を褒め  
しあわせな墓だけ花と線香と  
おかえりと汗の坊主に氷水  
ウォーキングマスクしている律儀者

奈良県 安 福 和 夫

そそっかしいキャラがみんなの笑み誘う  
人付き合いいドラングで和を保つ  
潔癖性完全主義者肩がこる  
初対面人柄直ぐには見抜けない  
人格は付き合うほどに滲み出る

奈良県 谷川 憲

廃校に往時を偲ぶ蟬しぐれ  
亡き人を思い浮かべて盆供養  
道標に当時の息吹伊勢参り  
高僧の悟りのもとに粗食あり  
古里の遠い記憶は忘れない

奈良県 中堀 優

笑える日絶対来ると信じ生く  
夢なくした時が負けだと励んでる  
コロナ禍の嵐抜ける日きつと来る  
コロナさけ自主欠席をさせる親  
吊橋に揺られても行かねばならぬ

奈良県 長谷川 崇明

ただいまとマスク外してホツとする  
コロナの世肩身の狭い夏の風邪  
まだやるとたぎる血のある今が旬  
傘寿まだ足の洗えぬ縄のれん  
貧乏性整理してまだ捨てきれず

奈良県 渡辺 富子

三密避け薄い空気を吸っている  
天ご盛りの愛振りかけた母の文  
天空へ続く棚田の彼岸花  
すり減った若さへピンク塗ってみる  
言い勝って胸の広野へ捨てる哀

奈良市 宇賀史郎

神の声都合良く聞く古い二人  
トラブルを嫌い老後も低姿勢  
ネクタイの締め方忘れ孫の式  
遅い縁銀やつと越え金遙か  
ご多分にもれずあちこち痛む日日

奈良市 大久保 眞澄

見得切る顔で猫が一瞬振り返る  
鳥居マークアリの侵入口に貼る  
蒸籠の中はこんなだろうか炎天下  
洗い過ぎて毛玉のできているマスク  
不眠不休のエアコンあごを出している

奈良市 加藤 江里子

角を曲がる息子家族の車見え  
平城旧跡空の広さを一人占め  
胡瓜の苗植えたつもりが瓜が生り  
コロナ禍で宿根草が好きになる  
拭き掃除ひたすらやって立ち直る

奈良市 高橋 敬子

夕立来そうホースを持って待っている  
花火自粛の空に親しい星の声  
コロナ情報慣れてあっさり聞き流す  
再放送にその手あったと思ひ出し  
マスクにと端切れに探す秋の色

奈良市 辻内 げんえい

ステイホームでジグソーパズルやり直す

家まわり100歩散歩で手を洗う

スポーツジム行けずお家でユーチューブ

ばらばらに喋る女子会エンドレス

孫の一言迷った邪心洗われる

奈良市 米田 恭昌

不戦を誓うマスク姿の8・15

戦中派とにかく並ぶ癖がある

レジ前で小銭ひろげて妻も老い

コロナ禍さなか友一人逝き二人いき

プラス思考明日は今日よりいい筈だ

生駒市 飛永 ふりこ

ことりつと梅酒の水こち良い

気のおけぬおしゃべりウフフからアハハ

感染を防ぐ願いを一針に

スイーツの香の華やぎで声弾む

涼風が欲しいピアスの生温さ

香芝市 大内 朝子

新型コロナ世相どんどん変えていく

行く所ないけど髪を染めてみる

今更に思う句会の楽しさよ

生命力教えてくれる零れ種

愚痴ひとつこぼさぬ亡母の道標

香芝市 山下 純子

巣ごもりからリハビリをして友と会う

自粛とけあなたは左わたし右

娘でも主婦の土俵は踏み込めぬ

柱時計大正からの時刻む

ステイホーム夫婦で歌うラブソング

和歌山市 上田 紀子

立つ位置を弁えているかすみ草

ローギアに変えて信じた道をゆく

生きてゆく充電今日も怠らず

宝ものハートの奥で眠らせる

回想のページコスモス揺れている

和歌山市 柏原 夕胡

水やりの私へ虹が立っている

汗拭うつくつくぼうし鳴いている

傷ついた言葉は他人には向けぬ

えべっさんの笑顔が咲いて愛される

わたくしを許してくれるああ家族

和歌山市 坂部 紀久子

電気代など気にしてられぬこの暑さ

だんだんと根気が姿消していく

時限爆弾私の体の中にある

物造り機械に勝る人の指

玉手箱はあるが金庫はありません

要請がなくても外出せぬ猛暑  
浴室から月を眺めて旅気分  
和歌山市 土屋 起世子

この風も堪えればやがて風になる  
虫の音をじっくり聞かず自粛中  
何もせず何処にも行かず秋の空

和歌山市 古久保 和子

消しゴムの跡は検索しなくなる  
お手玉に遊び相手をしてもらう  
髪切って仕切り直しをする歩幅  
縦書きにすると心が引き締まる  
路地裏にも秋の虫が来てくれた

和歌山市 堀 富美子

永らえて戦火コロナを刻ませる  
気負っても限界を知る歳と知る  
虚勢張るハートに活を入れている  
チャンネルはコロナ台風地震潰け  
独り居を温い身内に守られる

和歌山市 松原 寿子

伝えたい言葉朱線のなかにある  
善しも悪しきも記憶の襲へたみ込む  
薔薇の香が胸に零れて満ちてくる  
さりげない冗談その場切り抜ける  
すこやかな笑顔の種を蒔いて秋

岩出市 藤原 ほか

敬老日母への恩を呼び起こす  
敬老日母のつぶやき思い出す  
敬老になっても恋を求めてる  
線引きをされてもめげずに付いてゆく  
地球儀を回して居場所自覚する

海南省 小谷 小雪

視野広げ大いによそ見するつもり  
戦後から太郎二郎も歳をとり  
ステイホーム自由に飾る時間帯  
地藏さんのおかげか夏を無事通過  
母恋し空まで登る曼殊沙華

紀の川市 山東 日出男

パラダイス孤島に群れるアホウドリ  
物忘れ過ぎてカラスに笑われる  
直角のお辞儀、ドアポイのやる気  
台風のような騒ぎの子の帰省  
引き際が分からない人分かる人

橋本市 石田 隆彦

霧失せて摩周湖まさにカルデラ湖  
旅一夜流星群のショーを見る  
人数多テレビ出過ぎた秘境の湯  
白神の緑に抱かれ生き返る  
ハワイ航路ワインとともに夢心地

鳥取県 門村幸子  
ギョツとして今は見慣れた「黒マスク」

やれやれとくしゃみも自由家一人  
追い風に帰り楽々ウォーキング

夜に文字書けば踊つて締まらない  
酷暑にコロナ背負いひたすら今日しのぐ

鳥取県 竹信照彦

会長も後継者難老人会  
妻の夢僕が倒れていたそんな

よく夢を見る妻見ても消える僕  
真夜中にトイレに起きて夢探す

投句してやつと台風後始末

鳥取県 細田裕花

ご先祖の暮らしを思う蔵そうじ  
のほほんと暑いあついと夏過ぎる

賑やかに盆の社交場募参り  
街抜けてマスクを外し深呼吸

雨降つて秋の空気が下りて来た

鳥取県 山下節子

ひや汗をかく弁解はできません  
垣根には風船カズラ涼をよぶ

風船で届いた種に花が咲く  
やさしさは人の痛みがわかるから

痛い程手を握られてうるたえる

鳥取市 池澤大鯨

高速で回る独楽なら自立する  
トランプの気紛れ世界くるくる変り

くるくると水車は回る十年ひと日  
くるくると変り身得意化物か

水すまし自分の軌跡追いつづけ

鳥取市 奥田由美

母偲び墓前に束の曼殊沙華  
校庭にかわり想い出だけの実家

もう秋と声高らかな虫音色  
令和来てもスマホが恐いガラケー派

夏バテと素麺すすする二人前

鳥取市 加藤茶人

母と娘の声はコピーの電話口  
古民家を見るには良いが寒い冬

採めた事妻は昨日のように言い  
南方で僕のルーツがまだ眠る

目覚ましを五つ並べて後五分

鳥取市 岸本宏章

日に干した梅がはしゃいでいる炎暑  
台風の進路が怖いほど当たる

アマビエの呪文もコロナには効かぬ  
あの頃は良かったなあと思痴になる

ガラケーにやつと慣れたらもう廃止

鳥取市 岸 本 孝 子

やつとこせ嫁と二人で盆飾り

三度ずつノルマのように向かう膳

土用最中マスクを掛ける重い刑

防災無線お世話になる日ないように

横断歩道がだんだん長くなってきた

鳥取市 田 賀 八 千 代

無人駅降りて私の色に染め

課せられたノルマ人間見失う

自己主張できないままに飛ぶ綿毛

世渡りが下手だが料理上手です

世渡りの上手な人と手を繋ぐ

鳥取市 田 中 天 翔

伸び放題まるでアートの夏の庭

五時起きの草取りなんといいい気持

吾が名前載って慌てる訃報欄

「一度死ぬと長生きするよ」メル友が

コロナとの戦禍のままで夏が逝く

鳥取市 棚 田 大

時代かな心の痛みどんと増え

物忘れしたふりをして人目引く

歳かなあタレントの名が出て来ない

お盆来るコロナ情報肝に入れ

なつかしや紙風船よどこ行つた

鳥取市 谷 口 回 春 子

慈雨一つ人も野菜も生きかえる

金毘羅さん生きる証の第一歩

生きてきた道が案内する未来

まろやかな味が効いてる鼻薬

粗大ゴミなるのは嫌と日々努力

鳥取市 永 原 昌 鼓

歳とれどまだこれからと夢を追う

後悔をする子の顔は見たくない

折合いをつけつつ登る老いの坂

傑作が出来たと一人ほくそ笑む

鼻かくしマスク美人になりすます

鳥取市 中 村 金 祥

負けること分かっているが主張する

片減りの靴に苦悶の跡が見え

目標は消えたが今日も飯を食う

アルバムを開きゆつたり暇つぶす

お互いに意見が合わぬマスク越し

鳥取市 夏 目 一 粹

家の前の山に猪親子づれ

夢ですが人生大切にします

しみじみと呑んで心の憂さ晴らす

遠くなるほど想いやり近くなる

残り火の始末に苦勞しています

鳥取市 副井 ゆたか

終末はお猪口片手にクラシック  
幸せは何も告げずに去ってゆく  
朝顔に倣い早起き上狙う  
動と静金婚までの紆余の道  
浅薄な知識を捨てに登る山

鳥取市 福西 茶子

頬削げてほどよくフィットアベマスク  
ベッドまで運ぶご飯に呪文盛る  
息抜きをしすぎてフニャフニャになった  
オメデトウのウに毒針が見え隠れ  
病名を聞いて許そうかと思ふ

鳥取市 山下 凱柳

朝目覚め水一杯が元氣くれ  
浮かんでは消え消えては浮かぶ五七五  
ミスないかしつかりチェックして投句  
人生というキャンパスに夢を描く  
ソーシャルディスタンス言い訳して倦怠期

鳥取市 吉田 孔美子

さんざん吠えた畑の糧になろう  
今日は大切八十年が詰まつてる  
父消えて替わる健気な姉が居た  
戸は締まり連絡簿からも消える  
夜遊びにおいでなさいと戸が朽ちる

鳥取市 吉田 弘子

浄土への橋渡れば待つ人居て  
四一、一度将棋も記録塗り替える  
早起きの時計の針はゆつくりズム  
喋っても反省ばかり舌足らず  
前屈み防ぐ体操しても尚

倉吉市 猪川 由美子

総理辞し森友や拉致置き去りだ  
総裁選ドロドロの茶番劇だな  
熱中症の次はインフルやって来る  
愛だカネだ打算損得で生き抜く  
マスクも今やファッション多種多様です

倉吉市 岡崎 美知江

盆提灯供えた人はもう故人  
追伸が本音思いの文となる  
涼風を追って河原で遊ぶ子等  
杖をつく歩幅に合わせ子は歩く  
戦中戦後したたかに生き今日がある

倉吉市 田中 紀美恵

話聞き眠りこけたら終わつた  
人の愚痴聞きたくないがおつきあい  
西の空沈む夕日に手を合わす  
栓抜きが出来なくなった老いの指  
ヨロヨロと年がいもなく美女に惚れ

夏の風物詩甲子園が消えた

米子市 池田美穂

赤トンボ出るに知られぬこの酷暑

たつぷりと喋って中身記憶なし

精霊馬孫達作り六匹も

コロナでも良いこと一つ星が澄む

米子市 伊塚美枝子

太陽に休みあげたいこの酷暑

勝手でず猛暑続きで雨欲しい

稲刈りに酷暑厳しい試練です

ミステリーサークルのよう稲倒れ

セミの声いつしか虫の声となる

米子市 後藤宏之

天国に行ける切符の発売日

血液さらさら脳みそはスカスカ

あらごめん昨日も会った人だった

遠慮するふりして写真ど真ん中

もう一度だまされてみてそれからだ

米子市 後藤美恵子

体力と気力残暑にせめぎ合う

見栄は捨て晴れば傘を杖にする

ふわふわと歩く足跡残らない

古い日記燃やして過去を引きずらぬ

ペットまで視線冷やか午前さま

水分も塩分も摂り朝を待つ

米子市 竹村紀の治

来年もお逢いしましよう茄子のうま

涼しいな今日はたつたの三十度

提灯を仕舞いコロナの盆送る

直ぐ効いて帰りたくなる郷の酒

米子市 中原章子

秋サンマ高級になり驚いた

巢ごもりに夏限定の冷菓食べ

日記帳今日も元氣と書いている

現職を去って魂抜けて見え

来る来ると言った台風コース変え

米子市 成田雨奇

祈るしかないとホントに言えるのか

五十年起伏豊かな旅だった

阪神が勝つてすつきり日本晴れ

ときめいたあと二ヶタが違つてた

ファックスが送られてくる焦れつたい

米子市 野川宣子

この夏は腹の底から笑えない

御先祖も三密避けてお帰りに

手洗いうがい婆ちゃん目が見張つてる

給付金どこに消えたかさあ大変

手始めはコロナ退治か新総理

松江市 藤井寿代

のほほんといマジン聴いて生ビール

約束は出来ないと言う葉指

すっぴんでどこへでも行くナスの花

運命線は短くとお願いをする

ザリガニを川に帰して夏終える

松江市 松本知恵子

カラカラの出雲台風置土産

夏越した猫と高い空見上げてる

待ち待ちし九月の雨の心地良さ

派閥あり恰好だけの選挙戦

もう少し我慢と波に吞まれてる

出雲市 伊藤玲峰

まだ役目あって長居りする吾よ

お互いに楽しく生きる終章は

真つ当に生きる出雲は神の郷

外出自粛趣味が後押ししてくれる

あの人も逝った私より若いのに逝った

出雲市 岸桂子

核心をつかれジョークで巻いておく

手造りの畑地球に席を置く

思慮深い亡父のレールにある重み

一言にたっぷり塩が効いていた

胸の奥バラは昔のままの色

雲南市 菅田かつ子

コロナ自粛亡夫へおしゃべりしてひとり

冷房の部屋からエール隠岐の海

恋をした孫が素敵になってゆく

鈍感なふりして嫁さんたてておく

人生の節目へ鯛の姿焼き

岡山市 高岡茂子

秋桜雨を待つている散歩道

三年もウツウツ過ごす蟻り

拘りが小鳥になって飛んでった

東京に視察に行かすマスカット

自粛中コロナ一号にはなれぬ

岡山市 田中恵

思い出をのんびり辿る汽車ポツポ

ちぎれ雲遠いふるさと見に急ぐ

戦争も平和も抜けて来た大樹

梅干をしゃぶって猛暑乗り越える

太陽を味方につけて咲いている

岡山市 藤澤照代

喝采も花道もない母である

宅配で買えば済むもの娘に送り

太陽の色になりたいブチトマト

無口でも無口の言葉ある夫婦

秋茄子の一つに母の顔を見る

赤トンボ戯れにくる風鈴

岡山市 大石 洋子

空き家にはほどけた葦簀寄りかかる

蝉の声だまらずほどの救急車

ヘルベスが暴れ素直にステイホーム

はひふへほのひのあたりにかなこの痛さ

岡山市 工藤 千代子

美しく老いるは無理とあきらめる

夫も老い二人で競っているカルテ

隠し味柚一滴の自己主張

柿の実が落ちる考えすぎらしい

怒らなくなった つまらなくなつた

岡山市 丹下 凱夫

道ひとつ迷つてからのひとり旅

ばくの行く先はいつでもぬかる道

愚直だが生きておりますチチロ鳴く

限りあるいのちの虫の相聞歌

お辞儀してから飲んでいる大吟醸

岡山市 前田 恵美子

超大型台風来ると予備マスク

台風が去つた畑の土白い

ゴーヤ茄子起こして安堵みんな無事

高齢化人がまばらな清掃日

夢も見ず父母は従姉妹の夢に出る

素つぴんの春がぞくぞく家に来る

お互いに添え木をします夫婦愛

オンボロになつても愛は忘れない

出会い頭ごつんこしたの愛

彼女を虜にするミルクティーの卑怯

広島市 岸本 清

すみません軒を借ります通り雨

憲法はこども六法見て理解

防災に簡易トイレを追加する

コロナ禍の今こそ弱者救うべし

これも密室室政治やめなさい

竹原市 岩本 笑子

赤トンボ時間は守つてほしい空

出たり入ったり忙しいのは私だけ

夏は終るやつつく法師の世となりぬ

速達という手も有りしうふふのふ

茄子が熟れトマトが熟れて夏終る

三原市 鴨田 昭紀

挑むこと止めた男の背が丸い

ボコボコに打ちのめされてきた矜持

モナリザの笑みの深さをまだ知らぬ

遠かった終着駅が見えて来る

アドリブが利かない鈍感な男

岩国市 上村 夢香

ふるさとの地酒が性に合ってくる  
パスポート証明代わり見せるだけ  
心地よいことばを紡ぐ友の文

自立せよと師匠のことば耳の底  
しがらみを断つて大海泳ぎきる

宇野市 平田 実男

旅に出て我が古里の良さを知る  
鎌の柄の艶へ篤農家の歴史

夢希望サプリメントにして米寿  
ひねり出す句より浮かんだ句が抜ける  
欠点が多いほうへある魅力

防府市 坂本 加代

空中を走る嬉しい出合いの日  
せつがちが末尾から読む川柳誌  
コロナ禍にカード社会が加速する

切っ先を丸く収める苦労人  
熱帯になったか日本四〇度

(前月分) 出雲市 伊藤 玲峰

人生の黄昏師が消え友が消え  
同年の政治の猛者も召され逝く  
壊れる私支えてくれて九十坂登る

次々と介護ホームに友入所  
孫曾孫楽しい我が家不足なし

### 第39回 鳥取県没句川柳供養誌上大会

課題 (各題2句)

「おろそか」 中村 惠 選

「ジグザグ」 狭武 紫陽 選

「濃 厚」 門脇かずお 選

「ふらつく」 平井美智子 選

「放 置」 北川 拓治 選

「助 っ 人」 新家 完司 選

「敗者復活吟」 小島 蘭幸 選

(この一年間で没になった句から2句吐)

投句締切 12月5日(土) 当日消印有効

投句料 1000円

(野口英世さん・定額小為替・切手可)

賞 各題 天位賞 洋々賞 他

投句先 〒689-0202

鳥取市美萩野2-1171-3

中村 金祥 宛

電話 0857-59-11056

主催 川柳ふうもん吟社

# 川柳塔の

## 川柳讃歌

(180)

上方芸能評論家 木津川 計

恐れ入りますが八月十五日です

谷 口 義

大阪大空襲の翌朝、京都は真っ暗だった。大阪の黒い煙が京都を覆ったのだ。次の爆撃目標は大阪との噂におびえ、僕は母の故郷高知へ家族と疎開し、高知大空襲に遭った。焼夷弾の雨をかくぐり、炎の中を逃げまどった。「本土決戦」が呼号されていた。予科練を称えた「若鷲の歌」が大ヒットして憧れが組織された。そんな戦中を証言する人が極少数派になり八月は海に山へ、となった。だから義さんは謝りながら敗戦記念日を伝える。

惜しまれて逝く七十路とうに過ぎ

宮 尾 みのり

詩人・立原道造が二十四歳で逝ったとき、三好達治は「暮春嘆息」という詩で悼んだ。「人が詩人として生涯をはるためには／君のやうに聡明に清純に／純潔に生きなければならなかった／そして君のやうに また／早く死な

なければ！」。惜しまれるには早く死なねばならないのだ。にもかかわらず七十路を「とうに過ぎ」てしまった。この世に執着してべんべんと生きてはならない。ではあるが、みりさん、貴女は別格としましょう。ご長命を。

離婚してトントン出世元夫

きとう こみつ

これはたまらん、これは辛い。いったいわたしはなんやったのか、その昔、「上げマン」「下げマン」が話題になった。この伝に従うなら、こみつさんは「下げマン」だった。別れたご亭主は開放されて「トントン出世」するのである。「後発も打たれ先発ほっとする」のではない。後発が健闘するのだ。先発の立場はない。こみつさんは泣きたい、といって元へは戻れない。元々相性が合わなかったのだ。こみつさん、そう思って納得しましょう。

1 手目は聡太も僕も2六歩

岸 本 宏 章

うーん、宏章さんも辛い句を詠むなあ。一手目はだれも一緒なのだ。次の手から差が出てくる。小学一年生は横一列だった。中学校でふるい分けられ、高校で差がつき、大学で将来が決まった。聡太のめざましい伸びは秀才が集める期待に似ている。その陰で黙って泣く子がいる。すでに敗者の烙印を押されて

おとなになった。「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買いきて妻としたしむ」啄木の悲哀につながる。宏章さん、辛い人生です。子が寄って蟬を逃してやっっている

山 田 耕 治

蟬の脱皮を多分子供らは見たのだろう。もがきながら羽化した蟬に感動したのだ。生まれる苦闘を目の当たりにして虫籠へ放りこめず、逃してやる。子が寄っていいじめる亀を助けて浦島太郎は竜宮城へ案内され、乙姫と出会った。鶴の恩返しも木下順二が名作「夕鶴」に昇華したが、蟬の報恩譚はまだ書かれず、ために、地底のメルヘンは手つかずのまま。だれか未踏の暗黒に灯を点す人はいないか。さし当って耕治さん、あなたが試みられては。

通院日気づいた猫を先ず有め

前 田 洋 子

テレビ欄で先ず探すのは動物番組である。「志村どうぶつ園」を毎日私は待ちわびた。さまざま猫が登場した。犬と仲良しだった。赤ん坊をあやしたり、高齢者を慰めたり、猫の賢いことを知った。猫は飼い主の体調も察する。主人の通院日に気づいて不安な猫を洋子さんは宥める。「心配せんかてええのよ」に猫はほっとする。人間のことはも解すると専門家と言う。洋子さん、その猫がいて幸せ。

# 自選集

小島蘭幸

自肅中十八番がひとつ増えました  
私ひとりの墓参赤とんぼが舞うよ  
五歳にしか詠めない世界あり令和  
夢の世界へつぶやきは魔法です  
らんこうさんとある似顔絵はエール

木本朱夏

ハモニカが聞こえる秋の彼方から  
五時からの雨はころの襲に降る  
晩秋の感情線は水浸し  
来し方を責める夜更けの虫の声  
我が死後の金魚と花の行方など

新家完司

迎え火も送り火もない兵の骨  
ウイルスが監視カメラをすり抜ける  
にんげんていいなと思う駄ピアノ  
共食いになるが今夜のアテは雑魚  
教会も神社も寺も虚仮威し

高瀬霜石

ひとり旅酒代だけが高くつく  
男いっぴき恥ずかしながら方向音痴  
安酒場ハシゴしてみるひとり酒  
時に雑魚時に雑草雑食漢  
道連れは今日の地酒よひとり旅

竹治ちかし

生きる欲あるから湧いてくるロマン  
アンピシヤス記したノートが書架で褪せ  
花の数数え癒しをもらう朝  
忘れてはならぬことだけよく忘れ  
年老いた猫には猫のする仕種

津守柳伸

晴れマーク雑巾がけを始めよう  
柳友の雅号探しをする自粛  
ジャンプ傘時代遅れを笑う指  
栄養とコスト比例をせぬサンマ  
旅ごころ誘う十五夜お月さま

都倉求芽

検温血圧採血雷はまだ暴れてる  
入退院書類の記入も馴れてくる  
胃カメラは飲むんじゃなくて押し込まれ  
秋風と晩夏のせめぎ合いに寝る  
病の身首相の辞意を聞いている

西出楓楽

キリギリスとアリの中間ほどを生き

正解のない宿題神に強いられる

冗談の語尾の辺りに置く本音

久々に水戸黄門を見て和む

家中をうろうろ五千歩がノルマ

仁部四郎

三文の得自治会のゴミ拾い

五円玉もちろんわたし拾います

ニユースにも拾えば美談あるはずだ

練り上げの議員ですけど拾いもの

拾いものでしたなどは子に言わぬ

福士慕情

物忘れ年のせいだとワツハツハ

家中を探し頭にあるメガネ

生きていることの讃歌か蟬時雨

長寿とや先に逝く人多かりき

ありがとう最後にとっておく言葉

松本文子

バリケード張られ遠のく人となり

心の中に夕焼け彩の花飾る

アンビリーバボー長生きをしすぎたか

かき混ぜて愚痴消えたのか美味いお茶

五輪はどうなの九十五年はどうなるの

三浦強一

史上初枕詞に吹き荒れる

地球高熱コロナ感染かも知れぬ

薬人形コロナと書いて五寸釘

持ち味の笑顔見せられない無念

心にはいらぬソーシャルディスタンス

三宅保州

一握の砂さえもない都市砂漠

十数えてみても治まらない怒り

民宿の地酒に民話欲しくなり

この村を走る線路に駅がない

手柄立てすぎて味方にねたまれる

村上玄也

分断か結束かアメリカの舵取り

巣ごもりへ電話の声が生氣呉れ

コロナ禍が人を怠惰にしてしまう

巣ごもりの所為で曜日が分からない

さて日記今日一日の記憶ない

森山盛桜

広がった闇には鶴の格気のみ

銛は防いだが矢印に刺された

見つからぬ筈だよマトリョーシカの中

麗しい誤字だ追求などしない

ロスタイムなのに晴れないままの霧

括らねば

八木千代

甘く包めば中身もずり落ちてしまふ  
きつちりと括る昨日に懲りたから  
見えていないが大きなものに包まれる  
よくよく見れば銀の穂の海 芒野の  
括らねばならぬ やがての旅支度

山本希久子

歩き続けた道小さな足跡を残す  
八十路半ばふり返りまた前を向く  
送信の動画ひ孫すくすく育ちゆく  
一病を忘れる秋のレストラン  
ドア一枚親子世代が遠くなる

川上大輪

その辺に落ちていないか良い言葉  
カッポレもたまには踊る心電図  
気晴らしに心臓移植でもするか  
古書店へ江戸の空気を吸いに行く  
卵綴じ幾つの憂さを閉じ込める

板尾岳人

イベントがすむと金魚は鯉になる  
緞帳が降りるとすんでいた戦  
大皿に心を盛ってくれた母  
初恋はハンドバックに入れてある  
老いばれと言われたくなし歩く道

居谷真理子

金魚鉢ここがお前の全世界  
諦めや悔いが流れていく暗渠  
ホスピスのある町蟬時雨の道  
送り火を焚いて寂しい居間に居る  
目の前でいとしい人が食べている

北野哲男

帰省子が蘊蓄たれるムカゴ飯  
雨上り真珠連ねた蜘蛛の糸  
毒舌は親友の味大ジョッキ  
あちこちへニュース仕入れに風見鶏  
本棚にマルクス鎮座五十年

麻生路郎語録

矛盾は人生の美しきプリズムだ。私は矛盾を愛し矛盾を憎む。それは憎むが故に愛するとも云えよう。

★

川柳のフラスコには多量の矛盾を抱擁する。その故に私は川柳を極度に愛するのかも知れない。

(「川柳雑誌」NO・197より)



## 森の集句

### 『みかん船』

大<sup>おお</sup>矢<sup>や</sup>十<sup>じゅう</sup>郎<sup>ろう</sup>

まだ僕に踏めぬ絵があり旗もある  
 大正二桁四方八方耐えるのみ  
 始発バス私にいつか指定席  
 もう誰も叱つてくれぬから淋し  
 順々に嫁くそれだけを羨まれ  
 道で逢う妻は昔の顔をする  
 実印へ妻も覚悟の正座する  
 不機嫌な父へ味方の娘がいない  
 一日へ恥じぬ夕餉の箸をとる  
 家計簿の都合で父の日忘れられ  
 正月は楽し子が来る孫が来る  
 カタカナの料理も慣れて喜寿と古稀  
 結納へ覚悟は違う父と母  
 ツーアウトツーストライクの朝を出る  
 ふと乗ってみたいブランコ春うらら

(昭和59年8月7日 発行)

### 温故知新

小出智子川柳集『露の臺』から

噴水の前でたくさん待っている  
 夕涼みだあれも外に出ていない  
 虹の橋を渡っていったのは次男  
 ケーキ屋のドアは軽く出来ている  
 前の人が帽子を脱いでくださらぬ  
 ブランコが二つあるから気を許す  
 そろそろとみんな仕度をしてなさる  
 春愁の飴玉一つ口にあり  
 洗濯バサミの力に頼りきること  
 魂はハンドバッグに入れてある  
 焼香の順を違えることぐらい  
 胸に飾ると造花も少し呼吸する  
 シャンソンを聞くさみしさが夫にも  
 おばあちゃんが言うているので胸を打つ  
 黙っていることは大事なことである  
 年下の男ははつきりものを言う

# 水煙抄

## 西出楓楽選

倉吉市 若松 由紀子

物思いどうにもならぬ事ばかり  
東京の五輪見て逝く夢が延び

苦の種をまいたあの子が親になり

スクワット三十回はまだ出来る

愚痴きいてほしくて夫の墓洗う

楽々と出来てた事が出来ぬ老い

今治市 渡邊 伊津志

栗ごはんいいねと言つて欲しい手間

草刈れば蟪蛄の子が胸に来る

駈け足が出来ると思つていた頭

明日の事詠んでる人は元氣いい

溜め息の成分秋の風二乗

評判に左右されたい革の群れ

豊中市 貝塚 正子

鱗一つ取れて青春苦いだけ

医者を目を盗みたつぷり海胆イクラ

身を守る為だ手洗いうがいする

外へ出ぬ修行のあとの般若湯

手作りのマスクそれぞれ競い合う

散歩好き末は徘徊予備軍か

尼崎市 清水 久美子

向日葵の嘆きを聴いて夏終る

痩せぎすのゴキブリ叩く気がしない

半額で買った秋刀魚の目が赤い

第2波の途中で緩和するなんて

スーパールの梯子で足りる運動量

宿題も昼寝も済ませマクド出る

大阪府 奥野 健一郎

任せるとそれ相応の受け答え

いきいきとした顔つくる好奇心

淀みない弁解だから勘ぐられ

口数を減らせば増してくる貫禄

若き日の夢の欠片を懐かしむ

聞き上手どうも裸にされそうで

交野市 山野 双葉

オンラインだけで嬉しい母の顔  
カナリアの歌は忘れず母卒業

ここが我が家かホームの母が不意に問う

片耳にマスクぶら下げガリガリ君

蔓草が握手を迫る散歩道

ポーナスでどこにも行けず買う鰻

白河市 鈴木 たけし

ケータイもマスクも忘れなくなった

引籠りなのか自粛か分からない

足型のとおりになぶレジの列

アサガオのように凋んでしまう午後

暑かった今年の夏物を畳む

聞き返し聞き返されるこれも歳

富士見市 中島 通則

当たり前の有難さ知るウイズコロナ

喧嘩しつつ自粛乗り切る夫婦愛

蝉しぐれ帰れぬお盆偲ぶ亡父

中古車も見方変えればウインテージ

本棚に青春の夢眠ってる

寝屋川市 廣田 和織

万歩計百歩満たない日が続く

他人とは関わらぬようするマスク

接触を断ち切るように手を洗う

コロナ前の思い出あせてセピア色  
リモートの句会じゃ参加できないし  
癌コロナ熱中症のどれにしよう

鳥取県 田中 重忠

人間が天狗になると墓穴掘る

老い独り土鍋一つで事足りる

人の道狂わす欲と札束と

ルーベで見る御輿をかつぐ蟻の列

親孝行他人がしても目が潤む

湧く水はお宝 洪水は魔物

大阪府 松田 聡

雷の恐さいくつになつたとて

台風で仲直りする老夫婦

増えているゲリラ豪雨に策はなし

国民をバカにしている安倍辞任

オンライン飲み会に慣れ夏は逝く

テレワークいつまで続く孤独感

福岡県 本田 さくら

戦時中若い命が無残にも

眠れない外は蛙の合唱団

孫二人「アイスちょうだい」口ぐせに

眉だけはきれいにかいてマスクする

駅ピアノ弾く人自信たっぷり

コロナなど関係ないと青い空

和歌山市 北原 昭 枝

和歌山県 三 枝 眞智子

線香の匂いが好きな仏様

匂のものをいただく命ありがたい

そこそこの暮し秋刀魚を二匹焼く

残像を追えば暮れゆく夕茜

野分け過ぎ置きみやげする爪の痕

和歌山市 倉 橋 悦 子

長雨と酷暑猛暑によく耐えた

生ぬるい水道水に風は秋

自粛にも慣れて片付く不要物

風化してほしくないもの抱いている

わたくしを紅葉の頃にリニユール

和歌山市 まつもと もとこ

人生のエール朝ドラからもらう

逢えなくて忘れられない人と知る

笑ったり泣いたりわたし忙しい

はんなりとぬるめの爛に舌が酔う

ビビッドに笑う撫子ピンク色

岩出市 村 中 悦 男

途中の目覚惜しい楽しい夢なのに

遠い耳聞こえたような顔にする

お若いお声言われほころぶ電話口

見返す日記去年も酷暑越えて来た

年だからこんなものだと言う主治医

施設訪問慰問袋へ夢いっぴい

「いたかしてこの味はのし」里は秋

軽い乗り詰めの甘さが命取り

身代が揺らぐ大事へ身構える

向日葵も酷暑に負けてお辞儀する

和歌山県 森 下 よりこ

年毎に夏を越すのがつらくなる

見てる分アメリカ選挙面白い

朝夕はそれでも仕事出来る幸

ばあちゃんの仕事ばっちり裏の畑

父母よりも長生きの記録を伸ばす

鳥取市 大 前 安 子

おはようのトーンが今日を決めていく

縄電車ひとりじゃ走れないのです

輪の中で自分らしさをそっと出す

少しかだけ昭和の話しましょうよ

令和ですコロナよカーブ投げないで

倉吉市 宮 田 風 露

酷暑続きテレビ相手に愚痴を吐く

秋なのに汗だくの日が続いている

汗拭いはずした眼鏡かくれんぼ

歩いた道辿ればそこに母が居た

歩く道これから先は楽しんで

米子市 妹 能 令位子

粗末でもやはりびったり作業服

素朴だが粗末ではない母の味

ファスナーが背中ではまり亡夫おもう

炎帝も代替わりしてこの酷暑

荒行と思う酷暑の畑仕事

鳥取県 下 田 茂登子

雑草の強さに今日も腹が立つ

掃除する元氣も失せて寝るばかり

銭ならぬ山も畑も税は取る

赤い糸がみついても無駄なこと

同居した息子と意見違い過ぎ

鳥取県 本 庄 汪

星明り遠回りして帰った日

自分にも送ってうれしお中元

百薬の長のお陰で今元氣

逆光が幸いしたかい男

ソプラノとバリトン聞いた至福の日

松江市 中 筋 弘 充

猛暑日には止めましようかね厚化粧

猛暑日には止めましようかね口喧嘩

猛暑日はステテコとてもいい具合

猛暑日はクーラー付けて深海魚

腹が出てパンツのゴムがすぐ伸びる

安来市 原 徳 利

照焼きをされた列島反り返る

立秋を過ぎて暑さの記録会

麩饅頭供え先祖の機嫌とる

湯引きされすつぼんぼんのプチトマト

晩年はやさしかったと言われたい

笠岡市 小 野 美那子

大変さ見せない母の台所

見あげると母と重なる丸い月

再会の余韻乙女の頃遙か

八十ふたり牛の歩みで参りましょ

浅いけど波紋怖さに投げぬ石

瀬戸内市 宮 宅 比佐恵

普通ならオリンピックで湧きたつに

巣ごもって诗情豊かにペン走る

一言に心ある人ない人と

密さけて補聴器いつもはなせない

遠くから祈ることしかできぬ身に

広島市 田 桑 恵 子

青い空ピンクに揺れる百日紅

黒マスク人によつては悪人に

スニーカー旅に出たいとすねている

牛乳を一气飲みする山帰り

孫からの絵文字に顔がついゆるむ

尾道市 小川道子

ありのまま老いのリズムで漕ぐペダル

おもいきり洒落でも言うて笑おうぞ

涼しげな色のマスキの下は汗

雑巾もリバーシブルで洒落ました

新しい水晶体に秋の景

尾道市 小畑宣之

登るより眺める山さ富士の山

タイムマシン往き来したいね過去未来

負けないぞこだまがエール頑張れよ

赤っ恥をかいて益々たくましく

正か邪か直ちに見抜く目が欲しい

竹原市 土井輝恵

タレントの不祥事ファンの心揺れ

築五十ポツリポツリと蝕まれ

広島の恥を晒した選挙民

農暮し都落ちではありません

リモートの背後の飾り目を癒す

府中市 岸田武

何よりの供養仲よくやっている

宰相が退くと派閥のボス動く

竹を割ったようにはゆかぬ腹の中

のほほんと暮らしていても肩が凝る

おしゃべりが済んだら妻は寝る気配

三原市 笹重耕三

未だ一度も秋刀魚が食卓に着かぬ

満点を取ると落ち着かないヤル気

老々介護柱時計のネジを巻く

砂を吐くために時どき読むマンガ

生きている証晴れたり曇ったり

大洲市 花岡順子

言い訳をしない背中を信じてる

きれいごとだけじゃなかった汗を積む

食欲に振り回されてグルメ旅

四面楚歌母のぬくもり抱いている

落ち込んだ時こそ空を見て歩く

高知市 三谷松太郎

草刈機もつと刈ろうと老いに檄

リアーにはなじぬ老いのオトリ掛け

暑過ぎてムシも出て来ぬ山暮らし

カナカナも鳴かず聞こえず暴風雨

どくれもん根はくそ真面目恋もせず

佐賀県 真島久美子

間違えた数が誇りになつている

モザイクを消す方法を母に聞く

折り返し地点手前でする牛歩

矢印が一番悪い人を向く

わたくしの半分不透明な水

沖繩県 禱 モモト

買ひ物は時短済ませとアナウンス

夏休み回転寿司のかき氷

気遣いは孫とマスクのままである

自粛してスマホ私も家籠り

手作りの紅型マスク御招ばれに

黒石市 石澤 はる子

想い出のかけらを探す無人駅

ピフォアフターさほどでもないファンデーション

腹八分残りの二分に棲む魂

仰山の枝葉を羽に飛ぶ囀

優しさに触れた場所から発芽する

仙台市 月波 与生

肋骨まで届く食パンのうまさ

惚けたふり光合成をしています

食わず嫌いのまま旅がまた終わる

病み上がりの空に噴水止まらない

次々と蛸足配線する家族

東京都 高岡 弥生

親離れなんて上手な子供達

いつまでもいい子いい子をしていたい

コロナでも予定が少し増えてくる

子育てで自分のエゴに気づかされ

墓参りコロナで行けず気持だけ

横浜市 加藤 佳子

再会の句会参加者ぐっと減る

酔芙蓉白から赤へ変わる妙

朝の散歩でスイッチ入る今日の計

廃業へ身近な店が追い込まれ

ウイズコロナ何か空しい造語です

各務原市 喜多村 正儀

朝露に学ぶ命の仕舞い方

秋の香を包みあなたへ紙つぶて

少しだけ今日の余白に明日の風

努力家が仲々勝てぬ世の不思議

真っ直ぐで少し影ある人が好き

名古屋市 富田 末男

楽しみを一杯予約する故郷

目標のハードル上げて鬼になる

弱点を知って学びを強くする

考えを少し変えたい記事に会う

迷うのを止めて明るい顔になる

八幡市 武田 悦寛

定刻に般若心経セミの声

半熟の卵のように生きてきた

大小の愚痴寄せ集めシユレッター

柱キズ子等の成長手でなぞる

芋粥に梅干し添えて置き手紙

大阪市 石田孝純

古里へ無垢な私に会いに行く  
廃校に忘れた夢の蜃気楼  
古里の秒針のない古時計  
古里の九月の風に身を任す  
蹟いた石はあの朝蹴った石

大阪市 近藤風羅

コンビニのカップおでんでひとり酒  
還暦の還暦らしき貌となり  
セミの声いつしかおけらの声となり  
茜空なんでもないよな気にさせる  
お茶買ってついプリンまでかごに入れ

大阪市 阪本秀子

蝉時雨さえて土へと輪廻する  
街角を曲がれば秋の気配する  
はつらつときは背中に羽はえる  
白髪に憧れながら髪そめる  
玉音を父母もきいてた終戦日

大阪市 樋口眞

薄命の妹想う熱帯夜  
補聴器を外さずシャワー大慌て  
運動の足しに浴室掃除する  
歩く距離現状維持がやっこさ  
ウォーキング古い仲間はもう居ない

大阪市 中村民子

必要とされて私は奮い立つ  
眠ってる病をよそに不殺生  
夫婦仲良くも悪くも続いてる  
若作り工夫すれども老い消せぬ  
山寺で秋の兆しの風が吹く

大阪市 中村峰子

思ひ出はうれしいことに絞ります  
摩訶不思議笑ってるうち元気でた  
許します恨みが病招くから  
おせっかい思いやりだと勘違い  
クワガタが動きを止めて夏がゆく

大阪市 降幡弘美

熱気まで一緒にたたむ白いシャツ  
帰省時の楽しみ父と観る野球  
じいちゃんがよくやっていた塩うがい  
太陽を浴びて喜ぶスニーカー  
いい事の倍返しなら嬉しいね

池田市 上山堅坊

夕焼けの空へ明日の夢を描く  
早起きを苦にもしないで行く句会  
友の訃にぼかんとしてる夏の午後  
故郷に猪鹿だけが住むやがて  
大きな波無事に乗り越えきた米寿

池田市 倉 本 一 弥

ビデオ通話孫らがチュチュと投げキッス  
四頭身三歳の孫むちゃ可愛い

老いて胃までが縮んでしもたすぐ嘔気  
人生劇場寄らば大樹で生きたけど  
子が自立朝はパンからお味噌汁

泉大津市 助 川 和 美

コロナ禍で五分の許可の老母に会う  
道端に捨てられマスク風に舞う

ままごともレジはカードでお買物  
胡瓜にも素直なものや歪むもの  
仏壇のコップに氷入れ拌む

泉佐野市 檜 葉 良 子

色褪せた写真に夢も映ってる  
平気ですこほれ種でも花咲かす  
責任を痛感だけで終る国  
まだ婆の自覚無いのに六十路坂  
コロナ禍で初めて試練戦後っ子

門真市 坂 本 星 雨

使えないマスク残して辞任する  
コロナより昭恵夫人に疲れ果て  
無症状若さは我慢などしない  
ふぐちようちん消えて道頓堀も雨  
新総理へ期待しないで酒を飲む

吹田市 岩 口 のぞみ

今晚のサンマ夫婦で半分こ  
給付金無理に貯めとく金じゃない  
GOTOに踊り飛び出て高くつく  
自肅中身体を鍛え本を読む  
反省会ただ呑ん兵衛の主婦の会

豊中市 齋 藤 奈津子

地藏盆ゆれる提灯名を探す  
終活に処分する本斜め読み  
お頭付きサンマで祝う誕生日  
筆筒ごと捨てないとまた増える服  
手作りマスクこれぞとばかりプレゼント

豊中市 松 田 蟻日路

待つ人は来ないコンビニ駐車場  
クイックペイに急ぐ足元すくわれる  
胃も腸も腰も痛い死にません  
萎れそう俺と一緒にひまわりも  
樹酒列車景色味わう暇なく

寝屋川市 岡 本 勲

願いごとあまり多すぎへたる笹  
口元のテンポのよさがわざわいし  
気分よく泳がせて妻手綱引く  
あじさいに蛙が乗って雨を待つ  
子へ孫へ税の知らない知の遺産

寢屋川市 川本信子

スランプと歓喜交互にやってくる  
O脚が曲がった腰を支えてる  
髪カットからだ全部が軽くなる  
振り袖になった二の腕孫揺する  
いい寝覚め何をしようか腕捲る

東大阪市

秀 爷

既読スルーエールの来ない孤立感  
罵詈雑言笑顔で耐えた日を思う  
おべんちゃら忘れてしまう定年後  
運のない友の無念に涙する  
凡人に育ってくれてほっとする

神戸市 青山ひろし

マスク越し秋の酸素を肺に入れ  
リプレーに出ないが不満コマキスト  
母の目が嫁にへつらう息子視る  
この話つづきメールとバスが来て  
注いでやりなだめの言葉探す宵

神戸市 石川克美

台風は人智警戒嘲笑う  
災害のひどさに胸が潰れます  
お気楽な老後夢みた日もあった  
水だけで日ざしに耐えてるグリーンたち  
この暑さ蛇口ひねればお湯が出る

神戸市 斎藤隆浩

夏終わる祭太鼓を聴かぬまま  
木陰に車停めて昼寝の癖がある  
老いらくの恋今やデートはオンライン  
酒のあて目刺しやっぱり頭から  
やっとこさ投句を終えて飲むビール

神戸市 田本古鈴

燃え上がる朝日よ今日も戦わん  
なにもかも昔話と口惜しむ  
句が出来ぬそんなタバコの苦い味  
いろいろとありましたから飲みましょう  
失恋も話のタネの老後かな

神戸市 米田利恵子

録画してた父母を囲んだ三回忌  
夏バテに百人力のコメ洗う  
未来的ロボット雇い乗つ取られ  
歯石取り明日は面接日だという  
若者言葉めっちゃめっちゃとデカくなる

神戸市 山根弘華

若き日の恋の亡き骸胸に抱く  
風鈴に一句つるしたひる下り  
川柳で老いの生き方教えられ  
老い一人ドラマ演じる幕を開け  
今日からは白寿を生きる第一歩

伊丹市 延寿庵 野鶴

令和二年悲しいことが多過ぎる  
ここで咲く覚悟を決めるこぼれ種  
地獄の抜け道閻魔に聞いてみる  
コロナ禍で夢が壊れて行く現世  
玉ゆらの命を残す一行詩

伊丹市 岡村 風琴

サルビアの絨毯へ秋風と乗る  
炎天下案山子に帽子借りました  
ほっとする地蔵の笑みに手を合わす  
レタス剥ぐあなたの本音知りたくて  
合せ鏡わたし輝く時がある

三田市 稲角 優子

朝日浴び今日の予定をたしかめる  
想い出が笑いうみだす夫婦鍋  
夕立に流した恋よ明日は晴れ  
生きることに利那利那と思う日々  
夜汽車ゆく旅は銀河のほとりまで

三田市 住吉 美和子

謳歌した蝉の亡骸埋めてやる  
被災地の人を想えばガンバレる  
茹だる午後頼まれ事はみな却下  
天気予報日本列島真っ赤っか  
七ヶ月出るにすらぬ籠の鳥

三田市 森 玲子

自粛自粛足が悲鳴をあげている  
八月は日本列島真っ赤っ赤  
この暑さ指を折っても浮ばぬ句  
うちの風呂今夜別府で明日有馬  
お出掛けにチョット濃いめのアイシャドウ

宝塚市 太田 としお

コロナから学ぶべきことたと有り  
簡単に命がけとは言わないで  
あたりまえこれがなかなかむつかしい  
与党は投手野党は捕手の組み合わせ  
勝って飲み負けて飲んでるお父ちゃん

宝塚市 岸田 万彩

補聴器と眼鏡とマスクつらい耳  
コロナ禍が静かに生きる術教え  
友の死にテレ合掌の家族葬  
五輪などもつてのほかという猛暑  
純愛が犯罪となるストーカー

三木市 山口 ヨシエ

ふとよぎる昭和の暮らしまぼろしに  
逢えなくて幽かな慕情湧いてくる  
予期しないシナリオ歩幅乱れがち  
逆風に抗う勇氣太い足  
さらさらと秋風ふつと力抜け

奈良市 尾畑 なを江

ちよっかいの多い子猫はケージ番  
袋トジ開けて時間のムダ使い  
暑いのに秋の虫鳴く夜の庭  
似たくないとかまで似るが遺伝子か

奈良市 仲西 賛郎

背のびせず周りにせずマイペース  
晩酌の付き合い人は飲まぬ妻  
コロナ去れ指折り数えて待つ旅行  
いつも行く店の名が出ぬもどかしさ

生駒市 饗庭 風鈴

明日など今日をしのげばついてくる  
風神雷神引っぱり出して神だのみ  
単独行ゆきて帰らぬ時もある  
めげている場合ではないミスチヨイス

生駒市 児玉 規雄

まだまだとなかなか書けぬ遺言書  
遺言は妻へ最後のラブレター  
マスクして団扇片手に散歩する  
のろのろとのろのろのと秋が来る

奈良県 室田 行久

良葉は家族の支え声メール  
枝雀聞き笑い免疫力アップ  
久しぶり洗髪されて身も清し  
失禁症男の沽券丸つぶれ

和歌山市 定松 宏枝

年寄り少し派手目の服選ぶ  
一仕事汗を出し切る草耆り  
野分より恐い女房の低気圧  
外出着吊したままの八月尽

和歌山市 佐藤 まき

三密避け山に求める新天地  
ともかくも老いては自粛して暮らす  
バス停が取り払われて足割がれ  
目の前のバス停哀し杭の跡

和歌山市 鍋嶋 澄子

ワタスゲの続く湿原かるい足  
気くばりがいつも徒花うそだろう  
井戸へスイカ昼寝のあとのお楽しみ  
彼岸花プチプチおつて首かざり

和歌山市 西川 千鶴

口下手を寡黙と呼んで胡麻を播る  
手弱女と言われて出来ぬ喇叭飲み  
風鈴を仕舞い入院支度する  
後一つ足りぬピースを探す旅

和歌山市 福島 一雄

嵐去れ稲穂は折る頭垂れ  
六十年経ってもできぬ月旅行  
路地入れば夕餉のおかず直ぐわかる  
七転びひとの情けで乗り切れた

鳥取市 上山一平

初めてのスーパー台風体験す  
肥満児の相撲一筋ちゃんこなべ  
スマホより笑顔で結ぶ草野球  
畑肥え姑嬉し秋なすび

鳥取市 坂本とも湖

曇り空陽が沈むのか闇へ立つ  
大雨でカエルも沈み座禅組む  
振り向けば没句ばかりで身が沈む  
コウノ鳥おしむことなく旅まわり

鳥取市 山野すみれ

幼子が仲を取り持つ一つ屋根  
どこを転んでみても釈迦のてのひら  
絡まってほどけなくても糸は糸  
ありがとうやつと素直に言えました

倉吉市 伊藤嘉昭

孫たちのキャッキヤの声は爺いじめ  
から元氣コロナ去るまでこの調子  
無観客試合良ければ素晴しき  
この人生良かったかと妻が聞く

倉吉市 堀かずこ

悩むまい明るく生きる明日を待つ  
いつだって楽しい事は夢ん中  
ひとり身は虫の声さえ寂しいよ  
暗い日々いつかは晴れる信じたい

境港市 中井虎尾

天よ聞けゆくゆくと鳴く蟬の声  
繁る草抜くなら抜けと笑つてる  
青い空白い雲浮く大砂丘  
力つき球児今季で引退す

境港市 藤原久直

たつぷりと暇も時間もある余生  
ちよつとした妻の一言いい葉  
検診は薬効果で正常値  
被災地へ心を送る義援金

米子市 川本美津子

散歩道マスク外して深呼吸  
核家族増えてつき合い変わり行く  
すこし秋虫が鳴き出す残暑の夜  
苦勞した証に残る顔の皺

松江市 相見柳歩

汗流し育ててくれた愛想う  
ふわふわとしていた恋は甘かった  
愛満ちる仏と人の間にも  
送られてうれしくなるよ手書きだと

松江市 山根邦代

トキメキを拾いに行こう古里へ  
ふる里は想い出の地友の声  
じっくりと向き合えばいい案が出る  
苦勞した人とは話し分かり合う

出雲市 黒目 ひでお

猛暑に豪雨日本の夏の風物詩  
川柳に思いを載せてひたすらに  
猛暑には総身に知恵が回りかね  
人種差別デモで人権訴える

雲南市 永見 安子

あいうえお一人時々言ってみる  
いつくれるしびれ切らして待つメール  
一人居は大声出して背伸びして  
つい無理をして後悔の積み重ね

益田市 篠原 紋次郎

涙より負けないけれど足りぬ汗  
親友は車と紙とボールペン  
逃げる事上手になって秋の虫  
比較という俺を困らす文字がある

鳥取県 橋谷 静江

健やかな生活いつまで出来るやら  
私ってこんなに弱くなったのか  
コロナ菌お蔭で友に会えぬまま  
自家菜園野生動物先に食べ

津山市 高橋 由紀女

早朝の草刈やむを得ぬ猛暑  
警鐘を鳴らす何でも遣りたがり  
手料理も手縫いもおぼろ亡母の背な  
無花果も熟柿も好きな血糖値

美作市 岡本 余光

川柳が余生生き抜く羅針盤  
見栄棄てて損することは何もない  
メールでの小言は効かぬ電話する  
テレビとの会話たまにはする独り

広島市 常國 喜好

リハビリは辛い廊下は長すぎる  
どなたにも付度しないエンマ様  
本当に偉い人なら辞めている  
逆風の向こうに待っている未来

広島市 松尾 信彦

肩書ははずせば膝が寄ってくる  
風呂敷はニーズの変化昭和の美  
真つすぐに生きて縁なしオプジーボ  
隠す物なくて膨らむ好奇心

竹原市 若年 幸子

百名山踏破は茶の間TVから  
道草も楽し昭和の通学路  
ベテランへ新車あれこれ指図する  
気まぐれな天気へじれる万歩計

阿南市 小畑 定弘

善人の仮面をはずす午前二時  
人間の弱さを嘆うコロナ菌  
好きになる気持を恥じることはない  
ママさんに返しそびれる傘がある

松山市 大内 せつ子

風向きをかえるのはあなたですから  
ピエロでいいの最初はグーの物語  
いいつけにそむきたくなる抽象画  
さよならへ色を重ねている途中

松山市 郷田 みや

見逃してもいいと思えた通り雨  
ひび割れはそのまましておこう今  
病室から管が取れたとラインくる  
わだかまり視線がすつと逸れました

唐津市 岩崎 實

老いてゆく体育てる献立表  
グイ呑みでさしみ天ぶらうまさ増し  
豆ご飯小梅一粒おかず食べ  
昼食にカッブめんをも取り入れて

唐津市 前田 廣幸

騙された同士で紡ぐ夫婦仲  
雨読日と天は吾が身を知り尽くす  
エアコンのローンで消えた汗疹かな  
国民に非ずと言えた戦時中

宮崎県 黒木 栄子

コロナ禍に帰省ならぬと母の声  
山頂のパノラマ心留守にする  
孫の守追われて今日も日が暮れる  
廃村に馴染んだ我が家後にする

沖縄県 あら さくら

店内の冷風もれる通り道  
ドンと来いコロナに向かい知恵しぼる  
反省をことある事に繰り返す  
いいのがれやましいほどにキズ深く

沖縄県 宮 すみれ

ほけたかも友のしゃべりはまともです  
ネジをしめてゆらゆらイスに活入れる  
肩ポンとマスクの友の笑い声  
家ごもり見つけた趣味に無我夢中

黒石市 北山 まみどり

笑いすぎだろうか揺れている目盛り  
いつからかポロリ出てきた過去のシミ  
私から折れたりしないレモン噛む  
晴れた日も慎重にする道すがら

五所川原市 むらの ひとり

子の次はばあちゃんの番紙おむつ  
転んでも起きる稽古と言う親父  
お気に入り茶碗が割れて投げる過去  
叱られて小さな家出夏あざみ

弘前市 高森 一 吞

ダム湖には先祖のリング咲きほこる  
しなやかに生きて輪廻の道辿る  
さらさらと仮名もじで書く母の文  
正論を吐いて世間が狭くなる

栃木県 廣瀬良磨

綱引きをしているみたい秋と冬  
秋祭り月はいつもと変わらない  
中トロと肩を並べる秋刀魚かな  
片隅に嫌いな冬がじわじわと

横浜市 巖田かず枝

聞き違い言い間違いが種になり  
七十二椅子につかまりスクワット  
免疫を考えよく寝よく食べる  
防災の準備はせずに恐がって

神奈川県 小田幸子

花の色熟するほどに深くなり  
ころがされ角なくなつてつやが出る  
悲しさを笑いとばして立ち直る  
看護師さん百戦錬磨優しそう

南アルプス市 小林金剛

生きている生きてる限りつらい朝  
苦しみに生まれる命光る愛  
雄然と悪夢の道突っ走り  
さあさてなアワレナピエロここに舞い

石川県 堀本のりひろ

古女房切っても切れぬ赤い糸  
古女房くびったけです共白髪  
古女房三步下がってついていく  
口とじて堪えて堪えての五十年

浜松市 中田尚

日めくりはうそつきですねまだ暑い  
百歳へどんどん厚くなるカルテ  
外食をタッチパネルであきらめる  
百円で天然水を売る日本

名古屋市 山本三樹夫

初サンマ高くて妻と半分こ  
早朝の杖に感謝の散歩道  
コロナと熱波怖くて部屋でテレビ番  
拉致問題いつ解決か重い壁

江南市 脇田雅美

想定外経験不足の人が言う  
朝日浴びぐんぐん育つ植木鉢  
父の齢十年越えて兄は逝く  
車庫にない友の愛車に留守だろう

豊橋市 小松くみ子

鳴き切ったセミ待っている蟻がいる  
キッチンも危険な暑さ手抜きする  
夏だつてシャワーだけでは不満足  
夏バテか卵も産まぬメダカたち

豊橋市 西郷紀美代

列島が燃え上がってる夏猛暑  
テレワーク家事も頼まれする息子  
制限で食べられないのに見る料理  
収穫の黄瓜を提げて安否問う

京都市 北野 クニオ

満足が成長の芽を摘んでいる  
各停の旅を楽しむ若い二人  
褒め言葉隠れた力掘り起す  
温暖化さんま一匹二千元

大阪市 今村 和男

壁の絵はどう触っても傾いでる  
草花に後先がある如露の水  
闇の中指先だけで見つめあう  
鶴を折る菜包みが小さくて

大阪市 岡田 恵子

なめらかにいかぬシニアのフラダンス  
百歳まで生きる覚悟のスクワット  
コロナ禍でゆるんだ螺子が錆びてきた  
リモートの部屋には薔薇をさりげなく

大阪市 岡本 五六

気に入りの椅子にはいつも猫がいる  
好きだけど嫌いだけどルビー婚  
いつの日か子に聞かせたい母の恋  
ひとりじめ夜明けの町を闊歩する

大阪市 柴本 ばっは

あの戦後生きた両親気丈です  
川柳会中止毎日普段着よ  
阿と咩で会話が足りる老夫婦  
思考力歳とびつたり正比例

大阪市 前川 善之

人生の曲りくねるも勇氣出せ  
大阪を遊びにするな都構想  
暑い夏怖いコロナと熱中症  
平和とは砂で作ったにぎりめし

大阪市 宮本 千恵子

豆アジとビールで酷暑乗り越える  
墓参り後のランチ楽しみ草を引く  
コロナと日焼け防止にマスク離せない  
ああマスク今日もポイ捨てされている

大阪市 森 廣子

出かける度に降られてツキの無い女  
笑えない胸のつかえが澱み出す  
一人淋しくホテルランチを食べている  
私のつむじ風台風と根競べ

茨木市 細田 マキコ

酷暑にも病院通いコロナでも  
枯れ枝にバツタ一匹とどまりて  
鳴く虫やカラオケ虫がうずき出す  
螭螂とバツタ共闘吾亦紅

河内長野市 穂口 正子

ごめんねの一言あれば済んだこと  
酔うにつれ自分語りのカタルシス  
マスクしてどんだん私老けていく  
願わくば楽に逝きたい鉦たたき

堺市 古川 光雄

手にコロナ付いてるつもりで手を洗う

ありがたや年金老人にも十万円

黒マスク腹にいちもつありそう

一日中コロナに脅え過ぎて行く

堺市 羽田野 洋介

ひいきチーム勝利の旗は白昼夢

ポケットが浅くて小銭転げ出す

すぐそこと聞いて足取り軽やかに

流行語大賞これだ無観客

高槻市 三谷 白黒

集わぬと何もできない人間は

孫と釣り爺の思い出増えました

これからはマスクファッション仲間入り

キュウリにも袋かぶせてケモノ避け

豊中市 荒木 郁子

いざ出陣マスクに帽子 供は杖

ステイホーム時間あるのに気力失せ

炎天下お茶の誘いにいそいそと

お互いのペースで暮らす老い二人

寝屋川市 坂本 ミヨノ

綿飴買う子供みたいにかぶりつく

赤とんぼ秋空回わる十月や

抱き合った焦げた餃子はビールアテ

市の花火コロナ都合でやめになる

羽曳野市 黒木 ひとみ

人生の起伏乗り越ええびす顔

山道の起伏踏みしめ風受ける

名優の死昭和の灯また一つ消え

暑さ耐え稲穂出揃い実り待つ

八尾市 田邊 浩三

各知事にテレビの出番多くなる

レジ袋粒にマスクと手作りで

期限過ぎばかり食べて妻元氣

熊までがコロナの恩恵受けるとは

大阪府 大浦 福子

コスモスが迎えてくれる無人駅

紅葉にあなたと染まる京の旅

鮮やかに夕陽まるとって柿のれん

枯れ葉舞うひと葉ひと葉にあるドラマ

大阪府 高木 道子

まんじゅしゃげ真つ赤なルージユの色で咲く

稜線に昨日と同じ雲が乗る

鶏頭の赤き情念茎までも

歩いても駆けても列島コロナ風

神戸市 輿水 弘

互いのイビキからかい今日の話ネタ

おしゃべりが陰をひそめたコロナ後

隠し持つ棘は忘れてこれでいい

窓開けて私の空気入れ換える

神戸市 近藤 正

コロナ禍が地域の絆引きちぎる  
三密を避けて家族もバラバラに  
三密が理由か孫子音がない  
たが緩み視線で気づくノーマイク

神戸市 櫻井 崇史

かき氷選ぶ決め手は好きな色  
かき氷一緒に頼む熱いお茶  
ポケットにお守り入れて買い物に  
ぼちぼちと旅の広告顔を出す

芦屋市 新 阜 義 明

温顔でくちなしと散る渡さん  
絶好調源泉のごとく匂が湧いた  
入道雲ソフトクリームおいしそう  
長雨が酷暑しつかり下支え

尼崎市 山田 厚江

仕事辞めバイクに乗って風になる  
政治家は八十過ぎて皆元氣  
開かずの間ギイッと開ければ伏魔殿  
人形にボブという名を付けている

伊丹市 平井 富夫

ジジババが夢に出てきて墓参り  
嘘が下手いい秘書雇えメモ渡す  
うちのポチ妻と俺とを見分けてる  
また干され幾度洗うの布マスク

三田市 生田 えい子

湯治湯で言葉かけ合う田舎弁  
めっちゃ若い言われ思わず杖たたむ  
残飯も勿体無いで太る腹  
褒められてその気で買った高値服

三田市 木村 マユミ

旧交を残暑見舞で温める  
観戦もエール届かず覇気がなく  
この猛暑北極熊になりました  
うとうとと昼夜逆転深夜便

三田市 幸田 厚子

遊園地老舗の歴史消す葉月  
家族葬事後のおしらせ著名人  
秋刀魚でもと言えぬ高値で缶詰に  
違和感なくマスクいろいろ見る日頃

三田市 辻 開子

洗濯機夏日続きで疲れ気味  
エアコンが猛暑続きで疲れ気味  
鈍行旅ビール片手に一人乗る  
給付金ほしい家電に少し足す

丹波篠山市 澤 良子

ムカゴ採り指より太い虫も取り  
終活は荷物持たない旅準備  
懐メロがわたし支えた応援歌  
蒔いた種こぼした種に先越され

丹波篠山市 藤井美智子

コロナ禍と酷暑台風難つづく  
コロナ禍へマスクの暮らしきつい夏  
うっかりで止めておきたい認知症  
中ぐらい暮らしなんとか今日生さる

丹波篠山市 横溝安子

安売りの日には三密さけられぬ  
帰るなりウガイ手洗いせかされる  
網戸ごし外の世界は炎立つ  
嫁姑心の窓を開けましょう

三田市 中山昭美

この夏の暑さ知ってる電気代  
古キッチンほうびの様な風通る  
殺虫剤ごめんね言って念入りに  
老春に寄り添っているマイスマホ

三田市 馬場貴美江

熱帯夜秋の訪れ虫の音に  
盆僧侶マスクで読経やむを得ず  
曾孫には盆玉送る年金日  
猛暑日は蝉もなかに我慢する

西宮市 高瀬照枝

ひんやりと杉参道の寺ほとけ  
水を飲む汗が体の掃除する  
救命の心にひびくヘリコプター  
換気扇窓あけウイルス逃げて出る

西宮市 高橋千賀子

丹波まで黒豆腐買いに行く  
値段より粒で選んだ丹波栗  
時々ブランド着たいかかしの子  
稲穂垂れ食べ放題のすずめ達

(前月分) 横浜市 長島亜希子

チンだけで出来る料理を伝授され  
マスクに帽子なせ分かったのわたしって  
ペディキュアに元氣もらって出かけてく  
式典に来賓なしも良いものだ

(前月分) 倉吉市 大羽雄大

のどごしが良くなってきた回復期  
電線が無くなり空の広さ知る  
村からのバスは赤字を乗せてくる  
耳にタコ硬くなってく愚痴小言

(前月分) 岐阜市 喜多村正儀

慢心を責める太鼓の乱れ打ち  
小雀を呼んで遊ばす鬼瓦  
山容がやさしい里はもう近い  
形から入って心整える

(前月分) 八尾市 山川寧

喜寿の夏「老人力」を読み直す  
朝ドラが始まる今日が始まる  
嫁は喜び娘は嫌う外食よ  
朝がきた菌みがき目薬コーヒーの香

## 英語 de Senryu ⑩

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

さて金となると 友達甲斐もなく

*when it comes to money  
we quickly become  
meaningless friends*

日本びいき 箸の持ち方まで習ひ

*the person  
who loves the ways of Japan  
learns how to use chopsticks*

---

*come to* 考えなどが人の心に浮かぶこと *quickly* 素早く *become* ~になる  
*meaningless* 無意味な *person* 人 *the ways of Japan* 日本のやり方 *learn* 学ぶ  
*how to use* 使い方 *chopsticks* 箸

---

### ～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句④ 海外の詩人の書くハイク

海外の多くのハイキストは、テーマが明確であることや、独自の表現形態で発表することを意識しています。例えばルース・ヤロー (Ruth Yarrow USA) のライフワークは自然環境保全であり、「環境ハイク」が彼女のテーマです。そして原発撤廃キャンペーンや、ネイティブアメリカンの生活改善運動から生まれる作品は、彼女を社会派ハイキストとして確立させました。

またフィリピンに暮らすロバート・ウィルソン (Robert Wilson USA) は、かつて自分が参戦したベトナム戦争 (1960-75) や居住する土地のスラムでの生活、田園の暮らし、さらに日本の原発問題をテーマにしています。私はベトナム戦争参戦後の PTSD (心的外傷後ストレス障害) を扱った戦争ハイクの論文を書く中でロバートのハイクに出会いました。勤務校の授業でも紹介しました。ベトナム戦争終了から半世紀近く経った今もロバートの心には戦争が息づいています。

次に紹介するのはリディア・ロズムス (Lidia Rozmus Poland)。彼女は編集者、ブックデザイナー、ハイク詩人、俳画作家です。ハイクと俳画が共鳴し合う作品は、禅的な雰囲気醸し出します。それでは一句。one breath/ one brush stroke/one (一息一刷け一つなる)。

今回は三人のハイキストを例にテーマや表現形態を紹介しました。それらは日本の「座の文芸」としての俳句創作とは異なるスタンスです。今後、日本人のハイキストは「座の文芸」としての立ち位置と、海外ハイキストの自立自尊のスタンスを共有していくことが出来ると思います。ハイクはモノづくりの世界と似ています。

# 誹風柳多留一二三篇研究 3

細井龍夫・伊吹和男  
高野範雄・山田昭夫  
小栗清吾

清博美

15 めんぶくで来たが今度の地主也

**細井** 今までの地主は奢侈に流れて土地を手放すことになったらしいが、今度の地主は幕府のお触れ通りの、地味な木綿着用に質素な方だ、というのだから、何が面白いのかわからない。店子は大家(管理人)とのやりとりだから、直接地主と逢うことも無いだろうし、おそらく顔も知らないだろう。御教示下さい。

**伊吹**

賛。角小屋敷二度目の地主座頭なり

安元義3

先のに比べて質素儉約な地主。

**清**

賛。

16 時ならぬ敷入それでよめやした

**細井** 敷入は通常一月と七月だが、お邸勤めの娘さんが季節外れに敷入してきたので注目の的になったが、見合いか、結納か、腹ボテか、その何れかの理由であることが判り、近所のおかみさん連中が納得しているところ。

大吉のみくじで不時の宿下り 一四三六  
時ならぬ敷入是だかもしれす 四一九

**清**

賛。

17 一トとをりのべて年礼なきはじめ

**細井** 年礼の来訪者は新年の賀詞を一通り申し述べ終わると、金策がままならず、借金が十分に払えず、掛取りに痛みつけられたことなど、暮の窮乏の数々を涙ながらに語り出した。貧乏旗本・御家人たちの年末の遣り繰り

は殊の外大変だったらしい。

上下でやたらにかゝむひどい借り 菅二四四  
暮のざま麻上下ではなすなり 一四四

**山田** 礎のような事なら泣くような事ではないでしょう。むしろ、

上下でい、わけするハひどいかり

明三桜1

というような場面ではないか。

**小栗** 同。借りがまだ完済できていない。清同。

18 一だんかたる内まつばだかにされ

**細井** 銭湯へ行つて、湯につかつて良い気分が浄瑠璃をまるく一段も語っていたら、その間に板の間稼ぎに合つて、着物をきれいさっぱり、全部取られてしまった男。

てんくにしやうるりあらふ風呂の中

拾九12

湯屋でかたれハ義太夫も丸はだか

一三七二五

よつほとなやくをとしたと湯やから出

拾九30

**山田** 賛。雨譚註「ゆやどろぼう」。

**清** 賛。

19 棚ぎやう八あたまをたゞきくよみ

細井 土地によって形態は異なるが、旧曆の七月十三日にあらかじめ設置した精霊棚に迎え火で先祖の霊をお招き入れ、十六日には送り火で奉送する。その間に菩提寺の僧に読経をして貰う。棚の前で読誦するから棚経という。僧は多くの檀家を廻らねばならないので大忙がし。孟蘭盆会とも精霊祭ともいう。

季節柄、僧侶は坊主頭の蚊を追いながらの読経になる。殺生になるので蚊を殺すわけにも行かず……。

たなぎやうハよむもつ、むもいそかしき

安二義 4

たなぎやうハ七言せつ句程となへ

安元桜 2

銭だけに棚経尻をはしよる也

六二 34

山田 賛。雨譚註「蚊がくう」。

清 賛。

20 うら口ハ出来そこないのけつりかけ

細井 削掛は柳の枝を周囲から削りかけて花のようにしたもので、正月十四日の二度目の年越として、十五日の小豆粥を糊として細く切った白紙で各室や門口に逆さに釣り下げ、

二十日正月の祝い納めとしたが、二十日の風にあたるのを忌んでそれ以前に取り込んだとか。削掛は行商人が売り歩いたが、完成品だけでなく、手作り用の素材も商っていた。

正月もふ半分にけつりかけ 拾一 9

木で花を削つて門へぶらさける 五〇 10

けつりかけ子をさし上てもきららせる

伊吹 賛。表は立派な削掛。 一三 12

清 賛。

21 口書のかふる其節ねたになり

細井「口書」は法廷で当事者の申し立てを筆記した供述書のこと。

遊女が脱廓したので、彼女についていた禿も連帯責任を問われ、縛り上げられ折檻されてしつこく詮議されたが、最終的には「その時禿は寝ていたので気が付かなかった」ということになり一件落着。

高野 子供はおしゃべりである。ある事ない事しゃべられては大人達がこまるわけである。役人に対して「其節寝て居りました」と、

楼主や遣手が言うように言われ、禿は其節寝たことになっていた。脱廓だけではないと思われ。

山田 礎賛。それだけでしよう。

清 同。

22 ひつたくるやうに四ツ手ハかたをかへ

細井「ひつたくる」とはかなり荒っぽい動作だから四枚肩ではなからうか。伴走している駕籠かきが奪い取るように交替する様子を活写したのだろう。急ぐ先は吉原。

にけもせぬ物を買ふのに四まい肩

明五仁 3

清 賛。

四ツ手駕月のみやこをさしてかけ 二一 17

23 雨やとりまんざらおちのすじ向ふ

細井 俄雨にあつて雨宿りをしたのが伯父の筋向かい。しかし、逢えば必ずお説教を食らわせられる伯父は全く苦手な煙たい存在なので、近寄りがないのだ。見つからないようにしなくっちゃ。

にわか雨まさしく伯父ハあそこ也

安九礼 3

にわか雨まさしく伯父のまへをかけ

二一 40

清 賛。

令和2年度 路郎賞



大阪市

小野 雅美

路郎賞準優秀作第一席

土佐清水市 辻内次根

忍び寄る秋の気配を知る障子

旅の当て無いけど時刻表を買う

正座した猫に見られている暮らし

ハイと返事立ったら風の音だった

眠ったら惜しい此の世の持ち時間

路郎賞準優秀作第二席

越谷市 久保田千代

移りゆく時代に添うていく命

寂しくて喜劇ばかりを見たくなる

組板のリズムに残る自尊心

流れつく土地で何とか咲いてみる

命あるものみな愛し今生きて

戒めの笛が忘れた頃に鳴る  
原石を転がすダイヤとも知らず  
孤独なら辞書の範囲を越えました  
前髪を伸ばし表情悟らせぬ  
叔母に会う母の欠片に触れたくて

受賞の一報に驚きでしばらく身体の震えが止まりませんでした。

丁寧にご指導頂いている先生、諸先輩方、選考委員の皆様にご心から感謝申し上げます。

今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

自分らしい川柳を作り続けるつもりです。  
本当にありがとうございます。

柳歴

平成二十九年	川柳塔社	誌友
平成三十年	川柳塔賞	受賞
平成三十年	川柳塔社	同人

令和2年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

大阪市 石田孝純



松山市

おお  
うち  
大内せつ子

初盆の欠けたピースに手を合わす  
まだ返納しません恋の免許証  
白ければベツトになれたかもカラス

家までは二千歩星は三千個

歌えない踊れない日のぬるいお茶

川柳塔賞準優秀作第二席

寝屋川市 廣田和織

シナリオの通りに傘が開かない  
さよならを言わねばならぬレモンティー  
まちがいさがしばかり渴いた恋でした  
こわれそうな夢にもあつた非常口  
砂時計すこし斜めにしてあげる

柳 歴

平成二十三年 川柳まつやま吟社 誌友

平成二十七年 川柳まつやま吟社 同人

令和元年 川柳塔 誌友

泥くさい人生父の白い骨  
ロボットのボヤキは人が聞いてやる  
コンパスで書いた円から出られない  
前頭葉に行燈の灯をともし  
幸せはそのあたりだとナビの声

突然の授賞のご一報、新家庭理事長様からいただき、ただただ驚きと嬉しさがこみあげております。昨年初めて川柳塔まつりに参加。松山の大切な仲間二人の快挙に感激しました。入会してまだ八ヶ月でこの場を選んで下さった選者様には心より感謝しております。

今後川柳を愛するひとりとしてペンを走らせるつもりです。  
本当にありがとうございます。

## 令和2年度 路郎賞得点表 (応募総数106名)

1位 = 5点    2位 = 4点    3位 = 3点    4位 = 2点    5位 = 1点  
(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸		3					5			4			2		1
新家 完司	2							1		3	4			5	
三浦 強一				2	3		1			4			5		
金子美千代								4	3			1	2		5
江島谷勝弘	3	5					2		4			1			
籠島 恵子	3				2	1					4			5	
鈴木いさお	3	5				1						4			2
平井美智子		5					1	2					3		4
大久保眞澄	5		2		3				4				1		
山田 葉子	4	1					2				3		5		
鴨田昭紀	1		3								5		4		2
松本 文子	4			2	1						5				3
川崎ひかり				1				2		3			4		5
計	②5	19	5	5	9	2	11	9	11	14	21	6	②6	10	②2
	辻 内 次 根	藤 井 宏 造	田 賀 八 千 代	栗 田 忠 士	初 代 正 彦	太 田 省 三	内 藤 憲 彦	倉 益 一 瑤	柿 花 和 夫	藤 澤 照 代	山 田 耕 治	森 田 旅 人	小 野 雅 美	丹 下 凱 夫	久 保 田 千 代

令和2年度 川柳塔賞得点 (応募総数42名)

1位 = 5点    2位 = 4点    3位 = 3点    4位 = 2点    5位 = 1点  
 (表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸		5					4			3	2	1			
新家 完司		2		1			4	5							3
三浦 強一			1		4			2				5			3
金子美千代			1	3				2					4		5
江島谷勝弘						2	3	5	1					4	
籠島 恵子				1	4		3							5	2
鈴木いさお		3		1		2							4		5
平井美智子	5						4				2			3	1
大久保真澄	5	3		4					2	1					
山田 葉子	1	4		3								2			5
鴨田昭紀			1	2				3					5		4
松本 文子			4	3						2		1			5
川崎ひかり			5		3	4		2							1
計	11	17	12	18	11	8	18	19	3	6	4	9	13	12	34
	奥野健一郎	月波与生	稲角優子	廣田和織	北山まみどり	山野すみれ	清水久美子	石田孝純	斎藤隆浩	貝塚正子	廣瀬良磨	花岡順子	永井松柏	笹重耕三	大内せつ子

# 令和2年度 愛染帖賞

## 受賞作品

尼崎市 やま 山田 だ 耕治 こうじ

手の甲を抓めば皺がもどらない  
住み難くなったと蚊まで言いに来る

金魚鉢洗えば僕がすつとする

ハイチーズ後ろで背伸びしています

午後十時酒の匂いのする電話

評 山田耕治：現代川柳のメインテーマの一つである「自分の想い」を、「手の甲の皺」「蚊の羽音」「鉢を洗った後」等々を対象に、肩の力を抜いて見事に表している。

まつもととここ：句に取り入れるのをためらう横文字を無難且つ自然に使った作品はそれぞれユニークで愉快。

石田孝純：「呑み込んだ愚痴」「たればを食べすぎ」など、自らの身体を通しての「比喩」であり説得力がある。

北山まみどり：「物差し」や目盛りなど具体的なものに想いを重ねているので明解且つ力強い。

(新家完司・記)

## 準賞作品

和歌山市 まつもととここ

ドモホルンリンクル呪文だったのね

ゼラチンの微妙に効いたラブレター

JISマーク付いたA I選びます

大阪市 石田 じだ 孝純 たかづみ

呑み込んだ愚痴が起こした胃痙攣

たればを食べすぎ前へ歩けない

仮病での休み取れないテレワーク

黒石市 北山 きたたま まみどり

物差しに遊び心を入れておく

食欲と目盛りがケンカばかりする

たいていはプラス思考で乗り越える



山田 耕治

うれしい賞をいただきました。八十歳を過ぎ気力体力弱ってききましたが、しっかりせい、まだまだやれるぞ、これからや、と思っています。ありがとうございます。

今後共ご指導よろしく願っています。

柳 歴

平成十三年 NHK大阪文化センター

川柳教室（講師 橘高薫風）

受講

尼崎尾浜川柳会入会

平成十四年

川柳塔社 同人

受賞作品

生駒市 飛とび永ながふりこ

文鎮の威厳私にまだ足りぬ

評 飛永さんの受賞作品、文房具の中では比較的地味な文鎮を題材としてその重厚な重さを威厳ととらえ、その威厳が私にはまだ足りぬと自戒する。素晴らしい感性の句で、受賞にふさわしいと思います。おめでとうございます。準賞および候補の各2作品ともに受賞作と甲乙付けがたい句。他にも毎月多くの優れた作品に接し、皆様の力作に圧倒された一年、選を担当させていただき大変勉強になり感謝です。

(水野 黒兎)

評 受賞されました皆様おめでとうございます。沢山の佳句に触れ合い充実した一年間でした。一句一句に真剣に取り組む事が出来ました。晴れの檸檬賞に輝いた句は共選二人で選んでいました。ふりこさんの句、自分は人間としての重みとかめしさは足りないかと謙遜した立派な句です。慕情さんの句、昭和生れを誇りを持っている姿と表現されています。葉子さんの句、リズム感が良くさらっとしているが深いところにもさみしさが読み取れます。(鴨谷理美子)



飛永ふりこ

理事長さんからのご一報で、えっ？私、この晴れがましい賞を頂けるなんて思いながらも、思わず自分で拍手をしてしまいました。コロナ禍の中、川柳との出会いに感謝をしつつ、精進をと思っております。皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

準賞作品

青森市 福ふく士し慕ぼ情じょう

新元号歩む昭和の力瘤

長岡京市 山やま田だ葉よう子こ

おじいさんになったあなたを見たかった

候補作品

三原市 笹ささ重しげ耕こう三ぞう

天変地異にまだ耐えている赤い糸

下松市 有あり海うみ静しず枝え

激昂の風ぐまで聴いて聴いて母

柳 歴

平成十一年 東大阪エイシスカルチャー(天笑先生) 入会

平成十一年 川柳塔 誌友

平成十二年 川柳塔 同人

平成十四年 川柳塔なら入会

受賞作品

大阪市 平井美智子  
 平凡な日常というありがたさ

評 本賞の美智子さんの句、日々の暮しのさりげない見つけ(着想)が光っています。ともすれば暮しに色々なことがある私たちには、思わず膝を打つ作品です。

準賞の心咲さんの句、明るくリズムカルな作品。どのようないち抜けた」でしょうか。同じく準賞のひろ子さんの句、「船に乗る」には愛が満ちた決意を感じさせます。

評 本賞の美智子さんの句、強烈なことは使わず、たんたん「幸い」を詠まれ、でも句心はどっしりと心に響き、秀句とさせて頂きました。

準賞の心咲さんの句、「いち抜けた」の上五が目飛び込み共感できる興味深い作品。準賞のひろ子さんの句、はつきりと言い切っているところが魅力。若さがあります。

(久保田千代)



平井美智子

講座、句会、大会と楽しく過ごしていた日常を変させたコロナ禍。「私にとつての川柳って一体何だったのだろう」という想いと格闘しながらの悶々とした半年間でした。  
 今回の受賞は新しいスタートへのエールをいただいたのだと感謝しております。  
 ありがとうございます。

柳歴  
 平成二十六年 川柳塔 誌友  
 平成二十九年 川柳塔 同人

準賞作品

いち抜けたなんて言うから輪が騒ぐ  
 横波も覚悟あなたの船に乗る  
 永見 心咲  
 石田ひろ子

候補作品

言い訳に蓋して風に立ち向かう  
 胃袋を掴んでからのいろはにはほ  
 廣田 和織  
 森田 旅人

# 令和2年度 各地柳壇賞

## 受賞作品

羽曳野市 徳山みつこ

生きるついでいいなトマトの赤光る

評 生きることの素晴らしさ、充実した生の実感をつま  
トの赤に象徴させ一層際立たせている。直截なのがいい。  
準賞の種と土の関係を土を親、種を子とみて親子の信頼関  
係を作者が説いていると解すれば味わい深い。次に折りは  
自身の全てを晒け出し神に委ねる願ひであり、神に託す作  
者の苦悶が窺える。

評 閉塞感ばかりの現実の中、明るくて生命感あふれる  
受賞句に惹かれました。

準賞1 信頼関係は人間や動物間に生まれるものと思っ  
ていましたが、植物の世界も信頼関係により成り立って  
いると指摘されました。

準賞2 無心の深い折りには心の浄化作用があるのです  
ね。三歳のちかちゃん将来が楽しみです。(山本希久子)



徳山みつこ

どんよりとした日に、受話器から各地柳壇賞受賞  
の知らせが飛び込んできました。  
望外の喜びを与えて下さったのは、諸先輩や柳友  
の皆様のお陰に他なりません。  
これからもゆっくり川柳の道を歩むつもりです。  
どうかご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。  
ありがとうございます

## 準賞作品

お互いに信じ合ってる種と土  
折るとは心を洗うことだろう  
水野 みずの 黒兎 こくとう  
上田 うへだ ひとみ

## 候補作品

さがしものみつけるまほうのステッキで

(三歳) えしまちか

直球の愛に空振りしてしまふ  
廣田 ひろた 和織 かずお

大きな樹大きな山を見て育つ  
福井 ふくい 菜摘 なつみ

景色だけ見れば住みたい里ばかり  
牧野 まきの 芳光 よしみつ

### 柳歴

昭和六十三年 はびきの市民川柳会入会  
平成 元年 川柳塔 誌友  
平成 九年 岡山県久米南町「川柳  
公園」に句碑建立  
平成 十二年 川柳塔 同人  
平成 十九年 路郎賞準優秀作受賞

## 受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

令和二年度の六賞を受賞される皆さまに心からお喜び申し上げます。

さて今年も8月12日に、川柳塔事務所で第一次選考を開催する予定でしたが、今回は選考委員それぞれ順次自宅で選考することとしました。佳句のチェックの多い順に私が最終の十五名を選んで第二次選考の皆さまにお願ひしました。

路郎賞の小野雅美さんは、平成三十年に川柳塔賞を受賞されている実力者です。準賞の次根、千代さんも毎月川柳塔へ佳句を発表されています。特に千代さんは大病を克服しての受賞です。

川柳塔賞の大内せつ子さんは、昨年、路郎賞、川柳塔賞を受賞された松山のおおる、みやさんと切磋琢磨されています。準賞の孝純、和織さんも毎月水煙抄へ佳句を発表されています。

愛染帖賞の山田耕治さん、檸檬賞の飛永ふりごさん、一路賞の平井美智子さん、各地柳壇賞の徳山みつごさん、おめでとうございませう。日頃の精進、努力を見ているのでとても嬉しく思います。

路郎賞、川柳塔賞の応募は、一年間の自分の作品と向き合う良いチャンスだと思います。多くの皆さまのご応募をお願い致します。

## 二賞選考経緯

西出 楓 栞

いっこうに収束の気配を見せないコロナ禍の真つただ中の8月12日10時、同人・誌友の1年間の最高峰の句を選ぶ二賞選考を、川柳塔社事務所で始めた。

当日集まったのは朱夏編集長と私・楓栞の2人のみ。吉村大阪府知事から「5名以上の会合は持たないように」との要請が出ており、例年のように5名全員の集合は、控えることとした。最初2人が選をし、次に大輪副主幹↓完司理事長↓蘭幸主幹の順にレターパックで回し送り、1次の選考期間が大幅に遅れた。

2次選は滞りなく終了し、二賞6名が決定。皆さん誠におめでとうございませう。心からお祝い申し上げます。

なお川柳塔賞の同点が2名となった。この場合「各賞選考規定④」に則り、平成30年度準優秀作第一席を受賞の清水久美子さんには、次回以降最上位を目指して頂くことになった。

例年10月号発表のところ、コロナ禍により1か月遅れになった上、「川柳塔まつり」も誌上大会となり、まつり会場で表彰出来ないことを、ご理解下さいます様お願い致します。

## 二賞候補者在住地

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
路郎賞	土佐清水市	尼崎市	鳥取市	松山市	高槻市	池田市	堺市	鳥取市	堺市	岡山市	尼崎市	河内長野市	大阪市	岡山市	越谷市
川柳塔賞	大阪市	仙台市	三田市	寝屋川市	黒石市	鳥取市	尼崎市	大阪市	神戸市	豊中市	栃木市	大洲市	今治市	三原市	松山市



## ゴミを考える (2)

今年7月号の本欄も「ゴミを考える」でしたので、今回はその(2)といたします。

ゴミが土に還るまでの時間についての研究によれば、林檎の芯は2週間、南瓜は4週間、新聞紙は6週間、木綿衣料は6カ月、ウール衣料は1年などですが、プラスチックのゴミなどは完全に土に還ることはありません。

プラスチックが七つの海を制覇する  
上嶋 幸雀

人間のエゴにプラスチック直訴する  
馬場ゆうこ

水際にひたひたプラスチックハンゲル語  
油谷 克己

プラスチックの中で泳いできた秋刀魚  
山崎三千代

捨てたのに百円かかるプラスチック  
成田 雨奇

プラスチックは大量生産が可能で軽くて丈夫なので、様々などところで使用されていますが、種類が多く(ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリ塩化ビニール、ポリスチレン等々)まとめてリサイクルできないために再利用率は4割ほど。焼却もダイオキシンなど有害物質の発生が問題になっています。また、5ミリ以下の細かい粒子(マイクロプラスチック)は海洋を汚染し生態系を破壊しています。

この星のどこに捨てよう核のゴミ  
加島 由一

出す曜日決まっていらない核のゴミ  
松橋 帆波

国宝のようにそおつと核のゴミ  
北原おさ虫

再稼働とどん核のゴミを吐く  
再稼働すれど迷子の核のゴミ  
核のゴミ月の裏まで捨てに行く

太陽に投げ込めばいい核のゴミ

石炭や石油や天然ガス等の化石燃料に頼らない原子力発電は、資源の乏しい我が国にとつて最適の方法だと思われてきました。しかし、平成23年、東日本大震災の津波で破壊された原発の惨状を見て「核」の怖さを認識させられました。その破壊された残骸、汚染された土壌、除染に使った水など、すべて「核のゴミ」です。また、無傷の原発においても、使用済みの燃料棒、作業員の放射線防護服なども核のゴミ。その最終処理場の候補地さえまだ決まっています。

宇宙ゴミ増えて切ない流れ星  
宇宙ゴミ増え流れる川  
宇宙ゴミ増え流れる川  
宇宙ゴミ増え流れる川  
宇宙ゴミ増え流れる川

地球取り巻くゴミにゴミの日がない  
地球取り巻くゴミにゴミの日がない  
地球取り巻くゴミにゴミの日がない  
地球取り巻くゴミにゴミの日がない

宇宙ゴミというものは「何等かの意味ある活動を行うことなく、地球の衛星軌道上を回っている人工物体」のこと。その人工物体は、老朽化した人工衛星の残骸やロケットの推進剤。そして、人工衛星同士や宇宙ゴミとの衝突で生じた破片などです。「今に天から降ってくる」という通り、すでに何個も落ちています。幸い、まだ死者も怪我人も出ていませんが、自分の頭に落下しないという保証はありません。

佐藤 岳俊  
菱木 誠  
居谷真理子  
糺谷 和郎

白井 靖孝  
藤島ちかこ  
和氣 慶一  
三浦 強一  
成島 静枝  
加藤 胖

白井 靖孝  
藤島ちかこ  
和氣 慶一  
三浦 強一  
成島 静枝  
加藤 胖

# 愛染帖

## 新家 完司選

(投句282名)

今治市 永井 松柏  
絆創膏だらけの腐れ縁である

(評) 千切れかかったところを補修しながらなんとか続いている腐れ縁。その「絆創膏」こそ、お互いを大切に思う気持ちである。

鳥取市 前田 楓花  
炎天にママチャリ飛ばし墓参り

(評) 体温を超える「危険な暑さ」にも負けず、ママチャリを飛ばしての墓参り。ご先祖さまもそのパワーに感動されただろう。

河内長野市 中島 一彌  
熱帯夜ダリの時計になつていて

(評) 疲れたという表現では「ぐったり」とか「くたくた」などあるが、「ダリの時計」は、作者の様子まで目に浮かぶ明解な暗喩。

三田市 尾崎 一子  
よう生きた自分をほめて秋刀魚焼く

(評) 振り返れば、とても耐えられないと思うことを何度も乗り越えてきた。頑張った自分を褒めて、今夜は高級サンマだ。

岡山市 丹下 凱夫  
ワンチームにはなりにくい民主主義

(評) 新vs旧、強vs弱、貧vs富、それぞれの主張がぶつかって纏まり難い民主主義。だが、独裁者の一喝で括られるよりマシだろう。

三田市 福田 好文  
金の流れ悪くしている家族葬

(評) 高齢化を迎えて増えている家族葬。その利点は様々あるが、欠点は金が動かないということ。日本経済にはマイナスだ。

富士見市 中島 通則  
プレミアムと言わなくなった金曜日

(評) 経産省と経団連が消費促進のため「月末の金曜は15時で帰ろう」と提唱したプレミアムフライデー。だが、3年で消滅した。

堺市 矢倉 五月  
長電話切つて急いでお手洗い

(評) おしっこを我慢すると膀胱炎になる。これからは「ちよっと、トイレに行きたくないので」と、遠慮なく申し入れよう。

大阪市 藤田 武人  
次の家決まらず今の家売れた

(評) 家の買い替えという人生の一大事。焦って「訳あり物件」を掴まされぬよう、「次の家」は慎重に調査しなければならぬ。

神戸市 能勢 利子  
避難袋に入りたいものが多過ぎる

(評) 用意したいのは、水・食料・常備薬・

懐中電灯・電池・携帯ラジオ・ライター・ティッシュ等々、あれもこれもでキリがない。

和歌山市 古久保和子  
錠剤が手から零れてやや元気

大阪市 高杉 力  
名入れタオルこの銀行も今はない

岩国市 上村 夢香  
視界良好幾多の山を乗り越えて

寝屋川市 岡本 勲  
女房に野性もどる特売日

大阪市 小野 雅美  
三枚におろせませすかと魚の日

大阪市 古今堂蕉子  
週刊誌正義の旗をかざしすぎ

弘前市 福士 慕情  
ITについてゆけない生き字引

横浜市 菊地 政勝  
AIも女心は判るまい

佐賀県 真島久美子  
ユーチューブ嗚呼わたくしも並の人

高槻市 原 洋志  
SNS顔も見せずに言い放題

松江市 石橋 芳山  
喋るほど薄い男とバレてくる

津山市 高橋由紀女  
お見事な暮らしポツンと一軒家

堺市 内藤 憲彦  
初孫に駒とパソコン買っていく

大阪府 高木 道子  
のっそりの守宮素早い舌の先

松山市 栗田 忠士  
ネズミ捕りにアオダイショウが捕れていた

河内長野市 森田 旅人  
いたわりの言葉から逃げ守る堰

鳥取市 池澤 大鯨  
待合室のうろりそりり移動する

米子市 吉田 陽子  
空耳が冴える脚力弱い分

黒石市 北山まみどり  
想い出が足りないという旅カバン

三田市 北野 哲男  
裕福に見られて袖をためたためない

越谷市 久保田千代  
居酒屋は男の心療内科だろ

明石市 梶谷 和郎  
家飲みには黒枝豆の莢の山

長調より短調好むさびしがり  
静脈がピクピク動く好奇心

大阪府 平井美智子  
今日は何したんだろうか日が沈む

手洗いすぎて明日が掴めない  
郵便受け 手を入れ気付く休刊日

尼崎市 山田 耕治  
辞世の句次から次に湧いてくる

泣きながら犬の葬式した話  
招き猫もマスクしている新コロナ

三原市 鴨田 昭紀  
欲求を羽交い絞めする自制心

神戸市 富永 恭子  
戯れています輪の中定位置で

仙台市 月波 与生  
補欠でもいいから輪の中にいたい

三田市 上田ひとみ  
けんかするエネルギーもう無いんです

弘前市 高瀬 霜石  
焼き芋は癒やし道具のひとつなり

富田林市 中村 恵  
思ったよりこの世はずっと面白い

一本の藁は川柳かも知れぬ  
手付かずの日付気になる非常食

和歌山市 定松 宏枝  
猫よけのペットボトルに蹴躓く

倉吉市 牧野 芳光  
雨だれが何でなんでと言っている

友達を減らしてならぬ後がない  
先ず君へGo To Date予約する

和歌山市 まつもとともこ  
初恋もサンマも遙か秋の夢

三田市 堀 正和  
ステイホーム妻の酒量も増えてきた

文・目方 中二の孫に負けました  
百均で時間をつぶす俄雨

寝屋川市 平松かずみ  
脳トレをします百均のペンで

福井市 伊藤 良一  
それ呆けの兆しと笑う今が幸

老いの型見つけ磨いていく余生  
車椅子歳相応と納得す

大阪市 高杉 千歩  
探しものばかりでも良し車椅子

橋本市 石田 隆彦  
海女さんはやがて進化し鯉呼吸

榎原市 安土 理恵  
さまざまの恋の始末に四苦八苦

三田市 多田 雅尚  
迷っても直ぐには読まぬ歎異抄

生駒市 飛水ふりこ  
歩かない時にも膝のブーイング

枚方市 谷 英也  
加齢とは病気ですかねお医者さん

鳥取市 田賀八千代  
よりよい未来捜し電動車が走る

岡山市 永見 心咲  
MAXにほめて気恥ずかしくなった

土佐清水市 辻内 次根  
人間よ秋だ星座を眺めよう

大阪市 栃尾 奏子  
失敗はサンドイッチにしておこう

寝屋川市 伊達 郁夫  
終活が出来てないので未だ近けぬ

三田市 大西 重男  
母ちゃんが逝って寂しい秋の夜

河内長野市 梶原 弘光

西宮市 高橋千賀子

根気よくネタを探して五七五

美作市 岡本 余光

決めました川柳道を無二無三

大阪市 笠嶋 惠美

句が出来て句から元気をもらう幸

豊中市 松尾美智代

久し振りの句会元氣な友に会う

神戸市 上田 和宏

全没で一步後退二歩前進

三田市 村田 博

句会より早く呑みたい柳友と

米子市 竹村紀の治

コロナには激辛カレー担担麺

箕面市 広島 巴子

コロナ禍に儲け度外視お家バー

河内長野市 大島ともこ

コロナ休校上手くなったよ卵割り

札幌市 三浦 強一

三密の頃の飲み会懐かしい

大阪市 内田志津子

家ごもりタンスの肥やしココシヤネル

芦屋市 竹山千賀子

コスメ店ここ半年は行ってない

大山市 金子美千代

パーマ代浮いて奮発する鰻

河内長野市 穂口 正子

2メートル間隔保ち孫帰る

香芝市 山下 純子

ソーシャルディスタンス手の温もりを忘れそう

香芝市 大内 朝子

自粛してコロナ肥りというおまけ

八王子市 川名 洋子

雑踏を忘れてしまう家籠り

堺市 村上 玄也

コロナ禍でひねもすのらりくらりかな

長岡京市 山田 葉子

薄味のつきあいコロナ指図する

奈良市 辻内げんえい

映画館行けずに家でユーチューブ

奈良県 安福 和夫

巣ごもりで久々画面にバーグマン

鳥取市 永原 昌鼓

あちこちで意気消沈のまつり止め

八尾市 宮崎シマ子

祭り中止祖父の落胆子供より

貝塚市 石田ひろ子

コロナ禍も酷暑も忘れさず湯船

鳥取県 山下 節子

ステイホーム冷房の部屋汗知らず

高槻市 初代 正彦

人生に偶の自粛もええやんか

生駒市 饗庭 風鈴

神戸市 近藤 勝正

三密を理由に孫子寄りつかず

塩竈市 木田比呂朗

ファッションの一部にされているマスク

松山市 柳田かおる

あら素敵どこで買ったのそのマスク

大阪市 宇都満知子

滑舌を気にしながらのマスク越し

丹波篠山市 長谷川善輔

長谷川さん呼んでいるのはどのマスク

高槻市 片山かずお

マスクなしを怪しい人にしたコロナ

奈良市 加藤江里子

メッセージ伝えるマスクしてみたい

南あわじ市 萩原 狸月

チケットとマスク検温開くゲート

唐津市 坂本 蜂朗

高温とコロナに老いを試される

京都市 都倉 求芽

隙窺っている熱中症コロナ

東大阪市 北村 賢子

この歳で不幸にも遭う新コロナ

大阪市 森 廣子

コロナ禍如何にブラジルに住む弟よ

河内長野市 藤塚 克三

令和二年我慢比べの年にする

米子市 野川 宣子

羽曳野市 吉村久仁雄  
神にもらった命お神酒で日々清め

羽曳野市 宇都宮ちづる  
おうち酒瀬祭りびりちびり飲む

西宮市 緒方美津子  
瀬と飲むとついつい長くなる

大阪市 岩崎 玲子  
運動も食事も大事もち酒も

和歌山市 北原 昭枝  
時々は心を洗う酒をのむ

沖繩県 宮 すみれ  
ごほうびにビール片手に料理する

沖繩県 禰 モモト  
日本酒とビール混合ビーチユウに

松原市 森松まつお  
2リットルの梅酒二日で妻と空け

尼崎市 永田 紀恵  
充電のつもりの酒でシオートする

池田市 奥園 敏昭  
誰にでも話しかけたい酔っ払い

笠岡市 小野美那子  
酔うているプラトニックの恋を抱き

府中市 岸田 武  
酒の味は良いかと医者も知っている

神戸市 山口 光久  
百薬の長に代わって胃腸薬

藤井寺市 鈴木いさお  
惜別の柩へそつとワンカップ

豊中市 きとうこみつ  
整形したことは誰にも言うてない

笠岡市 藤井 智史  
口だけはストロー級の王者です

藤井寺市 太田扶美代  
軽く妬いて喜ばせてあげる

安来市 原 徳利  
流れてもすぐに直せる丸木橋

和歌山市 柏原 夕胡  
どうしたの隣の芝生枯れている

三原市 笹重 耕三  
女房のスパゲッティが絡みつく

鳥取市 副井ゆたか  
醤油かけお箸で食べるスパゲッティ

黒石市 石澤はる子  
幻を守り通してきた小指

岡山市 大石 洋子  
日向から爪切る音す良さ日かな

寝屋川市 廣田 和織  
悪い子も良い子もない過疎の村

米子市 池田 美穂  
レジ袋買う夫ゆるい危機管理

沖繩県 あらさくら  
火焔木見れば首里城赤赤と

唐津市 仁部 四郎  
政治家は地元の声で育つもの

松江市 中筋 弘充  
忌憚ない意見にムツとする市長

豊中市 上出 修  
太陽系地球何だか騒がしい

大阪市 樋口 眞  
天変に手も足も出ぬ不甲斐なさ

豊中市 齋藤奈津子  
始球式どこへ飛んでもご愛敬

池田市 上山 堅坊  
古い独り枯れないように恋をする

大阪市 石田 孝純  
老いらくの恋三度目の適齢期

西宮市 高瀬 照枝  
若い日のヒールこっそり出している

鳥取市 山下 凱柳  
喜怒哀楽に悔いの一字を付け加え

尼崎市 藤田 雪菜  
雑念を落としてくれる美容院

広島市 岸本 清  
ピンポーン下着姿で半開き

和歌山県 森下よりこ  
年寄りですデイサービスの運転手

大阪府 米澤 俣子  
隣の児まだおばちゃんと呼んでくれ

石川県 堀本のりひろ  
日記帳右往左往の過ぎた日々

岡山県 藤澤 照代  
花と人同じ大地に育ち近く

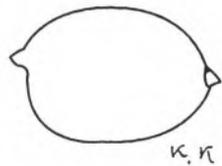
豊中市 松田蟻日路  
一度でも座ってみたや蓮の葉に

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句357名)



「したたか」 石橋 芳山 選

泣くだけ泣いて女は直ぐに次の恋  
喉に小骨したたかな奴まだ抜けぬ  
左眉ビクリ女の射程距離  
女神にも魔女にもなつて生きてゆく  
したたかな爪を隠したベルシヤ猫  
嘘泣きで親の出方を探る孫  
したたかに生きて失う友の数  
したたかな唇なのに美しい  
格安のドッグフードに尾を振らず  
したたかに何でも包む茶封筒  
彼の前 手料理風に盛りつけて  
逃げ道を確認してからよく喋る  
したたかな魔女の住まいはB団地  
事も無げにスリーパントを決めて来た

大東市 小川賀世子  
豊中市 貝塚 正子  
佐賀県 真島久美子  
桜井市 安土 理恵  
尼崎市 藤井 宏造  
河内長野市 藤塚 克三  
黒石市 石澤はる子  
松山市 大内せつ子  
香芝市 山下 純子  
池田市 上山 堅坊  
尼崎市 近兼 敦子  
鳥取市 山野すみれ  
大阪市 津村志華子  
河内長野市 梶原 弘光

「したたか」 古今堂 蕉子 選

股られてみたい ぶ厚い札束で  
誉めめちぎりいつも戴く無料券  
失敗はすべて他人のせいにする  
ほほえみの裏に百回スクワット  
もうとまだ使い分けてる紅の筆  
二たす二を五にも六にも大番頭  
生きてきて僕には僕のしたたかさ  
したたかに沈黙通し意思通す  
ボンボン昭和の時計3世代  
泣くだけ泣いて女は直ぐに次の恋  
女房ほどしたたかならば出世した  
下手な句を詠んでどっこい生きてます  
したたかな産声過疎に灯を点す  
ウイルスは変異しながら生き延びる

弘前市 高瀬 霜石  
奈良市 仲西 賛郎  
三田市 谷口 修平  
西宮市 亀岡 哲子  
岡山市 工藤千代子  
広島市 松尾 信彦  
神戸市 上田 和宏  
羽曳野市 藤原 大子  
八幡市 武田 悦寛  
大東市 小川賀世子  
川西市 大坪 一徳  
香南市 桑名 孝雄  
和歌山市 福井 菜摘  
大阪市 宇都満知子

したたかな位置で燃えてるカスミ草	鳥取市	倉益	一瑤
うれしいわ頂く物はみんな好き	三田市	上田ひとみ	
誉めちぎりいつも戴く無料券	奈良市	仲西	賛郎
種付けでもがっぼり稼ぐ三冠馬	堺市	坂上	淳司
もうアカン言ってるわりによく食べる	堺市	内藤	憲彦
泣きやめて香典の先確かめる	堺市	奥	時雄
百歳が老後のために貯めてはる	神戸市	山崎	武彦
したたかに生きる女の返し針	越谷市	久保田千代	
したたかに女の武器を研ぎ澄ます	西宮市	高橋千賀子	
ネタばれた手品何度も見せられる	大阪市	岩崎	公誠
泣くもんか実家に涙置いてきた	三田市	丹羽	美恵
したたかに何時でも出せる隠し玉	河内長野市	辻村	ヒロ
逃げおとし今日も生きてる蚊一匹	岡山市	大石	洋子
ぐるぐると回り続けるイカの足	大阪市	今村	和男
あきらめが悪いし一途さもあるし	黒石市	北山まみどり	
したたかな敵だ気配を消している	今治市	永井	松柏
したたかに生きて真つ赤なハイヒール	大阪市	岡田	恵子
整形をするたび過去を塗り替える	大阪市	小野	雅美
踏まれても踏まれてもまだ生きている	豊中市	上出	修
次の次視野に入れてる百合の花	阿南市	小畑	定弘
油断禁物ウサギを負かすカメがいる	男鹿市	伊藤のよし	
したたかに半端ではない飲みっぷり	和歌山市	松原	寿子

いい年になったしたたかになった	西予市	黒田	茂代
また明日があると云っては暮を引き	富山市	伴	よしお
したたかな奴だ敵にはしたくない	弘前市	高森	一呑
したたかな隣国未だに骨が折れ	唐津市	岩崎	實
凹んでも張子の虎のケセラセラ	大阪市	石田	孝純
したたかに見せぬ女のしたたかさ	松山市	粟田	忠士
強かな顔だ苦勞した顔だ	吹田市	太田	昭
次男坊相手によってマスカ変え	八尾市	田邊	浩三
このへんでたっぷり涙流します	三田市	上田ひとみ	
防御策 獣はじつと聞いている	鳥取市	吉田孔美子	
したたかに天辺狙う明烏	大阪市	内田志津子	
大坂なおみ人種差別を打ち返す	神戸市	奥津洋次郎	
したたかな口がカツ井から緩み	鳥取市	加藤	茶人
尾氐骨したたか打った子の謀反	三田市	村田	博
格安のドッグフードに尾を振らず	香芝市	山下	純子
五回目の土下座涙のおまけつき	東かがわ市	川崎ひかり	
あの戦後着物で母は支えきり	奈良県	長谷川崇明	
したたかに何時でも出せる隠し玉	河内長野市	辻村	ヒロ
ヘクソカスラの意地踏まれても抜かれても	大阪府	米澤	俣子
したたかな人だよ顔のない男	鳥取市	夏目	一粋
枯れたとてチャンスと見れば生き返る	各務原市	喜多村正義	
したたかであれば匠にはなれぬ	西宮市	緒方美津子	

隙少しあれば尻から割って入る

堺市 村上 玄也

したたかな人だよ顔のない男

鳥取市 夏目 一粋

柔らかな笑み母は一步も譲らない

羽曳野市 徳山みつこ

電話口相手次第で七変化

奈良市 高橋 敬子

廃校にひとり生きてる針葉樹

鳥取県 斉尾くにこ

75日うわさにじっと耐え忍び

高槻市 松岡 篤

女々しいで掠めるなんてドンと突け

大阪市 柴本ばっは

真ん丸へ円周率のしたたかさ

寝屋川市 廣田 和織

したたかに生きよう食うか食われるか

香南市 桑名 孝雄

咲くべきか否かで迷う赤い薔薇

和歌山市 柏原 夕胡

したたかに踊った後のサロンパス

西予市 黒田 茂代

大丈夫 替えの芯ならたんとある

大阪市 平井美智子

何回も全ボツでまだ出してくる

米子市 成田 雨奇

川底の石が流れを読んでいる

池田市 太田 省三

値切る客店主は愛想良くかわす

羽曳野市 藤原 大子

喪が明けりゃ女脱皮の準備する

東かがわ市 川崎ひかり

したたかな女の動き罪でつせ

大阪市 岩崎 玲子

したたかな蛸だ自分で足を切る

安来市 原 徳利

服や靴よりもたくさんある仮面

堺市 澤井 敏治

空気読みすり寄る技は小判鮫

鳥取市 谷口回春子

小悪魔を演じきったら飯を食う

岡山市 永見 心咲

当選をすれば違反も怖く無い

唐津市 山口 高明

才色をフルに生かして伸し上がる

尼崎市 清水久美子

真っ先に勝ち馬に乗る古だぬき

奈良県 室田 行久

したたかに獲物見つけて詐欺電話

羽曳野市 宇都宮ちずる

したたかな耳が掴んでくる秘密

阿南市 小畑 定弘

三回は洗う使い捨てのマスク

三原市 笹重 耕三

したたかな女が絡むサスペンス

箕面市 中山 春代

したたかな妻の夫はお人好し

高槻市 富田 保子

政治家に七重八重ある面の皮

尾道市 小畑 宣之

AIと次の一手を追ってみる

石川県 堀本のりひろ

したたかな夏でしたねと雪が降る

浜松市 中田 尚

森友加計疑惑まみれで逃げ切った

弘前市 稲見 則彦

左眉ピクリ女の射程距離

神戸市 敏森 廣光

丁寧な嘘ばかりつくしたたかさ

佐賀県 真島久美子

笑われてなんば痛いことあらへん

羽曳野市 三好 専平

したたかに生きて歩幅は乱さない

樫原市 居谷真理子

悪人善人どちらも貴方です

長野県 丸山 健三

もうアカン言ってるわりによく食べる

米子市 後藤 宏之

感動は漕上の鮭のしたたかさ

堺市 内藤 憲彦

したたか者同士で競うわんこそば

美作市 岡本 余光

したたかに耐えねばならぬ大阿闍梨

鳥取市 上山 一平

したたかを過ぎていつしかモンスタ―

和歌山県 森下よりこ

したたかさ嫁と張り合い元気です  
空席を鮮魚で満たすJ R

和歌山市 坂部紀久子  
和歌山市 土屋起世子  
和歌山市 まつもととこ

今ここで泣ける女になりました

鳥取市 加藤 茶人

したたかな夏でしたねと雪が降る

弘前市 稲見 則彦

したたかに生きた証の胃潰瘍

神戸市 敏森 廣光

失敗はすべて他人のせいにする

三田市 谷口 修平

笑われてなんぼ痛いことあらへん

橿原市 居谷真理子

したたかに主役を狙うプチトマト

三原市 笹重 耕三

ゴキブリは3億年も生きている

弘前市 高瀬 霜石

したたかに生きたバーバの紙オムツ

芦屋市 竹山千賀子

ほほえみで隠す女のしたたかさ

松山市 宮尾みのり

酒タバコやめる理由が見当たらぬ

宝塚市 岸田 万彩

おしゃべりは真綿で包み目で殺す

河内長野市 坂野 澄子

したたかに牙を研いでるナンバー2

奈良市 谷川 憲

転んでも転んでもまだ走ってる

笠岡市 小野美那子

したたかさ少し混ぜたいあかんたれ

東大阪市 北村 賢子

口八丁優しい声の裏にユダ

神戸市 富永 恭子

したたかに生きる吸盤持っている

富山市 伴 よしお

秀句

私への花を値切って買う男

堺市 矢倉 五月

女優より上手く泣けると思います

藤井寺市 太田扶美代

旦那さまずと騙してあげますよ

大阪市 栃尾 奏子

川底の石が流れを読んでいる

池田市 太田 省三

口八丁優しい声の裏にユダ

神戸市 富永 恭子

厚化粧こんやく芋の胸の内

河内長野市 森田 旅人

ライバルにするにはしたたかな相手

三原市 鴨田 昭紀

二枚貝開いて閉じて地に潜る

鳥取市 山野すみれ

微笑みを浮かべて君を遠ざける

和歌山市 柏原 夕胡

したたかに生きしなやかに暮らしてる

倉吉市 宮田 風露

記憶にも記録もないと白を切る

堺市 村上 玄也

したたかさ消えると背なが丸くなり

寝屋川市 平松かすみ

鹿もさるもの客を選んでお辞儀する

奈良市 大久保真澄

したたかな主婦はソロバン良く弾く

津山市 高橋由紀女

したたかさ少し混ぜたいあかんたれ

東大阪市 北村 賢子

整形をするたび過去を塗り替える

大阪市 小野 雅美

おしゃべりは真綿で包み目で殺す

河内長野市 坂野 澄子

土下座中も思案している倍返し

明石市 糀谷 和郎

あきらめが悪いし一途さもあるし

黒石市 北山まみどり

したたかに舞った深夜のアゲハチョウ

笠岡市 藤井 智史

再再婚親と子供を連れて来た

札幌市 小沢 淳

したたかな魔女の住まいはB団地

大阪市 津村志華子

したたかな敵だ気配を消している

今治市 永井 松柏

したたかに揉み手が猪口を持つてくる

弘前市 福士 慕情

大丈夫 替えの芯ならたとある

大阪市 平井美智子

秀句

「幅」

成田 雨奇 選

(投句 241名)



マージャンで知った上司の幅のなさ  
 道幅を見て運転が変わる夫  
 恰幅が良過ぎて人は遠ざかる  
 年金の自由の幅は籠の中  
 道幅が広がり待てと信号機  
 ペアルック縫うには足らぬ布の幅  
 ディスタンス取れば日本は狭すぎる  
 人間不信許せる幅のドアチェーン  
 距離感が生まれて恋が終り告げ  
 老い楽し自分の幅は自分流  
 許容幅なんて持たない頑固者  
 手こずった幅寄せ出来ぬ教習所  
 道幅の広さを知った千鳥足  
 令和でも幅を利かせる氏素性  
 門限に幅をもたせた親ごころ  
 手をつなぐ歩幅がなぜかズレてゆく  
 失敗をして人間に幅ができ  
 列並ぶクシャミ一つで幅出来る  
 肩幅をメモして恋は進行中  
 改行を重ね紙幅を埋めている

大阪府	高杉	力
堺市	矢倉	五月
豊中市	藤井	則彦
富田林市	中村	恵
大阪市	小野	雅美
藤井寺市	太田扶美代	
三田市	多田	雅尚
岡山県	藤澤	照代
八王子市	川名	洋子
河内長野市	落葉	ふみ
高槻市	松岡	篤
鳥取県	本庄	汪
横浜市	菊地	政勝
奈良県	室田	行久
奈良市	米田	恭昌
黒石市	石澤はる子	
高槻市	片山かずお	
伊丹市	平井	富夫
横浜市	川島	良子
榎原市	居谷真理子	

二米の幅恨めしい初デート  
 道草を食って人生幅ができ  
 幅寄せを三回やって君の横  
 人と人三歩幅とる縄のれん  
 芸の幅広げると言い恋をする  
 発言の幅が大きい風見鶏  
 亡き父の哲学今も幅きかす  
 母さんの物差し狂わない手幅  
 ウォーキング歩幅広げて妻を追う  
 ロボットが幅を利かせる日も近い  
 幅のない人でよかつた悪させず  
 ポチだけが私の歩幅気を遣い

住	句	
遊び上手無駄が育む広い幅	神戸市	富永 恭子
人間の幅垣間見る老人会	河内長野市	中島 一彌
どん底の修業を積んだ芸の幅	橋本市	石田 隆彦
その川は六文銭で渡れたか	河内長野市	森田 旅人
肩幅を測る抱き締められながら	佐賀県	真島久美子
酔ってきて許せる幅が広くなる	土佐清水市	辻内 次根
肩幅のまんまで生きている愚直	男鹿市	伊藤のぶよし
生き方の幅を広げた負けの数	羽曳野市	吉村久仁雄
軸		
幅広く生きた文句は言わせない		

「追う」

黒田茂代選

(投句 241名)



追うてくる老いがどんだん加速する  
追っかけても黄色い声も今禁止  
フェイントを掛けて追ってるラブゲーム  
ボール追う眼には車が入らない  
スケジュールに追いまくられてまだ元氣  
ネグレクト親追う声が聞こえぬか  
追うよりはオンリーワンもいい気分  
師の影を追って二流の端に居る  
悠然とたゆとう雲を追う無聊  
「鬼ごっこ」あなたの鬼になりたいな  
充電をして追い風を待っている  
アリバイを妻が追跡調査する  
追い風に乗って黒子が立ち上がる  
夢を追うことをあきらめない亀だ  
コロナ禍をよそのんびり牛を追う  
追い風が吹いてるうちは有頂天  
神風がデッドヒートの背を押す  
お迎えが来たら玄関払いする  
わずれな草ライバルいつも三步先  
追って書きちよっとホの字をのぞかせる

香芝市 大内 朝子  
大洲市 花岡 順子  
三田市 村田 博  
浜松市 中田 尚  
羽曳野市 徳山みつこ  
米子市 後藤美恵子  
豊中市 藤井 則彦  
札幌市 小沢 淳  
三木市 山口ヨシエ  
和歌山市 まつもとともこ  
三田市 堀 正和  
三原市 鴨田 昭紀  
大阪市 若本 安代  
今治市 永井 松柏  
横浜市 菊地 政勝  
可見市 板山まみ子  
尼崎市 清水久美子  
藤井寺市 鈴木いさお  
大阪市 古今堂蕉子  
香南市 桑名 孝雄

すり切れた手帳は夢を追ったあと  
もう追わぬ これから先はマイペース  
去る者を追えば空しさだけ残る  
追いつけぬけれどあなたを真似てみる  
追伸の一行にある水たまり  
二番手に甘んじる気はないダツシユ  
追いついてみると私の影だった  
追憶に消えゆく激動の昭和  
追うことに疲れてLINE削除する  
あれも逃げ水これも逃げ水です令和  
追いつ追われつ良きライバルで今がある  
蜃気楼追う人間を止められず

岐阜県 喜多村正儀  
芦屋市 竹山千賀子  
鳥取市 岸本 宏章  
神戸市 富永 恭子  
高槻市 原 洋志  
大山市 金子美千代  
松山市 栗田 忠士  
東大阪市 佐々木満作  
佐賀県 真島久美子  
弘前市 高瀬 霜石  
大阪市 榎本 舞夢  
松山市 宮尾みのり

佳 句  
優しいさの仮面ばかりを追っていた  
蛭追う母の化身を追うように  
追いつことを止めたら胸の灯が消える  
未練です恋のフーガが鳴り止まぬ  
最適のことばを追って命の句

鳥取市 福西 茶子  
八幡市 今井万紗子  
藤井寺市 太田扶美代  
岡山市 永見 心咲  
豊中市 水野 黒兎

人  
追うことを止めてわたしが見つかった  
少年よはばたけ夢を追うがよい

松山市 柳田かおる  
大阪市 津村志華子  
大阪市 平井美智子

地  
諦めはしないと月を追いかける

軸  
パララッチになつてしまった好奇心

# 初歩教室

題一拾う

高瀬霜石

これを書いているのが、9月の下旬。

安倍総理が辞意を表明し、このままでいけば、菅官房長官に落ち着くんだろうなあ——という雰囲気の中、肝心のコロナは、まだまだ先行き不透明な今日このごろであります。

本号が、皆様の手元に届く、あと2カ月後の日本の状況は？アメリカ大統領選は？

気になって、気になって、とてもコロナなんかで死んではいられないので、本州の果てで、ひっそりワープロの前に座っております。

①いつものように、まずは上と下を入れ替えてみる。入れ替えた方が、よりドラマチックになり、落ちも付くから。

(▼は原句。▽は参考句)

▼週刊誌拾い読みして知ったかぶり (櫻) 良子  
▽知ったかぶり拾い読みする週刊誌

▼ゴミ拾いいつの間にかやら天職に 義明

▽天職と思ったりするゴミ拾い

▼孫にメール一文字づつを拾い打つ 風露

▽一文字ずつ拾って孫にメール打つ

▼半世紀経ちました拾った恋ですが 寧

この句は、これでOKで、別にいじくる必要はないのですが、悪い癖で、ちよつと

ひっくり返してみたくなったのだなあ。つ

まり「拾った恋」と「半世紀」と、どっち

に重きを置かないかなんだよなあ。

▽拾った恋ですが半世紀経ちました

②不要な言葉を(ダブっている語も)カットして、シンプルに。さすれば、より伝達力が増す(と、僕は思う)。

▼新聞は見出しだけを拾い読み (貝) 正子

「見出し」があれば「新聞」はいらない。

▽見出しだけ拾い読みして朝を出す

▼拾われて家に来た猫威張ってる ゆき

「拾われた」のだから「家」はいらない。

▽拾われて来た猫妙に威張ってる

▼猫拾うあつという間に十五年 峰子

捨て猫もう一匹。ドラマチックに大袈裟に。  
▽捨て猫と目が合ってから十五年

▼困ったな分別迷うゴミ拾い 崇史

▽分別もちゃんとやりますゴミ拾い

▼無観客張り合う息もキャッチする 厚子

「張り合う」がいまいちピンとこないの。

▽無観客選手の息もキャッチする

▼この僕を拾った君が神なのだ のりひろ

君⇨神なのだから、整理してシンプルに。

▽この僕を拾ってくれた女神さま

▼拾ったよセミの抜け殻夏になる 弥生

「拾ったよ」は、インパクトに欠ける。

▽みいつけたセミの抜け殻夏になる

▼平均を越えて余生は拾いもの 行久

▽平均寿命越えた余生はもうけもの

▼断捨離をして又拾う昭和の子 令位子

▽断捨離は苦手わたしは昭和の子

③もっと適切な言葉はないか。あえて、ドラマチックに仕立て変えてみる。

▼まだ着れる拾って写す娘のお古 えい子

「写す」まで言わなくとも、このへんで。

▽似合うでしょ実娘のお古なの

▼ばい捨ての空缶拾う奇特な子 一平

なんとエライ子。ここは素直にこうしたい。  
▽ばい捨ての空缶拾うランドセル

▼玉拾うレギュラーですと胸を張る 勝正  
確かに、本当にそうなんだらうけど、でも、  
それじゃあドラマ性に乏しい。

▼レギュラーにあともう1歩玉拾う

▼飲み屋街拾った紙幣誰の者 (あ)さくら

これは、きつと本当の話なんだろうなあ。  
作者は女性なので、ここまで飛躍すると抵抗  
があるかもしれないが、ドラマチックに。

▼1万円拾ったもう1軒行くか

▼落ち葉寄せ焼いたお芋懐かしい 開子  
この句、なんだか、ぎこちない。もつとシ  
ンプルに。

▼焼き芋をするためにする落ち葉炊き

▼うたかたの拾った恋じゃ八十路には 英也

▼巢ごもりで妄想ばかり拾ってる 英也  
英也さんのこの2句を、あえて合体してみ  
たが、英也さん、怒るかなあ。

▼巢ごもりで妄想ばかり恋ばかり

▼拾う神いるのかなあと思う時 不二夫  
不二夫さんは真面目な方。自分の思いをそ  
のまんま句にした。それはそれでいいのだ  
が、ドラマ性には欠ける。ここは思い切っ  
て、もつと過激に思いの丈を強調したい。

▼きつときつといてくれるはず拾う神

④ほんの1字、ほんの1単語のチェックで、

句のおもむきは、ガラリ変わるのだなあ。

▼拾いよみあつめてみれば知識人 マユミ

▼拾い読み集めてばくは知識人

▼紙一重で拾った命握り締め (加)佳子

お気持ち、よく分かります。そういう人、  
世間に沢山いるでしょう。ただ、「握り締め」  
だと、動きがなくて残念。せめて、

▼紙一重で拾った命使い切る

▼国民の声を拾って支持上げる 三樹夫

題にとらわれ過ぎたかな。普通の言葉で。

▼国民の声掬いあげ支持上げる

▼たくさんのご縁拾って生きてきた 風鈴

風鈴さんも一緒。題にとらわれ過ぎたかな。

▼たくさんのご縁紡いで生きてきた

▼七勝で千秋楽が不戦勝

▼七勝の千秋楽が不戦勝

▼黙黙と球拾います新部員

▼黙黙と球拾います新部員 閑

▼十円を拾い届けたちっちゃな手 (藁)廣子

こういう句は、是非「現在形」にしたい。

▼十円を拾い届けるちっちゃな手

▼このヒトは拾いモノよと妻笑い 蟻日路

▼このヒトは拾いモノよと妻笑う

(○)は佳句。◎は優秀句)

○屑籠に捨てた想い出又拾う 千賀子

○一日一善朝の散歩のゴミ拾い 通則

○花びらを拾う小さな詩を拾う 眞智子

○どんぐりを拾った森に家が建つ 黒裕子

◎拾ったか拾われたかはまだヒミツ 風羅

◎拾い者だったでしょう私のコト 厚江

今回の卒業者は1人。和歌山市の、まつとも

ともとごさん。いつもの卒業生は3句とも、

○と◎が付いて、言うことなしなのだけれど、

今回は、ちよつと(たいしたことないところ

を)直して、卒業。これから、気をつけられ

いいことだからさ。

▼骨拾いそつと見つめる喉仏 ともこ

▼骨拾うそつと見つめる喉仏

○銀杏も栗も落としてから拾う ともこ

◎幸せもゴミも拾って仕分けする ともこ

もとごさんは、とつても字がきれい。これ

結構大事なこと。誤解を招くかも知れないの

で、敢えて書くが——字の上手、下手では決

してなく——相手(読み手)にちゃんと自分

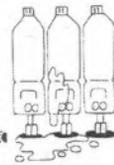
の思いが伝わるかってことが肝心。とにかく、

投句はきれいに書きましよう。



(投句207名)

秋も深まったけど、まだまだ外でお酒を楽しむ気にもなれない、そうだが、こんな時こそ読書でしよ、とばかり出してきた愛読書、???、見えないのです文字が。文庫本という存在が、自分とは全く無縁のものになってしまったと分かってかなりショックでした。



思えばこのナビも老眼鏡を何度もハンカチでフキフキしながら書いているのでした。では、そのナビです。

防府市 坂本 加代

キケンです三本並ぶガスボンベ  
(評) 一本だけでもキケンなものを三本とは、コワイですう。でも、これ人間三人だったらもっと害があるかも。

唐津市 仁部 四郎

天地人甲乙平やABC  
(評) 何かにつけて三つひとまとめ、昔

から言われてきました。でもその一番目になる難しさといったら、ああ。

横浜市 菊地 政勝

口止めをされると口が痒くなる  
(評) 何故でしょうね、本当に口が痒くなるんです。私は悪くないんですが、この口がいけないのです。

大阪市 若本 安代

ポトポトと過去が流れていきました  
(評) これって知られてはマズイこととちゃいますのんか?かと言って今さら止められそうもないですし。

富田林市 山野 寿之

隠しだしても尻尾があらさま  
(評) いくら上手く言い逃れしたつもりでも、ちゃんと見えているんですからねリッパな縞々のおシツボが。

松山市 栗田 忠士

大雨が欲しい所へ涙雨  
(評) 天の采配も時には狂うこともあるのです。もし、人間の欲が絡んでいれば結果的に正しかったのかも知れません。

佐賀県 真島久美子

最後まで隠し通した隠し味  
(評) 自分が見つけた自分だけのもの。それが辛苦の果てに掴んだものなら、教えるのはちょっと勿体な過ぎまーす。

美面市 出口セツ子

毒薬が混ざってどれか分からない  
(評) あらら、ロシアンブルーレットじゃ

あるまいし、当たったら運が悪かったですって、冗談キツー!

尾道市 小川 道子

昔から笑いの好きな膝小僧  
(評) 笑うってことはいいことだけど、お膝だけはねえ。あんまり笑ってほしくない気も致しますのでございませう。

神戸市 上田 和宏

本物の吉永小百合どれだろ  
(評) 令和の時代になっても健在なんですのね、サユリストさんは。さあ、その目でしっかり見極めて下さいな。

大阪市 小野 雅美

言い訳はしないで泣いてしまおうから  
岡山市 永見 心咲

カタチには収まる気などありません  
米子市 八木 千代

アイスばたばた推理小説読みながら  
鳥取市 谷口回春子

描きました三原色で自画像を  
大阪市 平賀 国和

サイロには飼料蓄え冬支度  
池田市 太田 省三

うっとり橋の曲線船の旅  
河内長野市 大島ともこ

美人トリオと言われた頃が懐かしい  
熊本市 杉野 羅天

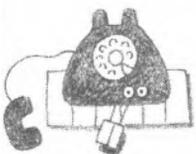
キープした俺のレミーを飲む奴が  
東京都 川本真理子

大阪市 江島谷勝弘  
遊んだらせんとアカンよお片付け  
豊中市 水野 黒兎  
チチンブイウイルス攻める三銃士  
貝塚市 石田ひろ子  
養老の滝をボトルで持ち帰る  
三田市 尾崎 一子  
テレワークペットも僕も遊べない  
寝屋川市 廣田 和織  
目薬の命中率が落ちてきた  
松山市 郷田 みや  
両脇で支えているよ泣きなさい  
尼崎市 藤田 雪菜  
淋しさに負けてはならぬキーボード  
弘前市 高瀬 霜石  
ミサイルがドドンと首領の誕生日  
大阪市 枳尾 奏子  
美魔女には炭酸水が欠かせない  
香芝市 大内 朝子  
ボトル持ち昭和懐かし計り売り  
松山市 柳田かおる  
打ち寄せる波が運んだハンクル語  
尼崎市 近兼 敦子  
謝罪するチャンス今しかないですよ  
橿原市 居谷真理子  
娘が三人どれも嫁がず公務員  
箕面市 酒井 紀華  
とりあえず女系家族の生きる水  
松江市 石橋 芳山  
君はまた僕の前から逃げていく

大阪市 古今堂蕉子  
ワクチン競争私が先よ僕が先  
明石市 穂谷 和郎  
予告せず不幸はやつてくるのです  
仙台市 月波 与生  
おふくろの味にも慣れて旅支度  
弘前市 福士 慕情  
まだ未熟証抛残して去る狸  
鳥取市 山下 凱柳  
悪い癖誰が一体つけたんか  
羽曳野市 吉村久仁雄  
点滴ボトルビールのビンに見えてきた  
大阪市 柴本ばつは  
差別ナシみんな美人の三姉妹  
三田市 村田 博  
ぶどう好きワインの方がもっと好き  
唐津市 山口 高明  
会長と肩を並べたボトル棚  
大阪市 平井美智子  
言い勝った悔いがポタポタ落ちてくる  
奈良市 高橋 敬子  
自粛させ次はトラベル極端や  
三田市 堀 正和  
牛乳を三本飲んだのは誰や  
鳥取県 斉尾くにこ  
投げつけてみたい言葉を呑み込んで  
西宮市 緒方美津子  
要領の悪い子猫がかわいくて  
神戸市 富永 恭子  
お互いの欠片認めて楽になる

堺市 内藤 憲彦  
困ったらいつでも来いと逃げられる  
倉吉市 牧野 芳光  
絶滅をしてオオカミが惜しまれる  
鳥取市 池澤 大鯨  
頭が高い視界の邪魔をしなさんな  
和歌山市 古久保和子  
こっそりと水道水に入れ替える  
五所川原市 むらのひとり  
今日を喰う茄子は涙の形して  
大阪市 田中ゆみ子  
水の地球欲しい所に水がない  
寝屋川市 森 茜  
オアシスがこんな所にあるなんて  
大阪市 高杉 力  
ステイホーム酒は二合と決めている  
弘前市 高森 一呑  
終章のシナリオ神は明かさな  
奈良県 長谷川崇明  
いま思う苦勞知らずに生きてきた  
和歌山市 まつもととこ  
まじないをブイブイとかけてみる

1月号発表  
(11月15日締切)



(平本 霧石人 画)  
柳箋に2句

# 川柳塔鑑賞

同人吟 安土理恵

—10月号から

捨てられたジャガイモ同列に私

石橋 芳山

遊ばない外出しない息しない

岩佐 ダン吉

コロナ禍の中、まじめに禁止事項を守っていらつしやるのは結構ですが、しかし「息しない」は、ちよつとねえ、いや死ぬおつもりなら別ですが、気持はよくわかりませんがヤケクソはいけません。

墓まいり今年は何居ない帰省客

川崎 ひかり

これもコロナのせい、三蜜を守って何処へも出かけない、結果、毎年のお盆の全員集合も中止となる。ご先祖様、淋しいでしょうがお許しを。けれど仏壇守りの本家の嫁は「楽させてもらた」と喜んでると思えますよ。

二杯目のジョッキは明日のために飲む

居谷 真理子

もっともらしい口実をつけては飲みたいのが酒好きの心理、明日のためになんてご立派、ご立派、さぞや充実の明日に。

覚悟せよ女が赤を纏うとき

栃尾 奏子

「赤」は情熱、挑発の色、カルメンがドン・ホセを挑発したのも真紅のパラ。さて、女が赤い布を纏うとき、(赤を着るのではない、纏うのですぞ)当然、目標は「男」。そない震えずともよい、取って食いやせん、もそつと近うーと、言つたかどうか知らんけど、要するに、女は怖いよつてこと。覚悟を決めて奏子姫の挑戦を受けて立ちますか。そんな男。

沈黙の長さが抱いている筈

平井 美智子

余程言いにくい答なのでしよう。沈黙の長い時間はとても重いので抱いている腕の力が抜けるまで待たねばなりません。だれでも軽々と答えられないもの幾つか持っているものです。その気になるまで待ちましよう。お茶でも入れ替えて。だんまり続ける方も辛いはず。

掘りこぼしのジャガイモ、捨ててきて丸ごと煮ころがしにしました。土の上で陽に当たった部分、うすみどり色になっていて少々エグイのもありますが美味しいのです。捨てたもんじゃない、残してあったのかも。一読後、お嘆きの句かと思つたのですが、否、誰かの幸せのための博愛の句と気づきました。感謝。

恐れ入りますが八月十五日です

谷口 義

丁寧に語りかけていますが、別の言葉が聞こえます「今日は何の日か知らんの、八月十五日やで、『終戦記念日』やで」。義さんは怒っているのです、「恐れ入りますが」に精一杯の皮肉を込めて。私たち戦争体験者には生涯忘れられない日、八月六日、九日、十五日。

遅れるではないぞ早まるでもないぞ

鈴木 いさお

妙に説得力がありました。行く先は、あの世。残り時間を思うお年頃の誰もがドキリとさせられた筈です。閻魔様からの忠告。

## 道草の案内役を買って出る

稲見 則彦

お人好しですねえ、でも下ごころ見え見えます。道草というからには楽しくないといけません。居酒屋の梯子が定番、案内役の名のもとに堂々と飲んで遊んで一番につぶれたのは案内役のご当人。

## 去年の常識今年の非常識

井丸 昌紀

目まぐるしい世の中、うかうかしていると、**非常識人**にされてしまいそう。デジタル化できない私はとくに後者の仲間入り、ポーツと生きてます。

## 何の芽か正体わかるまでは水

田中 ゆみ子

我家でも同じことやっています。何かみみちい気がしないでもないけれど、小さな事を見つけたら水をやらずにいられないのが人情でしょう。正体がわかるまでの期限つきであるとしても。

## いつものとだけでいつもの酒とあて

吉岡 修

いい店、いい主ですね。こういう店の顔になるにはどれくらい通いつめるのでしょうか。そうそうお客もいい人で。

## 不器用に生きても軸にぶれはない

原 洋志

小賢しい男、利口ぶって、生意気で、目立ちたがりで、出世しか頭にない男なんて最低、と、私は思っています。何があってもぶれない軸をもって自分らしく生きていけたら最高じゃありませんか。こんなお方にめぐりあいたかったなあ。

## 八月は真面目に命考える

緒方 美津子

一年は十二ヶ月、特に八月は人の命を思わずにはいられない特別な月です。まっ先に原爆のこと、終戦のこと、そして連綿と続く「**盂蘭盆**」の行事、どれも深く命と係っています。自分の命も含めて真面目に向き合わねば。背筋ピンとして。

## 長生きしコロナ体験語ろうぞ

萩原 狸月

ハイ、そうしたいと思います。ところが長生きして何歳ぐらいでしょうか、わたくしには余裕がないのです。「コロナよ早く終息してくれー」です。でないとコロナを語る事ができませんから。ひよんな事からコロナに感染してそのまんまなんて、しゃれにもならないですね。

## ふぐ提灯通天閣が寂しがる

谷川 憲

づぼらやに一度も行けずじまい。名物の大きな**ふぐ提灯**も何処へ行ったのでしょうか。大阪の南、新世界から名物がまた一つ無くなりました。寂しがつているのは通天閣だけではありません。これもコロナのせいですか…。

## 世の中と確と繋がるペン一本

加藤 江里子

毎日のニュースを届けてくれる新聞もその元にあるのは記者の握っている一本のペン、パソコンで今は指一本で操作というのが主流ですが、一般の特に高齢の少し時代おくれの主婦などは、やはりペンに頼るしかありません。その一本のおかげで世の中と繋がっている安堵を得ています。古くさくても世の中と人とを繋いでくれるペン、まだまだ大切。

## ふわふわを切るにはふわふわの力

西田 美恵子

ふしぎな旬に出会いました。ひよこのように、やわらかくふうわりとしたものを切らねばならぬとしたら、傷あとの残らないやわらかい力で。淡い恋を切る？

# 水煙抄鑑賞

—10月号から

山口 高明

完璧でなくともころあれば良い

阪本 秀子

「思いやる優しい心根のお方と巡り逢つて下さい。男性の方もそんな女性を望んでいると思います。」

今日終えて明日は明日の道をゆく

松田 蟻日路

「明日の事、心配しても始まりません。幸せな今日を終え、ぐっすり眠り明日に備えましょう。」

リフォームし母の形見のきもの着る

黒木 ひとみ

「亡き母を偲んで鏡の前に立つ姿が浮かんで参りました。」

良きことだけ聞える耳にしています

柴本 ばつは

「他人さまの誹謗中傷は聞き辛いもの、美談にだけ耳を傾けましょう。」

振り向けば相手も見てた間の悪さ

中山 昭美

「僕は忌中札を振り返ったんですけど、相手は見た貌と思われたのかな。」

アクセルを吹かして登る喜寿の坂

小畑 定弘

「僅かしか無い残り時間になりましたが、若者に負けず、好奇心をもち、お迎えがくるまで精一杯、楽しみましょう。」

ヒマワリがまだ咲いている生きなくちゃ

高森 一吞

「酷暑にも負けず、太陽に向かって凜と咲く向日葵、一呑どのも勇気を貰ったのですね。」

イヤナ奴マスクの中で舌を出す

武田 悦寛

「深々と頭を下げて、出される方も居ますよ。口先だけの謝罪でしょうね。」

近年のお偉いさん、謝る事多過ぎますよ。

青虫が食べた青菜に害は無い

脇田 雅美

「人間より、先に無農薬の試食ですかね。青虫だって生きる権利はありますからね。とっさには名前出ない老いふたり」

常国 喜好

「我が家でもテレビを観ている妻が、ほらほらあの人と言いますが、名前の方は出て来ないですよ。」

ライバルが去つて職場の活気失せ

奥野 健一郎

「ライバルが居てこそ互いに向上。健一郎どの気合いが抜けたようですね。責任をとらぬ政府が永續き」

北野 クニオ

「不言実行の俠気のある議員さん、居ないのですかね。我が身保身に汲々の方が目立ちますか。選んだ方も、悪いのかも。列島は議員天国ですね。」

# 柳界展望

希久子さん

## ▽訃報△

○山中康子さん(同人・倉吉市)、8月18日逝去。

享年94。

○土橋登さん(理事・鳥取市)、10月9日逝去。享年91。

▽表彰△  
○西出楓楽相談役は9月1日付で、(一社)全日本川柳協会から、第16回功労賞を授与された。

## ▽芳志△

○第26回川柳塔まつり誌

上大会お祝いとして金一

封拝受しました。

小島蘭幸さん、木本朱夏

さん、栃尾奏子さん、長

高俊雄さん、西出楓楽さ

ん、松本文子さん、山本

▽新誌友紹介△  
交野市 山野 双葉

紹介者 高杉 力

和歌山市 南方富美代

紹介者 木本 朱夏

芦屋市 山田 孝治

紹介者 宮崎シマ子

次回常任理事会

近日開催予定。

## 新同人紹介

永井松柏

― 忠士・みのり・茂代・光・かおる推薦

## 句会部よりお知らせ



川柳塔本社12月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。皆さまのご投句をお待ちしております。

### 記

『川柳塔』11月号に投句用紙を同封します。  
(未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。)  
投句締切 11月30日(月)消印有効  
入選発表 『川柳塔』令和3年2月号  
投句料 1000円(切手不可)

兼題	「味わう」	小野 雅美	選	(大阪府)
兼題	「ルール」	栗原 道夫	選	(大阪府)
兼題	「ばっさり」	福士 慕情	選	(青森県)
兼題	「沈む」	赤松ますみ	選	(大阪府)
兼題	「生涯」	小島 蘭幸	選	(広島県)

(各題2句出し)

### 問い合わせ・送り先

〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17  
花野ビル201 川柳塔社  
TEL 06-6779-3490

二〇二〇年（令和二年）

# 九月本社誌上句会

投句者二四二人

## 兼題「逃げる」

藤井 智史 選

この酷暑どこへ逃げてでも追って来る

大阪 石田ひろ子

ダウンロード出来ずに参加止めにする

大阪 坂 裕之

逃げ場なし内に恐妻外コロナ

京都 清水 英旺

コロナ禍で逃げたお客が戻らない

大阪 黒岩 靖博

コロナからさつと逃げ去るスケジュール

大阪 近藤 正

アマビエにからまれ逃げるコロナ菌

広島 古川 雄一

コロナから逃げたら地球から落ちる

大阪 澤井 敏治

飛べなくなつたもう逃げぬ籠の鳥

大阪 山本希久子

逃げ足の速い男の土踏まず

大阪 井丸 昌紀

話す度逃げた魚がでかくなる

大阪 油谷 克己

逃げ道にいつも一緒の酒二合

鳥取 竹村紀の治

居酒屋に逃げ込みグチる落ちこぼれ

大阪 上出 修

まず逃げて彼の本気度テストする

大阪 柿花 和夫

もう逃げはしない愛する人が居る

大阪 栃尾 奏子

年金は逃げない 妻は逃げるかも

青森 高瀬 霜石

妻子から逃げ足速く夜の街

鳥取 副井ゆたか

恐妻を盾に逃げ出す酒の席

佐賀 坂本 蜂朗

逃げ足は特急並みの足を持つ

岡山 折鶴 翔

責任を逃げて外さぬ金バツジ

大阪 徳山みつこ

レバノンで優雅に暮らす被告人

兵庫 大坪 一徳

親だもの逃げず大事に介護する

大阪 松岡 篤

親を看る話になれば居なくなる

青森 福士 慕情

逃げるなら遺言書先ず書いて出て

奈良 安福 和夫

逃げ腰は影を小さくしてしまふ

兵庫 緒方美津子

逃げ足が早くなる靴買いに行く

大阪 山口弘委智

逃げ足の早い諭吉とおにごっこ

愛媛 黒田 茂代

鬼ごっこ一途な愛を掴まえて

和歌山 松原 寿子

逃げ足が遅くヤボ用からみつく

兵庫 岸田 万彩

四コマ目に叩き損ねた蚊が嗤う

大阪 高田美代子

道ならぬ恋から逃げる白い粉

大阪 酒井 紀華

断捨離が済んだところで夜逃げする

兵庫 清水久美子

垂直に逃げると言われても平屋

鳥根 原 徳利

病氣から逃げる一日一万歩

金の要る話を逃げる遠い耳

逃げないでウルトラマンになつてやれ

逃げるとはこうだとゴキブリが走る

効き方に個人差ありと美容液

逃げ得が大手を振っている日本

幸せが逃げないように戸を閉める

福の神逃げないようにする目張り

逃げ道を絶たれ本気になりました

泣くだけ泣いてもう逃げないと決めました

目の前の大満月が掴めない

逃亡の先に灯りが溶けてゆく

逃げる月日を追うて足腰脆くなり

ふんわりと逃げ道風に塞がれる

おそらくは夜逃げと思うかくや姫

鬼からは逃げる鬼にはならぬよう

心ざわつくヴァロットの逃避

ワンマンの周りに誰も居なくなる

どこをどう逃げて君に突き当たる

逃げたいと思う暮しにある介護

大阪 吉村久仁雄

岡山 工藤千代子

岡山 小野美那子

大阪 片山かずお

大阪 美馬りゅうこ

富山 伴 よしお

兵庫 山口 光久

大阪 平松かすみ

和歌山 三宅 保州

京都 山田 葉子

石川 堀本のりひろ

和歌山 三枝眞智子

兵庫 山内 迪

埼玉 久保田千代

島根 中筋 弘充

鳥取 門村 幸子

岡山 永見 心咲

高知 辻内 次根

大阪 平井美智子

和歌山 北原 昭枝

住

夕暮れの赤から逃げている背中

逃げるのをためらう幸せの首輪

逃げ腰の男と知った非常口

疲れると一升瓶に潜り込む

美しい金魚は逃げるのがうまい

人

逃げた過去から消化不良がつづく

地

叱責の語尾はほかして春の中

天

人間になろうと雑踏を抜ける

軸

もう君を独占できる逃さない

兼題「どつも」

行く末の地球にどうも見えぬ夢

遅刻してどうもどうもと着く上座

どうもどうもに優先席が和みませ

近頃どうも激しくなった物忘れ

島根 石橋 芳山

大阪 田中ゆみ子

兵庫 山崎 武彦

鳥取 新家 完司

広島 田辺与志魚

広島 田中 敬子

鳥取 斉尾くにこ

広島 笹重 耕三

久保田千代 選

島根 竹治ちかし

兵庫 村田 博

兵庫 緒方美津子

大阪 鈴木いさお

もの忘れどうも歳かと言いのがれ

早口はどうも苦手な速い耳

どうもためされているのだからこのお題

最近はどうも頭が右を向く

煮え切れぬままに返事が風になる

嘘ばれてタフな女も いやどうも

般若面どうも重たくなってきた

当然だどうもこうもない話

この話どうも変やと受話器おく

新鋭のスマホにどうも馴じめない

どうもあかん年寄り増えて子が増えぬ

どうもどうもで世間のへりを生き延びる

勘違いしたのか追い風になった

目立つキャラどうも僕とは別世界

どもならん雁首が出す無為無策

燥ぎ過ぎどうも様子が腑に落ちぬ

口八丁だけにはどうも馴染めない

履いた靴両足どうも馴染まない

初対面名刺代りに出るどうも

好き嫌い無いがくさやはどうもダメ

大阪 西田 敬子

和歌山 村中 悦男

石川 堀本のりひろ

兵庫 青木 公輔

和歌山 松原 寿子

大阪 富田 保子

鳥取 大前 安子

広島 小川 道子

兵庫 櫻井 崇史

岡山 高橋由紀女

大阪 川本 信子

大阪 大島ともこ

和歌山 柏原 夕胡

奈良 安福 和夫

奈良 大久保真澄

兵庫 北野 哲男

兵庫 清水久美子

愛知 山本三樹夫

大阪 内田志津子

埼玉 中島 通則

約一人とはどうも私のことらしい

視線はずすどうも気になる話し振り

どうも変急に視線をそらす彼

あの二人どうも変だと思つてた

極端に走るさかいにどもならん

ここは我慢どうもどうもでやり過ごす

浅学非才どうもならない助詞一つ

どうもどうもで済む程の事だったのか

どうもどうもと互いに見せぬ腹の内

どうもどうもどうもどうもで上り詰め

そうでつかおおきにどうもありがとさん

畏まるその所作どうもきな臭い

読んだ気になんともなれない電子本

どうも旨いかぬ世の中こんなもの

なにごとまどうもどうもで生き上手

名が出ないどうもどうもで済ましとく

どうもどうものあととはうやむや尻すほみ

マスク越しどうもどうものご挨拶

温帯の日本がどうも亜熱帯

どうもどうもと5か月ぶりに顔合わす

大阪 澤井 敏治

大阪 藤原 大子

和歌山 坂部紀久子

大阪 坂 裕之

奈良 木嶋 盛隆

大阪 穂口 正子

大阪 山口弘委智

兵庫 幸田 厚子

大阪 森 廣子

大阪 井丸 昌紀

大阪 藤村 亜成

兵庫 福田 正彦

大阪 奥野健一郎

奈良 中堀 優

兵庫 永田 紀恵

大阪 川端 一步

鳥取 山本ふみ子

和歌山 倉橋 悦子

大阪 古今堂蕉子

大阪 油谷 克己

どうもからコロナ酷暑の長電話

マスクしてどうもどうもとすれ違う

この熱とだるさがどうも気にかかる

巢ごもりにどうも気になる副作用

ひと言のどうもに万感を込める

ほへえみはどうも企みあるらしい

根回しはあつたらしいな過半数

政治家になった 嘘つきになった

住

どうも気に障つたらしい目を逸らす

突っ走る自分がどうもわからない

あの顔じゃどうも分かつてないらしい

慣れぬ地でどうも勝手の違う風

挨拶もお詫びも礼もみなどうも

人

現実がどうも予想を越える老い

地

七色のどうもを使う如才なさ

天

朴訥のどうも一語が温かい

大阪 山根 妙子

山口 坂本 加代

神奈川 菊地 政勝

広島 松尾 信彦

大阪 山本希久子

大阪 樋口 眞

大阪 美馬りゆうこ

青森 高瀬 霜石

大阪 西出 楓楽

山口 上村 夢香

大阪 片山かずお

大阪 水野 黒兎

大阪 谷口 東風

大阪 原田すみ子

奈良 居谷真理子

大阪 中村 恵

軸

正直な評判どうも肩が凝る

兼題「ざっくり」

三宅 保州 選

ざっくりと混ぜ合わせると出来あがり

目の粗い人生だった悔いは無い

おおまかに筋をつかんで斜め読み

ざっくりと西瓜を切れば夏こぼれ

ざっくりと開くうわさに塩を塗る

実ざくろが裂ける故郷の母が臥す

ざっくりと編んだマスクは涼しそう

ざっくりと飛んでくるのは核のゴミ

犯人は君だ証拠は無いけれど

大根をざっくり切つて憂さ晴らす

ざっくり感領いている試着室

ざっくりとえぐつてみるが灰汁はない

傷口がざっくり原発の神話

収穫の後はざっくり掘り返し

西瓜割るようにコロナを真つ二つ

広島 小川 道子

和歌山 柏原 夕胡

大阪 阪本 秀子

兵庫 奥澤洋次郎

大阪 上出 修

大阪 平井美智子

大阪 田中 廣子

島根 篠原紋次郎

奈良 木嶋 盛隆

大阪 安田 忠子

大阪 丹後屋 肇

岡山 小野美那子

広島 笹重 耕三

大阪 平松かずみ

鳥取 竹村紀の治

大物の西瓜だざっくりと切るぞ

熊本 杉野 羅天

ざっくりと肺にコロナが突き刺さる

大阪 黒岩 靖博

ざっくりと店を赤字にしたコロナ

大阪 奥村 五月

コロナ禍の深い割れ目を立て直す

大阪 坂 裕之

コロナ以後ざっくりで良い予定表

鳥取 新家 完司

コロナ菌ざっくりの隙突いてくる

兵庫 能勢 利子

三密をざっくり切ってシンプルに

山口 坂本 加代

ざっくりと収支を付けて生きて行く

奈良 加藤江里子

ざっくりと言えば戦争放棄です

鳥根 竹治かし

ざっくりと着こなす実は無精者

奈良 安福 和夫

ざっくりと〇か×かのアンケート

兵庫 永田 紀恵

ざっくりのようで細やかなる配慮

奈良 飛永ふりこ

男です黙って西瓜真つ二つ

大阪 伊達 郁夫

あかぎれの指も厭わず亡母夜なべ

大阪 大浦 福子

柚子一つ浮かべざっくり洗う貌

岡山 工藤千代子

ざっくりの余命にハッシュタグつける

大阪 西出 楓楽

ざっくりと切った西瓜で盆供養

大阪 内田志津子

砂利道を踏みしめ祈り繰り返す

和歌山 松原 寿子

ざっくりと生きてお互様でした

大阪 谷口 義

肩書きをざっくり取れば顔がない

岡山 藤澤 照代

ニーチェならざっくり読んだ青かった

和歌山 木本 朱夏

ざっくりと緻密鴛鴦五十年

大阪 山野 寿之

疫病神斬れるものならざっくりと

大阪 横山 里子

凝り性の嫁もざっくりあっぱっぱ

大阪 初代 正彦

ざっくりと円周率は3でいい

大阪 中島 一彌

ざっくりと別けた遺品でもめている

京都 北野クニオ

いつどこで何があったかメモしとく

兵庫 櫻井 崇史

ざっくりと切るかカテーテルにするか

兵庫 山田 耕治

ざっくりと割れた傷から再噴火

兵庫 生田 頼夫

おおまかに出席者よむ紙コップ

大阪 矢倉 五月

ざっくりと割って入って掻き回す

鳥取 山本ふみ子

ざっくりの計算うまい名幹事

兵庫 福田 正彦

大雑把な話でことを済ませる気

大阪 村上 玄也

道問えばざっくり地図を書いてくれ

和歌山 坂部紀久子

ざっくりと言ってしまつて後がない

鳥取 飯野 菖子

ざっくりと袖着こなす祖母でした

奈良 山下 純子

善人では年金が足らぬ

青森 高瀬 霜石

住

昭和史にざっくり深い傷がある

大阪 平賀 国和

あなたの手ちよつと握つただけなのに  
自粛の日々猫とたわむれ猫になる  
大阪 小野 雅美

ざっくりと生きて年金元をとる

大阪 川端 一步

たわむれに閉店セール行ってみる  
奈良 加藤江里子

反骨の証しざっくり向う傷

大阪 長高 俊雄

たわむれを下戸がしつかり聞いていた  
兵庫 山田 耕治

プレゼントざっくり編んだ智恵袋

大阪 富田 保子

雑記帳開けて一句と戯れる  
兵庫 丹後屋 肇

ざっくりが似合う男がいた昭和

愛媛 宮尾みのり

たわむれに孫に将棋を習う日日  
兵庫 藤岡 りこ

人

ざっくりな暮らしの中にある明かり

大阪 山口弘委智

絵本から夢の魔法とたわむれる  
兵庫 藤田 雪菜

地

ざっくりと育てた子らの出来の良さ

大阪 大島ともこ

サンガラスにマスクたわむれすぎました  
兵庫 萩原 玲峰

天

説法の中にざっくり生きる知恵

奈良 長谷川崇明

「あらすーさん」おたわむれをとママの声  
兵庫 住吉美和子

軸

身ぐるみを剥がれて切り裂かれた手術

奈良 長谷川崇明

リハビリの足へたわむる猫じゃらし  
奈良 大内 朝子

兼題「たわむれ」

真島久美子 選

たわむれに二人で崩すかき水  
鳥根 原 徳利

ままごとのママもどうやら派遣切り

青森 高瀬 霜石

なぞなぞのあの日の答え探してる  
奈良 饗庭 風鈴

あの時は酔っていたのと流される

山口 上村 夢香

啄木の真似はしないが母を施設へ  
鳥取 池澤 大鯨

揚羽蝶ミラーボールと酔痴れる

大阪 徳山みつこ

たわむれで親になつてはいけません  
大阪 米澤 俣子

たわむれの指切りぐつすりと眠る

大阪 田中ゆみ子

ルノワールのレブリカ水浴びのワタシ

岡山 永見 心咲

さくらんぼのいけずその気にさせといて

愛媛 黒田 茂代

たわむれで済まなくなつた麻雀屋

鳥取 竹村紀の治

今朝咲いたばかりへたわむれの鍔

兵庫 米田利恵子

たわむれる玩具が欲しい夕間暮れ

兵庫 清水久美子

片隅でたわむれている僕である

栃木 廣瀬 良磨

地下鉄の吹き出し口に立つ女優

兵庫 村田 博

夜桜の下にたわむれ置いてくる

大阪 酒井 紀華

けんけんぱ路地のみよちゃんから訃報

大阪 山野 寿之

試されて少しの飴と偽善の香

兵庫 富永 恭子

鬼ごっこ明日の私は捕まらぬ

大阪 石田 孝純

雨垂れとたわむれている洗面器

広島 笹重 耕三

おたわむれですか文春がいますよ

大阪 江島谷勝弘

憂さ晴らしねずみ花火とたわむれる

兵庫 吉村めぐみ

風流な遊びもなかなかのやり手

大阪 初代 正彦

波とたわむれて適齢期が過ぎた

大阪 太田扶美代

獣にはなれぬ四角い彼と酔う

大阪 矢倉 五月

戯言をそう神妙に聞かれても

大阪 谷口 東風

桃井かおりの声で恋愛講座中

大阪 平井美智子

ギヤマンに冷酒短夜のたわむれ

大阪 古今堂蕉子

夕涼み新たな星座こしらえる

兵庫 岸田 万彩

終章の語尾にジョークを用意する

青森 福士 慕情

たわむれにべったり塗っている黄色

島根 石橋 芳山

たわむれる蝶に菜の花ありつたけ

広島 石原 淑子

たわむれに老母に被せる野球帽

東京 川本真理子

ステイホーム猫ふんじやつた弾いている

兵庫 能勢 利子

苦勞した分だけ春とたわむれる

岡山 藤井 智史

笑って下さいまた恋をしました

兵庫 上田ひとみ

泣きぬれてたわむるカニを探す街

奈良 安土 理恵

おもちゃにできたら上等だねスマホ

奈良 大久保眞澄

麻婆豆腐も担担麵もコメディアン

大阪 美馬りゅうこ

たわむれは神のくちづけから起きる

広島 田辺与志魚

やる事が無くてゴジラと戯れる

埼玉 中島 通則

冷蔵庫に離婚届を貼ってみる

兵庫 緒方美津子

国境の兵士はハトと戯れる

大阪 中島 一彌

たわむれに見せて上げます足の裏

奈良 木嶋 盛隆

人

たわむれているのか涙出る話

大阪 松本あや子

屑野菜一手間かけて一品に

大阪 関 よしみ

地

そうこれで良かったのだと雪うさぎ

大阪 栃尾 奏子

双六に再生できる手があった  
還暦でトラバーユして二毛作

鳥取 成田 雨奇  
大阪 上出 修

天

fの1ゆらぎの中でたわむれる

大阪 澤井 敏治

レーヨンにされたセルロースの不满  
再生を繰り返して青い星

岡山 永見 心咲  
大阪 柿花 和夫

軸

私には極彩色の羽がある

良き明治ぎゅうぎゅう詰めて明治村  
バブル復活願う気持ち少しある  
ビデオ判定入れて相撲がショーになる  
繰り返して見ている孫のサヨナラ打

高知 辻内 次根  
大阪 片山かずお

兼題「再生」

新家 完司 選

コロナ禍に再生された過疎の村

大阪 近藤 正

ビデオから遠い記憶が甦る  
ファミリービデオ再生したら皆若い

埼玉 中島 通則  
和歌山 柏原 夕胡

よく見れば浴衣マスクでリサイクル

宮城 木田比呂朗

カラオケの動画に冷や汗どつと出る  
逝った猫今でも会えるユーチューブ

鳥取 竹村紀の治

パンストの輪切りマスクの紐に化け

和歌山 倉橋 悦子

陽水とサザンあきずにこの夏も

大阪 齋藤奈津子

ステコで作ったマスク一点もん

兵庫 松倉 正美

亡き母の留守電の声もう何度

兵庫 上田ひとみ

着物からステキなベストできました

兵庫 住吉美和子

巻き戻しすれば乙女になるテープ

大阪 石田 孝純

再生へ祖母の和服が子の晴着

神奈川 菊地 政勝

葉味なら庭の片隅プランター

大阪 平松かすみ

母の着物ナウイドレスに甦る

大阪 米澤 俣子

土に還らぬ物作ってはいけません

青森 稲見 則彦

鉤裂きを繕い膝り着た昭和

大阪 山野 寿之

スーダラと生きた昭和に戻りたい

兵庫 奥澤洋次郎

残りもん集めりメイクしたカレー

和歌山 木本 朱夏

兵庫 梶谷 和郎

分身の術が使えるプラナリア

大阪 谷口 東風

CMであれスターがよみがえる

京都 清水 英旺

皮膚再生尻の肉とりよみがえる

鳥取 岡崎美知江

空き瓶にホイルを巻いて花入れる

岡山 岡本 余光

地獄見た元大関が賜杯抱く

大阪 坂上 淳司

カーテンも替えたし箸も変えました

岡山 工藤千代子

間引いてもまびいても悪が蔓延る

広島 鴨田 昭紀

シルバーでよければ臓器差し上げる

大阪 伏見 雅明

友の会知って断酒へ第一歩

兵庫 萩原 狸月

肝臓の機能朝には蘇る

大阪 中村 恵

再生に真っ赤な紅とヘアピース

京都 今井万紗子

### 佳

望みまだまだひこばえに水をやる

奈良 安土 理恵

贅肉で穴埋めをしたオベの跡

兵庫 清水久美子

針音も味のうちだと聴くタンゴ

奈良 居谷真理子

放棄地に太陽パネル増え続け

山口 坂本 加代

深手だが時が解決してくれる

奈良 居谷真理子

ああ暑い好きな曲聞き水を飲む

兵庫 櫻井 崇史

ステントのお蔭わたしは生きている

青森 高瀬 霜石

初期化してスタートラインもう一度

兵庫 藤田 雪菜

杖なしで歩けるようになりました

埼玉 久保田千代

延命へ人も車もドック入り

大阪 美馬りゅうこ

### 人

乾かしてまた来年の水中花

大阪 徳山みつこ

畳捨てフローリングの床光る

大阪 水野 黒兔

飛び魚になるから今は眠らせて

大阪 太田 省三

古民家も生まれ変わればビンテージ

兵庫 斎藤 隆浩

### 地

飛び魚になるから今は眠らせて

大阪 太田 省三

再生のボタンを押してクラス会

大阪 高杉 力

飛び魚になるから今は眠らせて

鳥取 齊尾くにこ

なぜば成るおつむトントン叩く日日

大阪 澤井 敏治

### 天

飛び魚になるから今は眠らせて

鳥取 齊尾くにこ

何度でも出直し生きるマイウエイ

兵庫 新阜 義明

火に強くなつて首里城立ち直れ

岡山 藤澤 照代

言霊にパワー貰って再生す

鳥取 門村 幸子

### 軸

火に強くなつて首里城立ち直れ

岡山 藤澤 照代

旧姓に帰りじっくり遣り返す

大阪 奥野健一郎

錆びついたハート磨いてくれる酒

岡山 藤澤 照代

叩かれて少し濃い目の赤を着る

奈良 加藤江里子

錆びついたハート磨いてくれる酒

岡山 藤澤 照代

# 老心ゆづり

毎月24日締切・35句以内厳守  
掲載は原稿到着順となります  
楷書で誤字のないようにお願い  
いたします。

編集部

## 豊中もくせい川柳会(大阪)初代 正彦報

そのヒント意味が分らずパスをする  
爽やかさ拾える朝のゴミ拾い  
生きるヒント寂聴さんがくれました  
傘寿でも時代の波でオンライン  
心頭を滅却してもまだ暑い  
無畏を説く僧にも盆の忙しさ  
胸がキユンまだ恋心あるらしい  
マスクする盆の読経も様変わり  
山坂を越えて米寿の朝日見る  
議員さんの舌に乗せたいリトマス紙  
潤沢のわれと気付いた秋の夕  
玉拾いの僕の気持を知るボール  
マスクして元氣ですかと秋隣  
ピカッときた次の音待つスリル感  
人生の抜け道はない一直線  
捨てきた猫が家運を立て直す  
ウイズコロナ賭けるオリ・パラの命運  
ランラン吉報らしい鼻歌が  
五百円かと拾ってみれば缶パッチ

多美子 英三 憲央 多津子 健二 時子 真理子  
きらり 公彦 武彦 敏昭 ヨシエ  
堅坊 野鶴 満作 肇 ふうり  
かずお

草原の僅かな起伏生む景色  
一強が消えて派閥が跋扈する  
一滴の青空こぼれ幸も白う  
浮き沈みあって人生面白い  
習や金またトランプに挑む昔  
あの人もご定年かと見る散歩  
その椅子に座れば椅子の顔になり  
ブライドの欠片を拾い苦笑い  
子どもとの会話に潜む笑い  
聖書からヒント命の仕舞い方  
くり返しくり返しまたこのページ  
らしく生きるそれが一番むつかしい  
マスク越し元氣に笑うあなたの目  
絶対のヒントをくれた雲の峰

### 川柳塔なら

### 大久保眞澄報

赤提灯の前で砂漠化してる喉  
広大な砂漠見おろすビル群れ  
伝説の塔は砂嵐の中に  
乾ききった心に愛の一半  
炎暑にマスク口の中は砂漠です  
心に砂漠持つ人達のはるホーム  
独歩有情砂漠の水の滴  
地下鉄を出ると砂漠のど真ん中  
早晩に風紋を踏むラクダの背  
駱駝から車へ時短する砂漠  
百歳あふれ介護施設という砂漠  
夢ここに尽きに砂漠に眠る骨  
人間をふるいにかける都市砂漠  
伝わらぬ思い砂漠に雨が降る  
オアシスがきつとどこかにある砂漠  
通院日雨ならパスと決めてある

見清 英旺 弘委智 忠黒 鬼 耕治 美津子 正彦 則彦 洋志 ひとみ 美智代 求芽 久仁雄 見清 武人 華蓮 亜成 シマ子 羅天 保州 史郎 欣之 希久子 孝志 尚子 美智子 恭昌 かずお

寄り添うと決めて介護が楽になり  
ポツクリ寺の帰りに小さな墓地を  
あの雲のかたちへ決めて未来絵図  
迷いつつ決める楽しみつつ決める  
忘れると決めたら青い風の色  
樹木葬と決めてリビンクウイル書く  
各停で行こう迷いと向きあつて  
あつそうだ好みだふりする決まなくちゃ  
あつそうだ死んだかぶり手も有った  
あつそうでしたやふり貴男は元他人  
ど真中あつと言う間の逆転打  
あつと言う妻母そしておばあちゃん  
振り込んだ虎の子あつと騒がせる  
棋聖戦あつと言わせた聡太君  
無為徒食あつと言間に暮れかかる  
行き詰まりアツと膝打つ突破口  
発見はいつもあつ！から始まった  
あつそうか俺が居ないと妻陽気

### 川柳花の輪(大阪)

薫

暑いわね涼しい顔で妻が言う  
寒暖の差あればこそ出来ぐあい  
コロナ禍で省略し過ぎ祭りごと  
古里の祭り心の拠りどころ  
運命をかえたあの日の秋祭り  
手間かけた料理祝いの席が待つ  
和歌山三幸川柳会 西川 千鶴報  
さしすせそまだ忘れずに台所  
でこぼこも平らもあつて人の道  
手のひらの孤島で癒す傷の痕

昌代 國治 萬紗子 惠美子 大介 敬美 清美 榎子 憲彦 篤 千代 純子 誠 壽峰 みつこ 成子 かこ 行久 正太郎 笑子 泰子 信子 薫 亜成 起世子 八重子 菜摘



こそばゆい水着の跡のオイル焼け 友二

川柳塔打吹(鳥取) 斉尾くにこ

ほおり投げた三日ぼうずの数しれず 美佳子  
飽きるまでボール投げてとせがむ犬 栄子  
言葉投げ返つて来ないがまた投げる 紀子  
喜ぶかそっぽを向くか投げてみる 重忠  
投げつける言葉ひねくれ変化球 公恵  
投げ遣りにならずに励め今日もまた 義人  
ヨロヨロと赤提灯のはしこ酒 滋  
ヨロヨロとしてヨロヨロノーサイド 重利  
七人の敵もヨロヨロノーサイド 石花菜  
よろよるとよつこらしよつと一世紀 翦子  
呑み過ぎて魂抜かれ道化者 紀美恵  
心の刺早く抜いてよねえ貴方 久芽代  
梅雨明けて我が者顔の草を抜く 悦子  
戦中派貧し幼少生き抜いて 富隆  
最年少藤井七段群を抜く 龍枝  
棘を抜く手にはしつかり拡大鏡 貴恵  
歯と髪が抜けた夢見て飛び起きた 芳光  
耳栓を抜いたら入る罵詈雑言 節子  
ストレスのトンネル抜けてからの空 美知江  
門を抜くと昔がしゃべり出す 野助  
マンモスを焚火で炙るこの至福 陽之助  
家庭では花火散らす目を瞑る たけ代  
八月は戦火に倒れ無念の日 大ゆき  
飛び火せぬように尻尾は切つておく 大 鮪  
尻に火がついているのは蛭だけ 三津子  
火を吹いた事は隠して嫁に来た 紀の治  
結論は怖い悲しい原子の火 照彦  
火達磨になつて飛び込む海の底

コロナ禍を抜ければ開花する医学 くにこ

川柳さんだ(兵庫) 酒井 健二

煽てられ財布の紐がついゆるみ 野薫  
幸せを買えば財布は軽くなる 直美  
金運の財布も泣いているコロナ 紀乃  
十万円ぐらいで紐はゆるまない 茂山  
災害募金無視して通れない財布 利子  
ばあちゃんを財布がわりに連れて行く 光文  
コロナ禍が世界の財布わやにする 峰明  
願ひ事言う間を呉れぬ流れ星 ワクチンの即時発明祈る日々 厚子  
昔なら航空便で今メール 哲男  
出勤は各駅帰りは特急 勝正  
速達を三日寝かした旅帰り 晃  
速いもの勝ちには弱いのにき者 光久  
スピードでとても勝てない口喧嘩 修平  
卒寿まで生きた証の金メダル 婦美子  
七十五メダル一つも持つてない 勝弘  
勲章を遺影に父よ嬉しいか 健二  
金メダル介護の君に送りたい ちあき  
欲しいのはなにがなんでも金メダル 真桜子  
チョコレート入ってますか銀メダル 耕治  
関心はメダルの裏にあるドラマ 俊昭  
一合の寝酒目覚めが心地よい 後尚  
寝る前に必ず覗く子の寝顔 健彦  
団子鼻三つ揃つた子の寝顔 武彦  
バツタンキュー直ぐに寝つけた日の恋し におさむ  
モルヒネの寝息がもれる命の灯 ひとみ  
乳呑み児の顔ながめつつ母眠る 加代子  
今宵又過去が臉に降りて来る

下心持つと優しくなれました かずお  
ステイホーム川柳にある新コロナ 廣光  
手の平をアルム川にすす新コロナ 万彩  
あやふやに答え逃げ道あけておく 義博  
美人には何とも言えぬ謎がある 堅坊  
進むため一つ壊して一つ積む 恭子  
欲と嘘ついて離れぬ影法師 高志

南大阪川柳会 松岡 篤報

現金の出番をなくすスーパード 柳右子  
ゆびを折りたいのち滾らす一行詩 弘委智  
気分よく目覚めただけで丸もうけ 峰子  
まだ胸にうずく日もあるラブソング 弘子  
支度する子へやきもキと口が出る 大子  
今日句会忘れあわてて支度する ルイ子  
体より気合いで勝るタフな奴 修  
タフよりやさしい男もてている 楓楽  
母のタフ朝昼晩と台所 あや子  
一日に句会三ヶ所まわる猛暑 博  
おばちゃんタフは笑顔の積み重ね 柳伸  
帰省する支度出来てもまだ迷い 直子  
初恋に胸がうずいた日の記憶 いさお  
あつちこつちうずくけれどもやめぬ酒 昌紀  
被爆した語りべの声胸うずき 妙子  
生きるとは胸のうずき目も躍る日も ひさ乃  
母に逆らひ吐いた言葉が今うずく シマ子  
朝昼が終わつてすぐに晩ごはん 実  
妻二階蛍光灯が揺れている 東風  
うがい薬が効くなどとおおる知事 勝弘  
後回しした終活をばたばたと 篤  
きみまるのビデオで笑うのどぼとけ 通江

河内音頭ひとりで踊る四疊半  
了見の狭いトップで国が病む  
五十年二人三脚これからも  
万灯会今年も亡母に無理を云う  
コロナより怖い離れていく絆

富柳会(大阪) 山野

抗えぬ引力あなたへと墜ちる  
手の平のこれからきつと無限大  
信号は黄まだともうの聞き合い  
敗戦後飽食の夢見る毎夜  
電子音に囲まれ風は無表情  
上澄みを掬い本音を炙り出す  
すんなりと共の名言える大丈夫  
すんなりと好きと言えない好きだから  
たんだら過去の私が黄ばみ出す  
老いらくの脳へカンフル剤の酒  
金貸してすんなり戻ったことがない  
唯我独尊どこで生きてもひとり花  
もう秋に塗り替えました金魚鉢  
惚け防止信じて今日も一行詩  
遺影から微笑みかけてくれる母  
熱爛が恋しい季節待たれます  
天花粉路地に漂う昭和の絵  
満ち足りてちよつと孤独に憧れる  
靴履かぬ暮らしに萎える老いた脳  
根気よく続け花咲くスクワット  
好奇心軸足纏れ黄昏る  
湯に浸かり一人棘抜く反省会  
待つ事も教えてくれた風の音  
嫁ぐ娘をすんなりやれぬ父の胸

寿之報

よしみ 国和 克己 ばっは 亜成  
恵 武人 寿之 高鷲 和子 壽峰 一文 田鶴子 澄子 欣之 清 かり 文重 由夏 正義 きよみ 常男 隆允 章子 安希子 良恵 やすえ 圭

竹原川柳会(広島) 古田比呂子報

二年たつても被災の爪痕ある痺れ  
スタジアム九回逆転ホームラン  
盲目のみごとなピアノアンコール  
風紋の明日はもつと素晴らしい  
石庭の真砂が語る日本の美  
月の砂漠羨慕帽子を借りて来る  
鳴き砂が鳴いて大夕焼けとなる  
砂を詰めて未来へ誓う甲子園  
砂丘に描く風の絵筆は自在なり  
船酔いへ風がやさしい海になる  
伝馬船父に教わる櫓や釣を  
運命か亡夫と出会つた船の旅  
どの船も郷に向かつている船先  
夏休み船の匂いの中にいた  
船長は今年米寿の渡し船  
入道雲よ何に挑戦しているか  
情報に振り回される暑い夏  
美しく老いて月夜の影になる  
未来を少し考えてもいいですか  
マスク取りタツチがしたい笑いたい  
赤とんぼ飛ぶよ不安はなかるうか  
かめさんはカメカメとなくのかな  
三歳 五歳  
だれよりもたかいかいよババのかたぐるま

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

ジンクスに似非インテリがみつつき 四郎  
歳を見てご立派ですと老いた医者 蜂朗

老いてゆく老いを育ててたゆたいて  
實  
塵紙にもならぬと名刺破り捨て  
政治家のモラル試さる活動費 高明  
廣幸

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

外出を止めた体が弱くなる  
電話口父の弱音がいいとおしい  
嘘少し混ぜて空気をまろやかに  
子が描くキャンパス親の顔が無い  
ステイホーム虹を見たくてシャボン吹く  
順調な時に逆転視野に入れ  
破る予感の指切りをしてしまふ  
年を食ひ世間の謎が解けてくる  
日記とは名ばかり愚痴に愚痴重ね  
終活があれば夫婦の内緒ごと  
取り敢えずと半端な日々を積み重ね  
ムチ打って生きる背中を見えますか  
十万円は貯金にまわす金じゃない  
お元気ですか声かけをしてくれた人  
八月へ線香花火買いました  
フオークにバスタ巻けないと差し向い  
夫にもちよつとおしゃれなマイバッグ  
ウンと知る子の言い訳を聞いてやる  
あれほどと言つたのに行くパチンコ屋  
生け捕りの形に座る主です

はびきの市民川柳会(大阪)藤原 大子報

みずからを一步ずつめるこの試練  
今日の吾試練試練を耐え抜いて  
専門家に耳を傾けてください  
会いたいのが気持ちおさえて手紙書く  
千鶴子  
専平 正義 勝弘

菓籠りの試練少々長過ぎる

ひたすらに銃後の守りしたモンペ

堪え難き詔聴き傘寿越ゆ

神様の試練四十度の暑さ

足腰に試練十分の草取り

失敗は試練の賜と思う

向かい風受けようひとり手を上げる

母親になるため耐えている悪阻

よく喋る男に突然失語症

試練乗り越えようと視界広くなる

洗い浚い話し心も通じ合う

アルコールで日課のように胃も洗う

手を洗い消毒をして孫を抱く

手洗いが上手になつた園児達

傷口の治らぬ足を持って余し

洗いたて野菜天ぶらにがみあり

金洗う秘技で当選する議員

イライラが食器を洗う音に出る

居酒屋に汚れた心おいていく

洗顔にこだわり私ノーマイク

子も孫も元気ですよと募洗う

シャンブーの残り香誘う恋心

嬰兒の寝顔八十路の邪を洗う

強いハグジェラシー洗い流して

シルク 美代子 久仁子 瑞美子 久仁雄

バトン受け今は重荷の五反の田

立秋とは名ばかり酷暑居居って

泣く子も黙る自粛自粛の秋行事

肥ゆる秋財布軽く懐細る

駅ピアノ弾く人知らず聞き惚れる

秋待てず炎の中で咲く桔梗

それぞれの人生神のなすがまま

返してと言えず気になる電車賃

お笑いが大衆賞をわしづかみ

俺俺の巧みな電話罠に落ち

ひとときの写経体験字がかすむ

まだ生きる筋トレ夢中老いの坂

あふれ出る汗と戦う熱帯夜

居酒屋で飛沫がこわい虎ファン

あふれる程コップに冷やを注ぐおやじ

老いてなお楽しく飲もう割りかんで

おつかないタイプ意外と分かりよい

あふれる情報鵜呑みで民迷う

風あふれコロナ舞舞う町の中

ガセネタを信じ夢中で買い漁る

初産のあふれる乳は宝物

外野手が時々あくび草野球

化けて出てくれてもいいよお母さん

茄子トマトしばらくぶりの雨の音

しばらくは酒を止めたい二日酔い

コロナ禍でしばらくが早半年に

しばらくぶりの友もやっぱり背は縮み

古い本読むチャンスだねコロナさん

何をするつもりだったか腕まくり

不祥事の文字が踊っている紙面

非常食大中小とプールする

うんざりの雨も楽しい雨蛙

夏も終えプールサイドの孤独感

真っ直ぐで途中変更できぬ人

うんざりを吹き飛ばして庭若葉

腕振つてごらんリズムに乗ってくる

設計士わが家を建てた亡父の腕

この腕を頼りに何時も歩きたい

思いきりプールで泳ぐ自粛明け

プールは楽しプールサイドに見守られ

泳がないプールそろそろ歩きます

じりじりと夏のプールを泳ぐ恋

饗応と美女にも浦島は飽きた

疲労蓄積わたくしが壊れた

腕出して真夏を謳歌して少女

腕出でて回るマスクの寸足らぬ

大海を知らぬ現代プールっ子

春代

正子

一弥

桂彦

小谷 小雪報

桂子

小胡

夕子

タカ子

精子

春雄

晶子

文代

小雪

よし

ほのか

佳子

悦男

八茶

明

八茶

知香

紀久子

富美子

北澤 稠民報

哲男

稠民

善輔

黒兎報

黒兎

純子

順子

奈津子

守啓

郁子

わかやま吟社

春代

正子

一弥

桂彦

小谷 小雪報

桂子

小胡

夕子

タカ子

精子

春雄

晶子

文代

小雪

よし

ほのか

佳子

悦男

八茶

明

八茶

知香

紀久子

富美子

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

マスクして帰省するなど子に電話  
結果待ちバイクの音に胸騒ぎ  
三食をしつかり食べてまあ元氣  
リスタートさせる心の澀吐いて  
友人は懐広く人が寄る  
警鐘か天変地異の日本国

川柳あまがさぎ(兵庫) 大浦 初音報

コロナ禍にコロコロ変る国の策  
暑さにもめげない雑草根の深き  
蚊もいない今年の夏は命がけ  
根ほりはほりあなたの手が知りたいの  
その言葉ストンと落ちた胸の内  
苦手でず頭切換え決め台詞  
正直者妥協するから損をする  
けつまつぎ根の広がり木を見上げ  
アラヨツと立ってパンツがはけました  
わたくしによく似た匂い根なし草  
何故怒る正直言っただけなのに  
白状は正直言うに嘘を言う  
正直者妻の前では目の華を持つ  
正直に生きてこの世の華を持つ  
マスクしても目は正直に物を言う  
鷹揚かボケかオタオタしなくなる  
無礼講言葉真に受け飼いの殺し  
天国満員補欠で私入れるか  
生き方をコロナが変えたテレワーク  
泣けるだけ泣いたあなたを許そうか  
根回しが良くて疑う隙がない

週行 雅美 まみ子 美千代 三樹夫 かつ子

紀惠 菊江 孝治 厚江 初音 雄次 柳明 和子 紀華 新録 正彦 修平 高千賀子 健二 英坊 真桜子 良種 雅美 美龍

心根のやさしい人にすぐなびく  
根回しが効かない人が手をあげる  
根性のTシャツを着た引き籠り  
正直に呑み会もせず六カ月  
二杯目は酒にしようか水わりか  
安倍八年妻の天下は五十年  
迷ったりはアダムとイヴのりんごから  
迷ったらいつもの上りの道選ぶ  
点滴のポトリ命をつなぐ音

川柳ふうもん吟社(鳥取) 山下 凱柳報

突然の指名おーばえ頭真つ白だ  
小物ほど蔭でおーばえする世間  
おーばえして結局元の鞘のまま  
コロナ紀の始まりとして記憶せよ  
子どもらへ何より薬親の笑み  
一日に悔いがなかった日記帳  
猛暑日に赤信号は辛すぎる  
黒髪父の遺影がまた泣かす  
ヒマワリが無邪気に咲いて笑ってる  
日本丸がコロナの海に座礁中  
脳のないコロナにわたし負けている  
入道雲よ君は日焼けをしないのか  
青い空風船飛んで平和です  
叩いたら飛びますわたし紙風船  
ワーワーと風船を追うもみじの手  
ふうせんを操る猫の目が光る  
終章の風船ふわり風まかせ  
風船は好きな女の子にやっつた  
しつかりと叩いて撫でて買う西瓜

ヨシエ 耕治 修平 正和 勝弘 万彩 かみお 久仁雄 宏造

節子 回春子 紫陽 春雄 昌鼓 茶人 真理子 宏章 初恵 白兔 蟹郎 八千代 菖子 善平 喜明 考柳 一瑤 幸二

しつかりと諭吉配って票集め  
ほんやりが残りしつかり者が逝く  
しつかり者バーゲン日しか出向かない  
太っ腹の妻しつかり有るよ貯金残  
しつかりと教えられたり教えたり  
しつかりと歩んだ道に悔いはなし  
しつかりと戦後を生きた母の指  
くどいほどしつかり釘を刺しておく  
浮き沈みあれどしつかり大地踏む  
あちこちが痛いと呼びふいている  
あまりにも痛すぎますよ戦争は  
注射針みると痛さが先走る  
恋心痛くて抜けぬ胸の棘  
親友が励ます言葉身に痛い  
痛いところつかれた顔は見せられぬ  
他人の痛み知って我が身の痛み知る

きやらぼく川柳会(鳥取) 後藤 宏之報

無難へと舵切る先に夢がない  
伯耆富士雲の帽子をかぶってる  
赤トンボ出るに知らぬこの酷暑  
生きるとは菌や痛みと折り合つて  
タイマーをもう一つでも二つでも  
断捨離はAI語からとりかかる  
久し振りかかりつけ医で再会ね  
この夏は腹の底から笑えない  
盆が来て里の初盆手を合わせ  
我が家には猛暑と猛女同居する  
暮そうじ暑さかきませせミ時雨  
百葉の長を飲んでも医者通い  
うつるのを防ぐマスクもファッションへ

振代作 利昭 哲子 金祥 勲章 美恵子 みゆき 大 粹 房江 一平 楓花 凱柳 俊久 博子 美穂 宏之 令位子 菜々 宣子 美草 美緒 瑞枝 紀治 治代

ぼくの句をまた美代ちゃんが天賞に  
よう来られ冷たい十萬億土から  
マスクより冷たい水が欲しい夏  
高齢者免許更新四苦八苦  
久直

川柳塔すみよし(大阪) 古今堂蕉子報

大胆に蠅が仏の前通る  
大胆に打って出たのが吉と出た  
大胆な柄を着こなすのは自信  
パランスの悪さが招く転び癖  
作業着に一家支える父の汗  
熱々のたこ焼き冷ます舌の上  
大胆が過ぎて映倫カットする  
お帰りと汗も涙も抱きしめる  
核のゴミ受け入れ是非に揺れる街  
ありがとう汗を流して終い風呂  
大胆で怖さ知らずの未成年  
中古マンションピー玉持つて下見する  
持久力転がり落ちるこの猛暑  
マスクの口に氷ひと片放り込む  
小兵ながら大胆不敵炎鵬関  
伝えようピカド黒い雨のこと  
エンピツを転がしてみろイエスノー  
涙ではないよ汗だと照れ隠し  
香港の自由を奪い取るチャイナ  
会長の横で居眠りする会議  
食足りぬ熊の母さん民家まで  
取り敢えず大胆に生き顔洗う  
一人旅大胆不敵お嬢さん  
あの汗だ話に嘘はないだろう  
誇らしい汗だな父の町工場  
大胆に妻のファッション変わる夏

雨奇 千代 久直  
重信 裕之 朝子 寿心 鉄雄 春雄  
としお 五月 妙子 さくら 民子 篤 滿知子 福貴子 ゆみ子 俊雄 克博 寿之 まつお たまこ 万紗子 小枝子 ダン吉 志津子 舞夢

大胆に決めた計画素敵だな  
転がらぬダルマさんには仕掛けあり  
小兵の知恵敵の裏かくは大胆さ  
姥捨てと同じらしいよあのホーム  
願い事話し転がす五円玉  
北のドン核のボタンで威嚇する  
転がされ子猫のおもちやだんご虫  
手のひらで夫転がす妻の技  
怖がりの父がコロナの患者診る

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

奇跡よりすこしの一步のぞみます  
奇跡にも裏に隠れた努力ある  
今更に元に戻れぬ意地がある  
この齡で今更開けぬ常套語  
温暖化今更戻せぬ自然界  
気分よく泳がせて妻手綱引く  
貴女と出合い夫婦になれたのが奇跡

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

忙しきまにかまけて愛を見失う  
生きざまのお会計なら四捨五入  
教室にぼつんと先生オンライン  
善根を積んで占う明日の地図  
おーいお茶自分でしららいでしよう  
忙しいのはスピードが落ちたから  
家中を追い廻して電子音  
ポイントも貯めてペイペイスピーデー  
教室に思い出残し散る仲間  
教室の机の傷はカンニング  
五十人ぎゅうぎゅう詰めめその昔  
ペンペン草咲いて教室廃校舎

廣子 公誠 和夫 理恵 雅美 満作 里子 いさお 五月 薫報 やすの 正太郎 笑子 泰子 信子 薫 亜成 星雨 かこ 仁 秀雄 郁夫 寿子 高鷲 鈍甲 銀杏 千賀

学び舎の机に残る肥後守  
絶妙のコントも取る飛ぶチョコク  
年末の第九楽しみ取るコロナ  
カルチャーの席もソーシャルディスタンス  
飯の世の恋を占う暇つぶし  
努力した甲斐があるのか明日の運  
コロナどうなるのか占ってほしい  
占いは瞬時富岳に叶わない  
平穩な日占いはは気にしない  
古いで誉められはすむ五千元  
AIが占うコロナ後の世界  
夜店から別れ別れになる金魚  
せせらぎを抱いて午睡の夏の宿  
思い切り空気吸いたい騒ぎたい  
香港の夜景ドルから元になる  
やいコロナおまえも熱中症になれ  
コロナ禍を逃れ時どき雲に乗る  
花活けて世の変革に耳澄ます  
熊蟬の鳴かねば寂し鳴けばなお  
コロナ禍に認知・熱中症が増え  
絵手紙の金魚は跳ねる熱帯夜  
二メートル保つ絆を考へる  
墓参り知らない人に手を合わす

岩美川柳会(鳥取) 山下 節子報

悩むのはよせと満月ささやいた  
敬老日笑顔で皆が集まった  
豪雨禍の方程式を壁に張る  
災害地へ真心こめた義援金  
老人の老人に日が暮れる  
ヌケヌケと嘘吐いてると笑う月  
その豪雨家の畑に分けてくれ

高志 尚世 かずお あかり 一文 勝弘 勝茜 ルイ子 武彦 祥昭 欣之 和織 賢一 朝成 亜成 信子 弘委智 銀杏 かすみ 弘一 博泉 一瑤 弘六 一平 重忠 完司 美恵子 たぬ



コロナ橋の狂想曲が街の中  
狂つてないまわりについて行けぬだけ  
これまでか諦めて押す重いドア  
重病の経験威張るクラス会  
遠足の生徒が写生する水車  
口が堅い彼を信じている安堵  
フリフリのお帽子だつて初孫よ  
八月忌の折りにさえるコロナの橋  
身にそわぬ金を手にしてから狂う  
給料は安いが責任は重い  
これからは果実天国舌の幸  
軽いうそだんだん重くなつてくる  
お地藏さまに夏のお布施はわら帽子  
帽子にマスク僕のイケメン目立たない  
その内に箸茶碗しか持てぬよう  
爺さんの比重が重い農家です  
天才も一手狂えば敗北に  
死神はトリアーজেせず死者を決め  
音だけで心安らぐ水車  
実印を押して人生狂い出し  
会心の一打吸い込む無観客  
血迷うたかアベノマスクをまた配る  
童謡の森の水車を懐かしむ  
一人になり気楽だという瘦せ我慢  
握りしめるばかり八月の帽子  
水車コトコト老婆ひとりの鍬光る

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

チャンバラをしては赤チン塗っていた  
今は無い川遊びした祖父の家  
アベコロナいい思い出と言ひ難し  
思い出が足を引っさばる大掃除

萩次風完  
江男露司

淳  
千賀子  
洋次郎  
堅坊  
一徳  
光久  
ひとみ  
弘子  
俊雄  
後次  
水筆  
敦子  
和宏  
廣光  
哲弘  
伯備  
忠夫  
利子  
野鶴  
弘委  
勝弘  
宣子  
りこ  
美津子  
武彦

思い出はわが青春だ昭和っ子  
この時期に総理辞任とゆう怖さ  
人ひとりに消すはやさしい紙の斧  
地震雷SNS人が怖い  
雨も怖い風も怖い人間も  
トランプは怖いブーチンがあざとい  
人間の悪知恵お化けより怖い  
わたたくしがモデルでしょうか鬼の顔  
原爆のドーム破壊の怖さ見る  
父母の傑作がわが人生に悔いはなし  
鼻が決めてわが人生に悔いはなし  
小鼻ピクピク持つて来た自信作  
下駄履かぬ鼻緒の切れる事はない  
だんご鼻ドジョウ揃いが似合う鼻  
負け知らず天狗の鼻が折れません  
団子鼻隠す二枚のアベマスク  
鼻をつく隣の匂い香水だ  
べとべとと密が怪しく寄ってくる  
真実をべとべとにした自民党  
にやにやとべとべと男大嫌い  
D I Y 接着剤で手べとべと  
べとべとと繕わりついた子どもたち  
べとべとと汗纏り付く四十度  
めかしても汗とマスクでべとべとだ  
鼻の下伸びて茶碗の汁飛ばす

長柳会(大阪)

辻村 ヒコ報

巣ごもりがちよつと浮き立つ通院日  
夫の影いざ出てみれば風強く  
縁結び大凶引いてどうするの  
怖い夢目ざめた後も気が重い  
パチンコに溺れる大人みる子ども

弘ゆ子  
美き

恵子  
由紀子  
日出子  
大鏡  
醉芙蓉  
石花菜  
龍枝  
宣子  
祐子  
重忠  
玲子  
雄大  
けいこ  
明友  
美知江  
野萩  
さちこ  
麦青  
隆昌  
紀美恵  
道春  
瑞一  
鬼一  
智恵子  
照彦

秋晴や隣の町は豪雨だよ  
古里の思い出入られて来る便り  
誰かしら目だけ笑つたマスクごし  
逆鱗にふれぬようにとやんわりと  
しつかりと天を指してフルパワー  
筆先に君への想いあふれ出る  
身の丈を忘れ溺れた欲の皮  
うますぎる話に乗らぬ車輪止め  
路地裏に情けあふれた良き昭和  
年暮る勿体無いが幅利かす  
まつすぐの目線に嘘は通じない  
柝席に今日も谷町らしき女  
巣ごもりへエールを送る蟬しぐれ  
コロナ橋にめつつきり増えたカタカナ語  
日日努力幸運掴み嬉し泣き  
七十五年御霊に恥じず眠れるや  
逢えなくても手も触れられずネットする  
残り火に紅もさします老いの恋  
三食と言うイベントこなし元気です  
暗くなるまで遊び呆けた幼い日  
公園のランドセルから越えまわれ  
無我夢中君が居たから越えられた  
息災に生きて行けたら二重丸

あかつき川柳会(大阪)

磯島福貴子報

年金で飲むオアシスの酒二合  
保健室がボクのオアシスだった日日  
ひざ枕深い吐息の抛りところ  
腹想に遊ぶ穏やかな空間  
駅裏のオアシス母に似た女将  
オアシスをさがして人は生き感う  
オアシスも今三密と疎まれる

(河)正  
鈍己  
満知子  
洋二  
美晴日  
弘子  
子

規之  
登美子  
邦夫  
邦代  
靖博  
純風  
光弘  
澄子  
福彦  
隆彦  
孝  
淳子  
和美  
直樹  
幸子  
正博  
敬二  
ともこ  
由夏  
孝代  
一男

オアシスの蜃気楼とは思われない  
わたくしの鞆を住いにする風  
瀬戸内の波がやさしい旅枕  
波風が立たぬ風こそ要注意  
さざ波も立てず喜寿まで老二  
いっだつて親は子供防波堤  
稲穂波打つ瑞穂の国の米離れ  
九条が平和を守る防波堤  
アベ政治コ罗纳の波に呑み込まれ  
大波の盾になつて沖繩よ  
テトラポット三角波を睨んでる  
風呂敷で月光仮面に早替わり  
十三夜なんとやさしい月あかり  
古希の影縮んで見える月明かり  
月光に透かした手紙涙あと  
アポロ以後ロマンを消した月明かり  
月光仮面助けにくるのは今でしょう  
告白に月の光が明るすぎ

つよし  
茶助  
紀乃  
高水  
蒼鷺  
信子  
楓楽  
ゆうこ  
勇  
一歩  
ひろ子  
古池蛙  
里子  
洋二  
瑞美子  
北朗  
小惠美子  
常男  
征之  
昌代  
穩夫  
吾一  
江村

代々に渡り受け継ぐ職人芸  
人並にやつと暮らせる灯が見える  
遍路旅八十八寺あと少し  
家族がいても一人で渡るあの世橋  
好きも嫌いもノルマとあればやり遂げる  
よろよろと渡る猛暑の交差点  
専守防衛九条の樹が揺れている  
朝昼晩ノルマのように葉飲む  
横断歩道がだんだん長くなつてきた  
古稀過ぎて残る人生見えてきた  
防くはあなた渡るのはわたし  
八十路生きやつと人生謳歌する  
この妻子養うことが今ノルマ  
向い風かわして笑うのがやつと  
撒かれてノルマノルマに首つなぎ  
釣り竿の横並びした防波堤  
防犯のためにバットを置いて寝る  
死んでからやつとイジメと知らされる  
コ罗纳にもノルマがあるのか異変する  
責任を取らず痛感やつと辞め  
ストレスは課されたノルマ比例する  
約一時介護ノルマが残つてる  
若い名介護ノルマが逃げ

秀夫  
浩子  
進  
壽峰  
福貴子  
熊四郎  
重忠

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報  
スクランブルやつと抜け出す古稀の腰  
急患のナースのノルマ重すぎる

たつたか  
実満  
ポール  
陸大  
完司  
ちかし  
宏章  
孝子  
静恵  
宣昭  
弘六  
弘子  
蟹郎  
一平  
楓花  
みゆき  
ゆり子  
照彦  
慎一  
綾子  
節夫  
かおる  
八千代  
すみれ  
文道  
盛桜  
甚緑  
光幸  
孔美子  
茶子

支えられ僕の人生やつとこさ  
六甲川柳会(兵庫) 梶谷 和郎報  
草文

誰に罪あるのか空は荒れ狂う  
台風一過コ罗纳が消える夢を見る  
警報でも授業に参加オンライン  
台風の時ほ団結する家族  
なれ初めは台風の日の雨やどり  
絵葉書と少し違った旅の宿  
ひとりの旅あの日で終つたバスポート  
ハネムーンだけで終つたバスポート  
旅支度魔除けに遺言を書く夫  
知らぬ駅降りて小さな旅気分  
牽牛も旅は控えめ天の川  
隣にはリユック座らせ一人旅  
若い芽がすすくく伸びる囲碁将棋  
謙虚さと無限の若さ二冠へと  
青春や夢へ進路を向けた日々  
青年は失敗などは恐れない  
アンビシャスあの頃僕も燃えていた  
コ罗纳禍も恐れず若きボランティア  
若さとは折れて凹んで立ち上がる  
知る意欲まだまだ失せぬ好奇心  
知り過ぎ愛のハートがゆれにゆれ  
情報過多知らない方がいいときも  
嘘と知り黙って聞くのも母の愛  
君のこと知れば知るほど好きになる  
打ち明けられた秘密が僕を眠らせぬ  
知つてがさうかそつと聞いてやる  
昨日より優しくなつて来た貴方  
本物の妻さ本物だけが知る  
ちよつとだけですがと夏の甲子園

次次郎  
弘  
隆浩  
恭子  
廣光  
光久  
公輔  
狸子  
利子  
道子  
憲三  
盛夫  
義明  
和宏  
正彦  
哲男  
美津子  
美惠子  
芳江  
弘華  
勝弘  
千賀子  
和郎  
利博  
ひとみ  
武彦  
正和

日焼けして行水を待つ六甲山  
 キモカワのアマビエ様に願掛ける  
 ユーチューバー儲かりますか本当に  
 誕生日ひとつゴールが近くなる  
 あらいやだまた似た人を好きになる  
 この暑さ蛇口ひねればお湯が出る

柳柳塔まつえ吟社(鳥取)相見 柳歩報

飛び乗ってゆつくり食べるあご野焼き  
 負けるなと決勝戦へ檄が飛ぶ  
 いい人に逢う飛ぶように飛ぶように  
 飛んでつた帽子のことは霧の中  
 国訛聞いて心は里へ飛ぶ  
 デマが飛ぶ七十五日で風になる  
 わたくしの濁りを澄ます鐘鳴らす  
 学校のチャイムがひびく日々となり  
 数センチ終わりを縫った赤い糸  
 つぎはぎをパッチワークと申します  
 ショーのことも縫いのマスク街歩く  
 針を持つことも遠のく世の流れ  
 悔しさの傷口を縫う荒れた海  
 袋縫い解くとほろり独り言  
 本人は気付いていない加齢臭  
 よく言えば人間くさい田舎者  
 人間の臭いが消えてお骨揚げ  
 臭い金ばらまく奴の黒い腹  
 うちあげてください白いTシャツに  
 白紙にも透かしのいろが入れてある  
 白だけの絵の具で米は何描く

柳柳藤井寺(大阪) 太田扶美代報

とほけてはいないピントが合わぬだけ  
 久仁雄

(蘭)洋一

知らんぷりで噂を一つ止めました  
 人の輪へちよつととほけて仲間入り  
 挽回する勇氣ついてくる度胸  
 挽回を諦め終章の閉か  
 あの人はおとほけ得意芸のうち  
 さよかさよか覚えてまへんあと祖母  
 睡眠を環状線で補強する  
 分の悪い話だここはとほけてとく  
 とほけてはいません呆けているので  
 好々爺然としている古狸  
 時々とはげる独楽を持っている  
 V字書いてよ日本の経済力  
 スタミナに自信あるの迫力  
 挽回はあきらめた世帯主  
 輪の中にとほけた人も居て楽し  
 愛犬のとほけた顔に癒やされる  
 おとほけが通じぬ妻の取り調べ  
 場の空気とはげる事も思い遣り  
 謝ると何の事かと友とはげ  
 客足の挽回願う招き猫  
 悔しさをばねに貫つた社長賞  
 九回裏たかが20点差やないか  
 とほけるのが可愛いときと憎いとき  
 人生の波のまにまにもり返す  
 今ならば挽回できる知恵はある  
 大阪はとほけた味で笑いつける  
 長生きの老父が幸せ芝居する

川柳塔なら 大久保眞澄報

良いご趣味ですねと言われおごらされ  
 カウンターひとり趣旅つ美女  
 野趣豊か言葉どおりの里に住む

ひらかなの趣のある見舞い状  
 趣味の欄三日習ったフラメンコ  
 マスクにもほんのり透ける趣味の良さ  
 意趣返ししてもされても残る激  
 熊と棲む不便に耐えて野趣が好き  
 野趣豊かAI達者議論好き  
 一人居の一輪挿しにある気高  
 胡座か息吹聞き入る中宮寺  
 昔の句こんなない句も作れた  
 優しと不安夫も神様も  
 戦争への疑惑八月のあの日から  
 疑惑の目コロナの闇とすれ違う  
 疑問符をつけて流れて行く月日  
 疑問が晴れちよつと温めの茶を入れる  
 疑心暗鬼膨らませつと刻む葱  
 おじいさんどうぞと席譲られる  
 そのお首立ち入り禁ず悪しからず  
 おせっかい詰め合わせ売る週刊紙  
 子育ての世話焼きに来るお姑さま  
 隣人の異変を覚るおせっかい  
 肩車じいちゃんこがハゲてるよ  
 頼んでもないのに余命数えられ  
 ひっそりと飲みたい時もあるのです  
 ため息にさつと食いつくおせっかい  
 閉じたままの雨戸気になり電話する  
 話んたよ言われなくても分かつてる  
 熊躰に龍角散を持つて行く  
 先生にアドバイスする参観日  
 キリストに神の教えを説く和尚  
 死に水をとるこれが最後のおせっかい  
 女郎花ふりがな横に振つてある  
 赤ちゃんは出来はらへんの欲しないの

婦美枝  
 大子  
 香代子  
 フジ子  
 正義  
 シマ子  
 シマ子  
 六子  
 美代子  
 いさお  
 進  
 しげ子  
 みつこ  
 武志  
 勝弘  
 ゆみ子  
 喜代子  
 かずお  
 ひろ子  
 一歩  
 俣子  
 ちづ子  
 まつお  
 まつお  
 典子  
 一文  
 絹子  
 キーキ  
 扶美代  
 保州  
 武人  
 かずお  
 昭美  
 雅彦  
 則彦  
 壽之  
 國治  
 史郎  
 常久  
 行久  
 修  
 奏子  
 文聡  
 富子  
 甚之市  
 万紗子  
 元子  
 いさお  
 昌代  
 和夫  
 ひろ子  
 久仁雄  
 孝志  
 千代  
 平美智子  
 憲彦  
 江里彦  
 一歩  
 敬介  
 貫一  
 壽峰  
 順啓  
 楓楽

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔打吹	14日(土) 13時30分締切 峠・落ちる・ぼちぼち・席題	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
川柳ねやがわ	15日(日)を誌上句会に(20日締切) おもしろい・好調・安心 口止め・渦	〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳藤井寺	15日(日) 14時締切 おろおろ・垣根・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5-8-20-303 鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	16日(月) 13時50分締切 魔法・急ぐ・きらきら・自由吟	豊中市立中央公民館 3F 阪急宝塚線「曾根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川柳さんだ	17日(火) 休会いたします	〒669-1545 三田市狭間が丘5-10-19 谷 祐康
川柳たちばな	20日(金) 13時45分締切 印象吟・指(互選)・もがく 自由吟	立花北生涯学習プラザ(尼崎市塚口町3-39-7) 06-6422-6741 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸和田川柳会	21日(土)を誌上句会に 黄・舞う・遠い・ドラマ	〒596-0076 岸和田市野田町2-13-19 中岡香代
川柳塔みちのく	21日(土) 17時締切 温・A I・渋い	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」TEL0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
はびきの市川柳会	22日(日) 14時締切 名簿・貫く・ひたすら・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車 北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川柳ふうもん社	22日(日) 13時から 自由吟・プラス・感触・娘 席題	県民ふれあい会館 4F 鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪川柳会	投句句会 24日(火) 締切 ゆるい・都会・わめく そろそろ・雑詠	〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901 松岡 篤
川柳塔すみよし	28日(土) 14時15分締切 壁・打つ・うきうき	住吉区役所内 住吉公民館 2F 〒580-0026 松原市天美我堂3-130-2-404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	28日(土) 13時15分締切 文化・みかん・コップ	和歌山商工会議所 4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛

★上記は年初計画です。諸般の事情上、詳細は各柳社にお問い合わせください。

# 11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な ら	投句句会 10月31日締切ました	〒633-0054 桜井市阿部787 安土理恵
城北 川柳会	7日(土) 14時締切 嵌める・めちやめちや・乾杯 自由吟	旭区老人福祉センター 3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳 とんだばやし 富柳会	7日(土) 14時締切 外・余韻	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064 富田林市不動ヶ丘8-31 山野寿之
川柳塔 わかやま 吟社	7日(土) 14時10分締切 兼題=頑固・少・ギャグ 課題吟=体	和歌山商工会議所 4階 和歌山市西丁丁36 兼題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫
倉吉 川柳会	7日(土) 14時締切 船・しづく・上げる・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつ え社	投句句会 10月30日締切ました	〒690-1223 松江市美保岡町笠浦222-1 相見柳歩
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 冬眠・ぶつぶつ・軋む・雑詠	八尾市安中町3-5-1 渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 さ かい	投句句会 9日(月)締切 土壇場・見つめる・戛 折句:う・え・の	〒599-8103 堺市東区菩提町5-171 矢倉五月
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 騙す・幸せ・堂堂・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830 福田正彦
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 映画・休む・せめて	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池 螢池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 塗る・騒ぐ・ちらちら・自由吟	尼崎市女性センター・トレビエ 2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 怪しい・昔・世間・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2F) メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3-6 木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	休会	〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲 川柳会	投句句会 11月12日締切 音・我慢・丸い・追う	〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4-11-11 上田和宏

# 編集後記

★月冨えてくる酒冨えてくる独り 薫風

★お待たせ致しました。六賞発表号をお届けいたします。年々応募者の減少していくことを寂しく残念に思っています。大きなお世話、個人の自由、ほっといて、と言われそうだが、それでも敢えてお尋ねしたい。「なぜ応募されないのですか」。ご自分の作品を見直す絶好の機会である。ぜひ来年こそはご参加頂きたい。選者の皆さん、有難うございました。受賞者の皆さん、おめでとうございました。コロナのために表彰の場が設けられないことを残念に思います。

★薫風先生の句は句会でも大会でも抜けることが少なかったように思う。あるとき先生にお尋ねした。「先生、投句されていますか」。先生は一言

「出してるよ」。いままえば随分失礼な質問ではある。先生はどちらかと言えば寡作であったが、句会でも選者に迎合した句はお出しにならなかつた。今月の目次下をお読みただきましたか。「私は、路郎先生に初歩の時代から、作者も選者も、常に修羅場を潜っていることを教えられた」には、胸を衝かれた。いのちである一句を生むには、どれだけの血を流し、修羅を潜らねばならないのだらう。「麻生路郎読本」を紐解き、路郎師と向き合いたい秋の夜長である。

★繁文繚礼・匡救・激湍・族生・鞆鼓・揣摩・神商・咫尺・譎詐・攀柳・寛々・稜々：恥ずかしながら読めない。読めても意味が判らない。三島由紀夫「豊饒の海」全4巻辞書を片手に読み直している。若いころには読み飛ばしていたのか、いま読み直し

## 事務所で学んだこと

10年ほどまえのこと、西出楓葉相談役とのご縁で、川柳塔本社事務所をお手伝いすることになりました。専業主婦だった私には全く新しい世界でした。

毎月15日までに送られてくる投句を整理し、各選者に送る。問い合わせの電話に調べ答え、帳面の整理をする。同人、誌友のお名前も覚えねばならない。

戸惑いながらひとつづつ仕事を

覚えてゆきました。計算ミスをしたり、各種連絡の不振、不注意による見落とし等々、青くなつたり赤くなつたりしてきました。

毎月の「川柳塔」誌が出来上がるまでの行程を知ることにより、大事に楽しく読もうと思えました。家庭とは全く異なる環境で、厳しくもまた掛け替えのない経験させて頂いた10年でした。本当に有難うございました。

(原田すみ子)

## ひとつこと

ながら、綺羅星のごとく「菌」を使わないで下さい。散りばめられた漢語や古語、凝りに凝った文体や修辭に立ち止まるばかり。三島が決起したあの日の鳥肌たった瞬間を今も覚えていて。三島由紀夫没後50年の秋。私も充分に老いた。(朱夏)

△新型コロナウイルスは句意により使い分けに注意してください。  
「Go To Eat」  
「ワイズコロナ」  
「With コロナ」  
「ウーバーイーツ」  
△新型コロナウイルスは別のものでも、このシチュウソクにも2種類があるようです。△次の言葉も、編集時に、作句時に大文字、小文字、英字、カタカナを確認いただき、誤字脱字の無き状態に落ち着くこと。ようお願ひ致します。

(憲彦)

## 作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島 蘭 幸 選  
 水煙抄 (8句) 西出 楓 楽 選  
 愛染帖 (2句) 新家 完 司 選  
 檸檬抄「覚悟」 (2句) 石橋 芳 山 共選  
 古今堂 蕉 子 選  
 インスレクションナビ (2句) 大西 泰 世 選  
 藤井 宏 造 選  
 一路集 (2句) 「自信」 森 井 宏 造 選  
 「ベル」 西 茜 選  
 初歩教室「コピー」 (3句) 居谷 真理子 担当  
 初歩教室「コピー」は2月号発表

2月号  
 檸檬抄「ゆらゆら」  
 一路集「ふっくら」「休む」  
 初歩教室「発見」

## お知らせ

本社11月旬会は誌上旬会として開催、10月31日締切りました。発表は1月号です。

新型コロナウイルス感染症と共にインフルエンザの流行も懸念されており、三密を避け、うがい、手洗い、消毒、マスクを忘れず、ご安全にお過ごしください。

本社12月旬会は誌上大会です

詳細は川柳塔11月号93頁ご参照

投句締切日11月30日、発表2月号

兼題「味わう」「ルール」「はっさり」「沈む」「生涯」

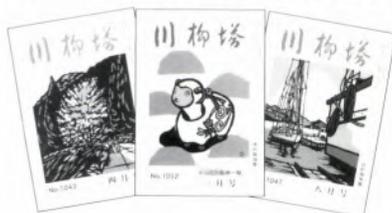
## 川柳塔柳篋

3冊 送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

川柳・俳句・エッセイ・小説  
 新聞・広告・ポスター・伝票等

あなたの思いをかたちにします。



## 美研アート

〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10

TEL (06) 4800-3018

FAX (06) 4800-3028

E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

定価 八百円 (送料100円)

半年分 五千円 (送料共)  
 一年分 九千八百円 (同)

二〇二〇年(令和二年)十一月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七  
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 67791349 ○番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

オニザキのプレミアムロースト

# つむぎごま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しつかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセルズ  
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

令和三年十一月一日発行 毎月一日発行  
創刊大正十三年 通巻二二三号

川柳塔

十一月号

定価 八百円 (送料 百円)

## 橘詰農園の味好みかん

～家族で作り上げるこだわりの味～



健康なみかんの木から採れる絶品

余韻に浸れるほどの「コク」をお楽しみ下さい

〒649-0141 和歌山県海南市下津町小南 349

TEL & FAX 073-492-1692

E-mail beetrus@nifty.com

http://www.hashizume-nouen.com

